
疾風! ガイアエグゼリオン

勝田圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

疾風！ ガイアエグゼリオン

【Nコード】

N2582F

【作者名】

勝田圭

【あらすじ】

ある日、地球は高度な技術を持つ宇宙人よりの襲撃を受ける。しかし、その宇宙人達は自分らの持つ技術力とは反対に、常識で考えられないほどにアホだった。その宇宙人を迎え撃つのは、以前に雑用メカとしてマスコミに取り上げられたことのある人型戦闘兵器ガイアエグゼリオン。アホな宇宙人との戦いの果てにあるものは・

第一章 宇宙よりの襲来、恐怖のインケン星人

1

優奈は辞書を本棚にしまうと、勉強机には戻らずに、脇にある窓を開け、少し窓枠から身を乗り出して空を見上げた。

英単語や数式、法則、などが脳の中で群雄割拠している朦朧とした頭に夜気の寒さが心地よい。そして、視界に広がる満天の星空が心に気持ちよい。昨今、大気汚染により綺麗な星空を観られるところが減って来ていると言う。ここF県華鳴市はまださほど汚染に侵略されてはいない。だから、冬は空が澄み渡り、星々をかなりはっきりと視界に捉えることが出来るのだった。

「おい、ゆうなーっ」

近所の男の子達の声に、優奈は視線を星空から眼下へと急下降。「なんだ、ケン坊に学にゴンに佐助に裕太にとも子ちゃん。バット、グローブなんか持って……こんなに暗いのに。そっか、今帰るのだ」

暗いと言っても五時を少し過ぎたところだ。山に囲まれた華鳴市は、太陽の沈むのが早いのである。

「これからだよ。優奈も野球しようぜ」

メンバーのリーダー格であるケン坊が言う。ぼさぼさ頭で元氣がよそうな小学六年生だ。

「ごめんね。今日はいろいろあつて勉強が遅れてるんだ。また今度遊んであげるね」

優奈は笑みを向けながら、両手を合わせ、謝った。

「おれ様の魔球が恐くなつたか。この前の無様な三振がすごく恥ずかしかったんだろ」

「ぶざ……言つとくけど、あたしは弱い女性とはいえ、高校生なんだよ。お子様相手に本気だせると思う？」

「よく言っわ。ゆくぞ、みなもの者」

ケン坊は腕を組み、ふっふつと笑いながら去っていった。みな優奈に手を振り、そしてケン坊のあとに続いていく。

「ほんとに小学生かあいつは。……いかにいかに、休憩終わり、勉強しなきゃ」

がばと伏せるように机に向かい直す優奈。髪がふわりと風になびいた。優奈の髪の毛はさらさらと柔らかそうで、そして初めて見る誰もが驚くほどに真つ赤な色をしている。何故真つ赤にしているのと問われる事もあるが、単にわざわざ染めていないだけの話だ。小学生の頃は、他のみんなと違うというだけの理由でいじめられたりもしたが、今は自分のチャームポイントだと気に入っている。

優奈はまだ高校一年生だが、大学受験の計画は自分でしっかりと立てていた。父親は家の商売を継がせたがっているのだが、彼女にはそのつもりはなかった。普通に大学に行き、普通のOLにでもなり、普通の男性と普通に結婚し、子供は二人か三人、ゆったりとした老後を送り、子とたくさん孫に囲まれて死んでいく。そんな普通の人生でいい。

普通ではないことが一つだけあるのだが、それが並外れて普通でないため、優奈は、それ以外は、人一倍普通に生きたいのだ。

受験のことを頭に入れているとはいえ、優奈は自他ともに認める元気な女の子。だから、しっかり遊ぶために、しっかりと勉強をしているのだ。それなのに今日は朝に仕事が入って、授業にほとんど出られなかった。毎日のノルマはきちつとこなしたいので、今日は遅くまで勉強しなければ。

ノックの音。優奈は一瞬、体をびくりと振るわせたが、「優奈ちゃん、入るわね」と優しい女性の声と同時に胸を撫で下ろす。父や祖母が、また、仕事を手伝えといいに来たのかと思ったのだ。

入って来たのは髪の毛の長い、二十代半ばの女性。遠山由利香である。祖母の妹の孫で、三年前に結婚して旦那と一緒にここで暮らしている。

「果物持って来たよ。勉強大変だけど頑張ってね」

由利香はお盆を机に置き、出ていった。「勉強頑張つて」由利香のこの言葉を聞いたたびに、優奈は単純に感激してしまう。優奈の人生計画の理解者は由利香と伸也の夫婦だけなのだ。

2

優奈はトイレに行くため、ドテラを羽織って階段を降りる。

「お、優奈、よいタイミングで降りて来た。仕事手伝え」

髭面の、熊のような大男に声をかけられた。

こっそりと降りたつもりだったのに、階段がぎいぎいと軋むので、気づかれてしまったのだ。

いつもなら断れずに遅くまで仕事をさせられてしまうのだが、今日の優奈は由利香に元気づけられ強気だった。

「今日、昼に仕事あったでしょ。だから、全然勉強進んでないの。

だから、やだ。勉強するの！」

「ならば、話題の格闘ゲーム『ストリート・バトル2』で勝負だ。おれに勝ったら見逃してやろう」

優奈、右手で左肩を軽く揉みながらふつとバカにしたような笑い。

「まだ懲りてないの？ それくらいなら、数分でカタつくし、息抜きにいいか」

しかしその数分後、優奈は余裕綽々だった過去の自分を恨むことになる。

ミカン箱の上の十四インチテレビに、二人の格闘家が映っている。派手なピンクの道着姿の女格闘家がVサインをしながら、可愛らしい声をあげて飛び跳ねている。足下には、プロレスラーらしい赤いパンツードの筋肉質の大男が横たわっている。

「負けた……」

優奈は信じられない光景を目の当たりにし、呆然としている。

源三郎は自慢の口髭を引っ張りながら、敗者へのあざけりの視線を優奈に送った。

「でも……なんか、変だな」

しつくりこない。

「実はな、優奈よ、おれ様は毎回お前に負けてしまう悔しさのあまり、攻略本を立ち読みしまくり、メモしまくり、子供に聞いたりなどして、ウラワザをいろいろと学んだのだ」

優奈は源三郎のそばに置いてあるメモを手にとった。

「普通を買え！ 恥ずかしいな、いい年齢のオヤジがさ。……どれどれ、『防御力を倍増する方法』『敵に絶対投げ勝つ秘密コマンド』『敵を必ず気絶させられるコマンド』……って、インチキばかりじゃないか」

「勝ちだもん」

「髭面で何がモンよ。ひきょーだ、インケンだ、ずるいずるい、無効試合」

優奈は仕事の手伝いを断固拒否したが、いつもの事ながら父親の詐欺師のような話術に打ち勝つことは出来なかった。

「あと三十件分計算したら、息抜きに少し勉強していいぞ」

「黙れ、このペテン師。あ、計算間違った。なんで、ここ、パソコンどころか電卓もないの？ あんなものがあるくらいなんだから、それくらいあってもいいのに。これからはね、パソコンの時代だよ。そのうち、一家に一台の時代が来るよ」

渋々と、そろばんによる計算をしないおす。

ここは「有限会社^{ひだか}緋鷹商事」のオフィス。といっても、普通の民家を一部改築しただけだし、掘り炬燵のある純和風な居間と直結しており、その境もあいまいなため、どうも優奈には、仕事場という気がしない。

源三郎が電話を受けている。

なにか取り引き上のクレームのようだ。源三郎はべらべらと矢継ぎ早にまくしたて、冷静に聞いてみると支離滅裂なことを言っている。いつも、この手で、強引に押し切ってしまうのだ。「三寸不爛の舌ってのは、こういうのを言うんだろっな」優奈はしみじみ思う。

奥の居間を見ると、祖母のヨネが掘り炬燵にあたり、テレビに夢中になりながらも手は器用に素早くそろばんを弾いている。優奈は彼女の仕事を手伝っているのだった。

ヨネの妹の孫のムコ、遠山伸也は戻って来るとまた出かけて、と営業に忙しい。彼の妻である由利香は、居間にある電話を置き、困った顔をしている。

「どうした、由利香ちゃん」

源三郎が声をかけた。

「いえ、明日の朝にわたしと打ち合わせのために会う予定だったお客様が、どうしても今でなければ都合がつかないと仰るので……それはいいんですけど、そろそろお買い物にいく時間なのに」

「はい、あたし、買い物行つてきまーす」

手をあげて嬉しそうに立ち上がる優奈。

「いいの？」

「うん。急な仕事が入っちゃったんじゃ、しょうがないもんね」

これで仕事の手伝いをうやむやにして、帰って来てから勉強できる。ヨネに書類を返し、買い物カゴとメモを由利香から受け取る。

由利香が片目を閉じ、優奈に耳打ちする。「ほんとは、外出てる伸也さんに頼んで、直接行ってもらってもよかったんだけどね」

すぐに勉強に戻るようという、由利香の助け船だったのだ。

数少ない理解者の優しい行為に感激し、優奈の瞳がみるみるうちに潤んでくる。

3

少女が歩いている。

肩まであるさらさらとした赤い髪が、歩調にあわせて揺れている。
ひだかゆうな
緋鷹優奈である。

身長一五四、五センチくらい。脂肪があまりなく、すらりとした体型をしている。

青いジーンズのズボンに、オレンジのトレーナー、その上に赤い

ジャンパーを着ている。マフラーに手袋、という重装備だ。

緋鷹商事のある商店街を出て、鼻歌まじりに別の商店街へと向かう。近所の商店街にあるスーパーは野菜の価格が高いのだ。

途中にある空き地で、さっきの子供達が野球をして遊んでいた。もう空は真っ暗だというのに、街灯のもと元氣一杯である。何人か知らない子もいる。暗がりによく分らないが、六対六くらいか。三角ベースみたいだ。

「あ、優奈だ。なんだ、入れてもらいたくなかったか。おれも、また、あの豪快な空振り見たかったんだ」

ピッチャー……ケン坊が意地悪く言う。

「ざんね〜ん。買い物途中で通りかかっただけです。あんたらよくやるね、こんな暗いのに」

ケン坊と敵チームになっっているらしい佐助が、優奈のところへ歩いて来た。

「ねえ、優奈。一打席だけでもいいから代打やってよ」

「え、まあ、一打席だけなら」

「絶対打ってよ、応援しているからさ」

「うん、頑張ってみる。ありがとう」

「優奈が今度打席に立った時、打てるか空振りかって賭けで、おれ、打てる方にかけてちゃったんだから。高いレートに目がくらんで。ちよつと後悔してるけど」

瞬間的に最大値に達する脱力感。なんとかもちなおした。

「……ま、いいけど。バット貸して」

まったく今どきの子供は、とぶつぶついいながら、打席に立つ。

ケン坊がボールを投げる。小学生にしては良い球を投げる。だが、優奈にはスローに見えてしかたがない。……はずなのに、

「しまった、当てちゃった。ぼけつとしてた」

子供達にはそのスイングがまったく見えなかった。バットに当たったボールはまるで破裂するような音を立て、消えてしまった。唖然とする子供達。探しても見つからないだろう。見つかったと

しても、使い物にはなるまい。優奈は自分の迂闊さを後悔した。

「ごめんね。ボール、弁償するよ」

「いいよいいよ、ただの安物の軟球だし、拾ったもんだから。まだあるし。まあ、高校生だからな、マグレでも当たりや飛ぶな」

びつくりしながらも、強がるケン坊。やはり、あれに乗るものは違うのだろうか。ドブさらいなどの雑用しかしてないくせに。

「なんだ、あれは」

子供達の一人が指を差した。その方向に目をやると、何やら見たこともないような不思議なオレンジ色の光が瞬いている。

「こっちに近づいてないか」

「気のせいだろ」

気のせいではなかった。それはゆつくりと、いや、遠いせいでよく分からなかっただけで、それは恐ろしいまでの速度で近づいていた。

「みんな、伏せてっ」

優奈は叫びながら、近くにいた数人の頭を押さえ、地面に倒れ込んだ。

激しい風に、みんなの髪がばさばさとなびく。頭上を何かが通過過ぎていったのだ。

突然の爆音に、みな、頭を上げる。

遠く……ビル等の多い市の中心部のほうが明るくなった。

燃えていた。

「また来たぞ」

みな、また通り過ぎるものと思っていた。だが……

それは彼らを攻撃してきたのである。

空気を切り裂くような激しい、それでいて少し緊迫感に欠ける音。理科の静電気実験の時のビリビリという音の爆音のようなレベルにまで高めたような感じた。

それとほとんど同時に優奈は動き、ケン坊を突き飛ばしていた。一瞬前までケン坊のいた地点に、雷のような眩しい光の線が落ち、

そして地面がえぐられた。

「UFOだ……」

現在UFOの定義は二種類あるだろう。未確認飛行物体という本来の意味。それと、アダムスキー型の形状を指す場合だ。現在上空を飛行している物体は、どちらの意味でもUFOであった。

独創性のカケラもない。子供の頃に本で見た物と全く同じ形をしている。山のように盛り上がった円盤である。下部は平たく、半球が三つくっついている。今の落雷は、この円盤からもたらされたものようだった。

二機のUFOがからかうように中空を旋回していた。

「なんなのよ、この話の展開は。……あたしが囿になるから、みんな逃げて」

優奈は小石を拾うと、迷うことなく走り出す。集団から出た優奈を、また雷のような光線が襲う。優奈は、四分の一ずつの運と勘、そして残る半分は卓抜した反射神経と運動能力で避けた。ケン坊がなにやら喚き叫んでいる。やっと茫然自失とした状態から覚め、逃げようとしているようだ。

優奈は、UFOが自分だけを狙うようにと、上空に小石を投げた。UFOに当たったのかどうかは分からない。子供達は無事に逃げられそうだった。自分のみを執拗に狙ってくるようになったから。

優奈は幾条もの光線の間をかい潜っていた。

ケン坊は走りながら、ふと優奈が気になり、振り返った。優奈の動きは人間技とは思えなかった。それも、命がけだというのに、なんだか楽しげにも見えた。それほどまでに軽快な動きだった。もちろん当の本人にはそんなつもりは毛頭なかった。ただただ、「おとうちゃん、この三年間優奈を鍛えてくれてありがとう」と珍しく源三郎に感謝するばかりであった。

子供達は、激しい爆発音を聞き、再び振り返った。なんと、二機の円盤が折り重なるように墜落炎上していた。優奈が巧みに鉢合わせさせたのだ。

考えてみれば、たいしたことはなかったのかも知れない（もちろん、普通の人間にはたいしたことではあるが）。相手は油断していたどころか、楽しんでいた。そこを逆にからかわれれば、激怒するのは当然である。それが優奈の勝利へと繋がったのだ。しかし、操縦していたのはいったい何者だろう。

もう買い物どころではなくなってしまった。家に急いで帰らねば。優奈は一息つくともた走り出した。

商店街を駆け抜けていく優奈。突然の飛行物体に逃げまどう群衆の中を縫うように疾走していく。

4

「ただいまっ」

優奈はスニーカーを脱ぎ散らかして、慌ただしく上がり込む。

「みんな、大丈夫？ UFOが攻めてきたよ、UFO、空飛ぶ円盤だよ。なんか情報っ、テレビテレビ……あ、やってるじゃん」

すでにみんな仕事を休め、テレビを見ているところだった。

優奈は腰を下ろした。

「優奈、そんな呑気にしてる場合じゃないだろ、このすぐそばで起きているんだぞ。普通は、逃げようとパニックになる事態だろうが」と、源三郎、お茶をすすりながら、テレビ画面をじっと見つめている。家族のみんなも思い思いの物を口にしてる。

「……あんたらに言われたくない。……で、なんなのよ、これは」
「もう一度繰り返しします。これがその宇宙人からのメッセージです」と、テレビの画面一杯に、黒い髪、白い肌の、根の暗そうな顔の男が映った。背景はブルー一色。シチュエーションからして、やはり宇宙人なのだろうか。でも、とても地球人に似ている。アジア的と言っべきなのか、日本人と紹介されても疑う者はいないだろう。地球人でいうところの三十歳くらいの容姿か。

「我々は」と、その男が声を発した。

「おお、喋った！！ しかも日本語」

茶化しているのか何なのか優奈の態度もなんだかよく分からない。とりあえずお茶すすって一息。今日もお茶が美味しい。

「我々はインケン星人。地球は今から我々の物となる。逆らうことは許さない。すぐ我々にこの星の支配権を明け渡すのだ」

優奈は、ぷうぷうと激しくお茶を吹き出した。

「あははは、何この人、大昔のアニメよりもっと古くさいこと言ってるよ」

優奈は腹をかかえて笑っている。あまりに非現実的なために、頭がどうしても深刻な事態だと認識してくれない。ついさきほど、彼らと遭遇し、戦ったばかりだというのに。

「地球を狙う侵略者か……よし優奈、覚悟はいいか。出動だ」

源三郎はかたく拳を握り、立ち上がった。

「なな、なんでそうなるの！」唐突な父の叫びに、優奈は飛び上がった。「依頼の電話来るまで、あれ動かしちゃダメだっていつも……それに、地球侵略だよ、自衛隊がやることでしょ。あたし、そんなことやったことないし、出来るわけないよ！」

テレビの中のこんな冗談みたいなこと、信じられないし、関わりたくもない。あくまで自分は普通の少女でいたいのだ。

「やるしかないんだ。聞け、優奈、これは、仕事じゃない。我々の使命なのだ」

握り拳を作り力説する源三郎。

「……分かったよ、おとうちゃん」優奈はいつになく真面目な源三郎を訝り、ぶつぶつ文句言いながら立ち上がる。「まったくヒーロー気分なんだから……」

画面には、自衛隊対UFOの対決が映しだされていた。画面が真っ白に光るたびに、テレビの音声ではない、本物の轟音がびりびりと体を振るわせる。そう、この近くで起きていることなのである。さきほど優奈自身も命を危険にさらしたばかりであった。

「エグゼリオン！」

家の前の道路である。優奈の叫びに地が震えた。激しい地割れ、アスファルトが裂けた。その裂け目から、巨大な頭がせり上がってくる。やがてその巨体は全身をみなの前に晒した。

天を突くかのような人型巨大機動兵器であった。

人一倍普通に生きていきたい優奈の人生を、人一倍普通でないものにしているもの。

その名を、ガイア・エグゼリオンという。SFアニメに出てくる戦闘用人型メカの活躍とは程遠く、今まで遭難者救助や自殺しようとする者の救助など地味な仕事ばかりやってきた。数年前までは、源三郎が操縦していたのだが、体を悪くしてしまい、乗れない体になってしまったのだ。

人型のメカにしてはスリムな体躯をしており、縦横の比率など平均的な成人のものと大差はなかった。操縦者の精神を機体と同調させる仕組みのため、人間の体格に近いほうが何かと作業がしやすいのである。

白を基調としたカラーリング。頭部、胸部、脚部、肩など装甲が部分的に深紅に彩られ、鋭い雰囲気を生み出している。背中にはリュックサックを背負ったようなデザイン、そこには飛行用のバーニアが付いていたが、この十五・六メートルの巨体を浮かせられるのか誰もが疑問に思うほどに、そのリュックサックは小さかった。

エグゼリオンの右手の上に優奈は立っていた。

胸部の二重になったハッチが開く。

優奈は操縦席に乗り込んだ。

操縦席といっても、直径二メートルの球体となっている暗い空間に、透明な足場があるだけだが。座席もあるのだが、優奈はまず使わないので、壁に収納してある。作業の合間にお弁当を食べる時くらいしか使うことはない。

球の内側に、外の様子が映しだされる。全方位モニターとなっているのだ。

光の走査線が交差し、優奈の体が激しく点滅するように光る。

同調率、九十%クリア。

「エグゼリオンの初陣だな」

源三郎の顔が、モニターの一部分の邪魔にならぬ箇所映る。

「まあ、こうなったらね。ちよつとやる気が出てきた。まかせいてよ。……おっと、あぶない」

優奈はブイサインを出そうとして、慌てて思いとどまった。すでにエグゼリオンと同調し、体の動きも同期させているため、腕を前に突き出したりなどしたら、目の前の建物を壊してしまう。

「ガイア・エグゼリオン……飛翔」

操縦席の中、優奈は軽く身を屈め、呟いた。人差し指、中指、人差し指と、順に小さく指を動かす。これらの動作、台詞、すべてが誤動作を防ぐためのものなのである。空を飛ぶことの指令は、本来ならば思念だけで十分にエグゼリオンに伝えることが出来る。ただ、人の精神はいつ乱れるか分からない。だから、エグゼリオンが取る基本的なアクションのほとんどに、言葉や動作などからなるパターンが用意されている。それら数百にもおよぶパターンを優奈は全て暗記している。たまに間違えることもあるが。

エグゼリオンの巨体がふわりと浮き上がった。バーニアから吹き出るのは小さな炎であったが、機体は突如急加速し凄まじい速度で上昇した。

完全に航空力学を無視の何とも異様な光景だが、目の前に起きている以上はそれが事実であった。

さて、UFOと自衛隊戦闘機及び戦車隊との戦いである。一方的に損害を増やしていただけの自衛隊側であったが、UFOの一機が爆発したことで、光明を見いだすことが出来た。我々の科学でも、立ち向かうことができるのだ、宇宙人の科学力とて無敵ではないのだ、と。

しかしその爆発を起こした原因が何なのか分かると、彼らの脳裏

に訪れたのは混乱以外の何ものでもなかった。写真週刊誌や婦人ゴシップ雑誌等で一時世間を騒がせたことのある、雑用に大忙しの人型巨大メカがそこにいたのである。自衛隊側の大半はそれらの記事に、こんなもの単なる道具だ、とそのメカの能力を何も知らぬくせに鼻で笑っていた。自らの権威が落ちることを恐れていたのかも知れない。だが、事實は、その巨大人型メカがUFOをやつつけてしまったのである。しかも記事によると確か乗っているのは十代の少女だったはず。

「街中で、砲撃はやめたほうがいいよ」

戦車隊の上空を飛ぶエグゼリオンから少女の声。

だが、UFOに対抗できる打撃用武器など軍が持っているはずもなく、結局、砲弾に頼るしかないのだった。

エグゼリオンの機体の中で、優奈はボクシングのファイティングポーズのような格好をとっていた。地球側の戦力はこの人型メカだけと判断したUFOの群れ、素早く連動し、エグゼリオンの天地左右前後を取り囲もうとしていた。もちろん、包囲が完成するまで待つてやるつもりなど優奈にはなく、迷わず前方に踏み込み、蹴りを放った。踏み込むといっても、本当に踏み出しては、すぐに操縦席内の壁にぶつかってしまうし、今は飛行中なので、ジェットブースターによる移動となる。これに蹴り、パンチなどを組み合わせることが、どれほど難しいか誰も想像も出来ないだろう。

エグゼリオンによる格闘など初めての優奈だったが、二機目のUFOが火を噴くのを見ていけると確信した。すでに、もう体は慣れてきていた。

一機が、雷のようなビームを飛ばしてきた。さきほど空き地で、生身の体で二機同時に相手をした優奈である。そのビームを放つ瞬間のUFOの動きの癖を見抜いていた優奈は、機体の中で左腕を素早くあげ、右の人差し指を一瞬折り、伸ばした。

「シールド」

動作と音声とにプログラムが反応。左腕に半透明の超電磁エネルギー

ギーによる楯が生じる。その威力はビームを難なく中和する。エグゼリオンはそのビームを放ったUFOに向けて直進する。楯でUFOをぶん殴り（半物質化させることでこんな芸当も出来るのだ）、包围を完全に抜け出る。UFOは、墜落し、爆発した。

楯は、現れた時と同様、音もなく、機体に吸い込まれるように消える。

「さて。敵の力も分かったことだし、本気をだすよ」

まったく無視されている存在の戦車隊の遙か上空、エグゼリオンが空を走った。

思念が確かならばエグゼリオンは思念だけで動かせる。素早い動きを行うには、思念のみの操縦が一番効率が良い。優奈はリラックスした確かな思念で機体を縦横無尽に駆け巡らせ、UFOに接近するや、目にも見えない拳、蹴りを繰り出してゆく。爆音が途絶えることなく続き、あつと言う間にUFOは墜落、全滅していた。

「完全勝利」

優奈はにっこり微笑み、そして勝利のブイサイン！

第二章 恐るべし、マスメディアの怨念

1

薄暗い部屋であつた。

調度品らしき物は一切なく、ただ、白い壁が薄ぼんやりと発光しているだけの殺風景な部屋だ。光源と呼べるものは、どうやらその壁のみのものである。

直径四メートル、高さ五メートルほどの、完全な円錐型というところなり帽子のような部屋は、地球人が見たらさぞかし不気味に思つたであろうが、輪をかけて不気味なのは、その狭い空間の中に十人ほどの男達がみつしりとひしめきあっていることであつた。

全員質素な黒い軍服のようなものを身につけている。胸元にある銀色の装飾の形がそれぞれ異なっている。それぞれの位や役職を表しているのだろうか。彼らはみな一様に血色が悪く、目のまわりにはくまが浮きでている。吹けば飛ぶかのようなひよろひよろとした体型である。

人口過密の狭い空間、中央の男が口を開いた。

「静粛に！」

別に誰も喋つてはいないのだが、彼は、まあとりあえず言つてみた。

「……どうかね、何か、他に意見のあるものは」

と尋ねた。

電波ジャックをし、お茶の間にその覇気の無い顔をさらし、自らをインケン星人と名乗り、侵略宣言を発していた男である。インケン星、第一次地球制圧部隊司令長官、名前をカルロー・コスという。額にしわがより、鼻の穴の広がったその顔は、地球人から見ればすこぶる不細工面であつたろうが、彼らインケン星人から見れば、もつと不細工であつた。上官でなければ、誰も近寄らないところである。

「はい。ご意見！」

むしむしとした空気の中、一人が手を挙げた。

「地球人の仲を切り裂くには、物でつるのが一番です。パパのあげるプレゼントを、我々が先にあげてしまうのはどうでしょう」

覇気の無いなりに自信に満ちた顔を、男は浮かべた。

「悪くはないと思う、いやむしろ非常に優秀な案とさえなくもないな。ただし、難点をあげるならば、やはり金がかかりすぎるというところだな。地球人のチャイルドの好みをマーケティングリサーチせねばならぬし。よって、却下。他には？」

「はい、先生、ご意見！」

彼らのこのようなやりとりを地球人達が知らなかったという事実、それ以上に地球人にとって幸福なことがあるだろうか。もしも地球を侵略しようとしているのがこんな奴らだと、地球人が知っていたならば、彼らの地球侵略に対して真剣に立ち向かう前に、自らに襲い来る非常な脱力感と戦わなければならなかったからである。

2

F県にある華鳴市は八方を山に取り囲まれている盆地で、そこを吹く風の影響が非常に気候が穏やかである。もちろん夏は暑く冬は寒いが、それでも比較的春夏秋冬問わず暮らしやすい。人口は約六万五千。隣の市に通勤する者が多い。典型的な、田舎小都市のベッドタウンだ。住宅地が多く、田畑の閉める割合は近隣の市町村に比べると非常に少ない。

華鳴駅の周辺は、オフィスビル、マンションが並び、あまり娯楽施設は無い。駅から北東の方向、ビルとビルの間隙に校舎が見える。私立華鳴北第二高等学校。華鳴市に二つしかない高校の一つである。学力レベルはそこそ高い。

近くに住む人間の誰もが知っているこの高校にまつわる話としては、野球部が劇的なまでに弱いということである。いったい誰が組んだカードなのか分からないが、リトルリーグのチームと試合をし、

フルメンバーで全力で戦ったにもかかわらず大敗したという事实はたかだか数年前のことだが、すでに永遠に語り継がれるであろう神話と化している。

メインとなる校舎は四階建て、L字型になっている。

三階の窓から、一人の女生徒が自分の席で頬杖をつき、町の景觀を半ば楽しそうに、半ば眠たそうに、どちらにせよ幸せそうな顔で眺めていた。

少女の肌はとても白かったが、不健康そうなイメージと無縁なのは、ただ、その明朗そうな大きな瞳のおかげだろうか。肩まで伸びている髪の毛は、首のあたりで赤いリボンで結ばれているため、正面からだとしョートヘアのように見える。よく注意せねばその赤いリボンに気付かない、それほどに、少女の髪は赤かった。生まれた時から所有物であるにもかかわらず、地毛を黒く染めさせようとする教師が極稀に現れるのだが、少女はそんなアホ教師の言うことを聞くつもりはない。

「ねえねえ、優奈あ」

クラスメイトの一人が少女　緋鷹優奈に声をかけてきた。手に写真週刊誌を持っている。

「こら、優奈つてば」

優奈の両の頬を思いきり引つ張る。頬がぐにぐんと伸びて、つり目になって、優奈とっても馬鹿な顔。

「いへへへ。な、なんだ、好子ちゃんか」

「なんだじゃないでしょ。ほけつとしちゃって」

好子は優奈のほっぺから手を離れた。カラーゲンたっぷりの優奈の頬は、一瞬にしてもとの状態に戻る。

「ちょっと、考え事をね」

「ふーん。優奈でも、そんなことってあるんだ」

「あ、ひどいなあ。優奈ちゃんだって、年頃の可愛い女の子なんだから、いろいろ考えることくらいあるよ」

「自分で言っな。……それより、これ見て。久しぶりにエグゼリオ

ン、本に載ってるね。テレビでも随分騒がれていたし」

「え、そうなんだ。……まあ、それはそうか。以前はビルの解体していただけで、取材されて雑誌に載ったりしたもんね」

雑用メカとして騒がれていたのは、優奈がエグゼリオンに乗り始めた三年ほど前のこと。いつまでも記事にされることもなく、最近 は緋鷹家に取材記者が来ることもなく静かな状態だった。しかし今回は宇宙人の襲来から地球を守ったのである。また騒がれるのも必然と言えば必然であった。

「なあなあ、緋鷹、あのさ……」

好子を押しのけるように、男子生徒が間に入ってくる。ぼさぼさ髪、長身の生徒だ。

「き、金城翼弥くん」

「お前、なんでおれだけいつもフルネームなんだよ。ま、他の奴からは、キンちゃんとか、ジョーヨクとか呼ばれているから、ずっといいけど」

優奈は頭髮の色と変わらないくらい、顔を真っ赤にし、しどろもどろになっている。翼弥は、毎度のことながら、あいかわらず訳が分からず、きよんとしている。ひとり、好子だけが、くすくすと笑いを押し殺している。

「お前、すごいやつだったんだな。なんで黙ってたんだよ」

学校内に優奈のことを知っている者は多いが、情報に疎い金城翼弥は、今回の件ではじめて優奈とエグゼリオンとの関係を知った。今までの優奈へのイメージは、「ソロバンが得意そうな少女」だったのだ。電卓持ち込みが許可されている数学の試験の時に、一人ソロバンを弾いていたから。真実は単に電卓を持っていないだけなのだが。エグゼリオンを知る者は、「あんなメカに乗っているのに何故」とみな不思議がっている。

優奈、頭をかいて、ごまかし笑い。

「……そんな、たいしたことないよ、あたしなんか」

「やっと客観的に自分を見られるようになったようね、緋鷹さん」

ロングヘアー、膝下十センチのスカート、ヘアバンド、香水の匂い（校則違反）、どこから見てもお嬢様といった雰囲気的女生徒が優奈らを見おろし、なんだかエラソウに立っていた。常々気に入らない優奈に対し、照れ隠しの言葉尻をとらえ、今日もさっそく挑んできた。

「吉波さん、優奈が実は内心とっても大好きな翼弥くんの前で、思いきり謙遜してるってのが分かんないのかな。自衛隊が束になっても叶わなかったUFOの群を、ロボットに載ってあつと言う間にやつけたんだよ。誰がどうみても凄いことなのに」

囁いているのだが地声のでっかい好子の声は周囲にまる聞こえ。

「わああ、好子ちゃん、何言ってるのぉ！ あたしは別につ、好きとか嫌いとかっ……」

「……とにかく、これに懲りて少しおとなしくしていることね」

ロングヘアーのお嬢様 吉波瑠璃子は意味の分からない台詞で締めくくる。

「いったい何に懲りると……」

金城君は、他の男子生徒達に呼ばれ席を外した。優奈は、ほつとしたような、残念なような、複雑な表情を浮かべていた。でもまだ胸がドキドキしている。

「いったい何に懲りるなんだって、優奈が」

「わあ！ 好子ちゃん、あんたエスパーかつ！」

吉波瑠璃子は、吉波GCという商事会社の社長の一人娘である。

吉波GCとは、優奈の父親源三郎が勝手にライバル視している会社だ。社長は緋鷹商事など眼中にないのだが、優奈のクラスメイトである瑠璃子は常に優奈に敵意満々である。緋鷹商事の動向調査にも余念がない。「素っ頓狂なボケ面してるクセに、おいしいとこだけ持っていくイヤな性格の女」優奈のことをそんなふうに見ている。

瑠璃子は軽く髪をかきあげた。

「どちらにしても」

何が、どちらにしてもなのか分からない。

「せいぜい、お子さま向け物語のヒロイン役を楽しんでいることね」
高笑いしながら去っていく。

「好子ちゃん。……吉波さん、ようするに何が言いたかったの？」
通訳ブリーズ。

「優奈にいつも文句つけたくてたまらないから、特に何もない日は言うことが支離滅裂になっちゃうんだよ」

優奈と何か事があったり、父の源三郎が何かやらかした時などは、瑠璃子の舌の回ること回ること。すさまじいまでの毒舌の嵐が優奈の全身を直撃する。優奈のところは度を超した貧困家庭で、吹けば飛ぶ零細企業で、うちが仕事を独占しないでおかげで仕事があるのだ、とか、好き勝手なことをいいたいほうだい。マイペース主義である優奈の全く意にかえさない態度に、ますます立腹し、勝手に怒りをエスカレートさせていくのである。

しかし、吉波瑠璃子は知らない。優奈が、素っ頓狂なボケ面さらして平和そうにしているのも、彼女を成長させた小学生中学生の頃の辛く悲しい経験があればこそなのだ。

3

「こら、お前ら、昼休みはとづくに終わってるのに、いつまで喋ってんだ。授業始めつぞ」

予鈴が鳴り五分後、五時限目開始のチャイムと同時に、教室に上下ジャージ姿の男性教師が入ってきた。優奈達の担任、国語担当の藤代明仁、年齢は二八歳。

藤代先生は生徒達から完全に無視されていた。生徒全員、窓際に立ち、遙か遠くの様子をうかがっていた。なんだなんだ、と先生も群れの中に加わった。

「おい、また現れたぞ！！」

「しかも、今日は円盤だけじゃなくて、人型ロボットみたいなのもあるぞ」

「凄い数だな」

「インケンなんとかって言ったっけ」

「つーか、なんで首都に現れないでこんな北国のド田舎に来るんだよ」

「また、自衛隊じゃ全然齒がたたないんじゃない」

その一言に、みんなの視線が赤毛の少女に集中した。

「緋鷹、お前の出番じゃないか」

「緋鷹……地球を護ってくれよ」

「優奈……」

言うほうも言われるほうも、なんだか現実感がない。まだ、この事態そのものがテレビの中だけの話のように感じられるのだ。

優奈、おもわず溜息。あたしは普通に生きたいのに……

「もっ、わかりましたよ。……でも、おとうちゃんに聞いてみないと」

腕時計についている小さなボタンに指先が触れる。ピツ、と電子音。通信機にもなっているのだ。

「あ、おとうちゃん、あのね……」

「喜べ、優奈。ついに、自衛隊から、依頼が来たぞ。この前の無償奉仕が効いたようだ。思いきりふんだくってやれる」

後ろで万歳を叫ぶ緋鷹商事一同の声。恥ずかしい連中だ、と優奈はまた嘆息。

「この前のも、結局は儲けのためですか……」

力が抜けてへなへなとなっている優奈に、男子生徒の一人が声をかけた。

「なあ、緋鷹。なんで、やつら、華鳴市ばかり狙ってくるんだろうな」

「あたしが知るわけない。……自衛隊の到着が遅そうなところだからじゃないの？」

「でも、自衛隊より遥かに強いエグゼリオンがあるじゃないか。この前の攻撃の時に学んだはずだろ」

「エグゼリオンは、一瞬でどこへでも行けるから関係ないよ。まあ、

エグゼリオンについては、むこうは何も知らないんだから無理ないか。……そもそもあのテレビ演説といい、地球をなめてかかっているわけだから、どこを攻めるも何も戦略的な理由なんて何も無いんじゃないの？」優奈は通信機にむかって、「じゃ、おとうちゃん、32608321YQにお願い」

「よし。セット完了。もう座標登録したから次からは校庭にお願いでいいぜ」

「て言うか、エグゼリオンに乗るの、もうこれで終わりにしたいんですけど……」

地面がぐらぐらと揺れ、校庭に亀裂が走る。

「出てくるぞ」

「校庭どころか、校舎前のアスファルトまで碎けて裂けてんのな」

「それが、完全に元に戻ってしまるのが凄いやな」

「俺は、頭にトサカがあれば、もっとカッコいいと思う」

「馬鹿、トサカはないほうがカッコいいよ」

地元民は結構慣れっこの、ガイア・エグゼリオンがその姿を現した。

「それじゃ先生、いつてきまゝす」

「いつてらっしゃい」

藤代先生は軽く手を振る。

優奈は勢いよく窓からエグゼリオンの掌に飛び降り、そこから、胸部にある操縦席に乗り込む。ハッチを閉めようとしたが、大事なことを思いだし、振り返る。

「忘れてた。好子ちゃん、あたしのジャージ取って」

好子、すでに用意していたらしく、すぐに優奈のもとに落ちてくる。

ハッチが閉まった。

優奈がスカート姿の下からズボンをはいていると、

「んなもんいいから、はよ行け」

エグゼリオン操縦席のモニターに映っている源三郎が怒鳴り声を

あげる。

「やだよ。あのさ、前さ、操縦席から出たところを、下にいたカメラマンに撮られちゃって、あれぞ〜ったいパンツ写ったと思う。きつとマニアの雑誌なんかに掲載しちゃって、優奈カワイイから高値で取り引きされたりとかしちゃうかも」

「ふっ。なんだ、お前、知らんのか」

「何が」

源三郎、ふつと苦笑を浮かべながら、何やらごそそと手元を探る。手にした雑誌らしきものを広げた。

「まさにお前の言った通りなんだが、この号、プレミアもので、結構な額で売買されとるぞ」

「ぎゃー、ばかーーーーっ、おとうちゃんやめてよ、頼むから捨ててーっ」

「三万で買え」

「うわ〜、みなさ〜ん、実の娘にユスリですよ〜!! ひどいひどい、児童保護センターに訴えてやる、もうやだよ、こんな親〜。うええええええええええ」

顔を真っ赤にして、涙をポロポロ流して泣き崩れている優奈を見ながら、源三郎はふと邪悪な笑みを浮かべた。その程度の泣き落としには屈しない、必ず優奈から金を巻き上げる、もしくは無料働きの一ヶ月させる、という強い意志がその瞳には現れていた。

と、ヨネが息子の後頭部を、湯飲みで思いきりぶん殴った。悪党はあっけなく地に沈んだ。

「アホはほつといて、早く行きなさい」

「ありがとう〜ん、ひつく……。そいつ殺しといて、ぶえええん」
大泣きしながら出撃するなんとも間抜けな戦うヒロインの姿であった。

エグゼリオンの目にも止まらぬ早技が、敵戦闘機を木っ端微塵に蹴り碎いた。

「おとうちゃんのかー！ー！」

さらに一機が、エグゼリオンの右拳にぶんなぐられて、あっけなく回転し墜落していく。

「エロ親父！ー！」

さらに一機。

「詐欺師、悪党！ー！」

さらに一機。

「悪魔。地獄よりの使者！ー！」

また一機。

「もういっぱい！ー！ー！」

閃光。

爆音。

戦いというには、あまりにも一方的な展開だ。

策謀を巡らすのが好きなわりには、結局は正攻法で来るインケン星人などは、もう優奈とエグゼリオンの敵ではなかった。

戦いは五分とかならなかった。

白い煙を吹き上げるUFO（もう未確認物体ではないし、本当はゼオルース型という名前があるらしいのだが、それよりもこちらのほうがよりしつくり来る形状なので、この表現で通すことにする。

いずれにせよ地球人にはUFOとしか呼ばれていない）の残骸の近くに人がいる。怪我人かも知れないと思い、優奈はエグゼリオンを宙に静止させ、ハッチを開けた。

「大丈夫？」

とたんに、物陰から数人が飛び出してきた。パシャパシャと音が聞こえる。シャッターを切る音だ。

「残念でした」

優奈はべつと舌を出した。

スカートはひらひらとしているが、その下にジャージを履いてい

る。

優奈は呟く。

「また変な雑誌の記者みたいな人がいたけど、新聞記者っぽいものもあるよ。……マスメディアの使命ってのを、分かってんのかなあ」

ピピピ、と警報がなった。モニターに目をやる。遙か遠く、UFOが次々と宇宙戦艦のようなものに引き上げていくのが映っている。モニター上で赤い円で囲まれてマークされている。ぐらぐらと小刻みに揺れており、その異常をエグゼリオンのコンピュータが捉えたのだ。

「ねえ、ヨネばあちゃん」

「なんだい」

モニターに映るヨネの後ろには、まだ源三郎がうつぶせになってのびている。

「ちよつと、あの船の中、調べてくるよ」

「優奈らしくない大胆な発言だねえ」

「嫌だけど、こんなことは早く終わらせたいし、何が目的なのか分かればと思って。……なんかこいつら弱いしさあ……優奈行っちゃいまゝす」

「あ、これ」

優奈はエグゼリオンの空間相互転移法を発動させた。エグゼリオンは今あった場所から溶けるように姿を消した。その瞬間にはもう、インケン星人の戦艦へと取り付いていた。光子力ナイフで船壁を切り裂いた。

エグゼリオンの胸部ハッチが開く。機体を宙に静止させたまま、優奈は、敵戦艦の中へと身を躍らせた。

5

「あたし、インケン星人とやらを舐めてたけど……」思わず腕を組んで考えてしまう。「こいつらこそ、あたしのこと舐めてるわ、

絶対っ」

優奈は真剣にそう思っていた。

戦艦の中を進むはいいが、鉢合わせしても、彼らはぼけっとしていてまったく優奈に気づかないのだ。

「ボケボケして気づかないのはまだいいとして、警報装置も、侵入者撃退装置も働かないなんて……ボケボケも何も、あたし、この船の壁を光子力ナイフで堂々とぶち破って侵入してんのに、気づかないワケないでしょ……あまりのこの脳天気ぶり、罵って気もしないし……でも本当に気づいていないのならそれはそれで、大ボケ具合が神懸かりすぎていて、かえって怖すぎる……」

あれこれ考えながら通路を進んでいく。結局、自身導き出した答えは、「何考えているのか、さっぱり分からん」であった。

角を曲がったところで一人の兵士と出くわした。

「おまえは誰だ、撃つぞー!!」

「やつとマトモな人はつけーん!」

優奈は兵士の顎にハイキックを浴びせていた。

あっさりと兵士は地に沈んだ。

彼は注意力はあったが、動作が非常に緩慢で、ようするに兵士としては結局役に立たない男であった。

「ちよつと安心したと思ったのに……弱すぎる。……まぬけっというのか、なんていうのか。よくもまあこれで、地球侵略しようなんて気になるよね。自分らこそ、いつよその星に侵略されてもおかしくないじゃん。自分らの星が無事なうちに、とっとと帰って無い知恵しばって自衛手段を検討したほうがいいんじゃないの。だいたいね、あたしが本当にその気になれば、あんたら全部ふっ飛ばして、この物語はあつと言う間に終わっちゃうよ、きつと。……やだ、『物語』だなんて吉波さんの口癖うつっちゃった」

ぶつぶつ言いながら進む優奈。

別に呑気にしているわけではない。

優奈は自分の感覚に疑問を抱いていた。自分の五感の中の何かが、

自分をここへ誘ったのである。単に好奇心で乗り込んだわけではなかった。今彼女自身が言ったとおり、単に敵を撃退したいのであれば、わざわざこんなことをする必要もない。戦力差があまりに圧倒的であるため、その気になればエグゼリオンを一暴れさせればすむだけの話だ。

何かが自分を呼んでいるような、そんな気がして、ついつい危険をおかしてここに足を踏み入れてしまったのである。当然、相手を見くびっていたからこそそんな気にもなったわけだが。

通路の雰囲気というのは、以前に優奈がみたことのあるSF映画の宇宙船内と、さほど変わるものではなかった。星や技術レベルがどうであれ、実用面を求めていくと、同じようなものになっていくのだろうか。

なおも進む優奈が足を踏み入れた場所は、敵兵士を捉えておくための牢屋だろうか。

そこには誰もおらず優奈の足音だけがむなしく反響する。かなり巨大な戦艦のようである。牢獄のエリアだけでも果てしなく続くように感じる。

ある扉の前にさしかかった時である。ふと、中に何かの気配を感じた。

「この中に、誰がいる……？」

捕虜か、それとも敵前逃亡の味方兵士か……

「外に誰がいるの？」

意表をつかれてびっくりした。中からも声が聞こえてきた。

「女の子の声……」

優奈は興味を持った。年のほどは分らないが、とにかく少女の声が聞こえたのである。

「下がって」

さすがに適地潜入である。当然優奈は武器を持ってきていた。腰に取り付けたホルスターから、熱線銃を抜くや、扉脇の操作盤を目がけて撃ち放った。一瞬周囲が赤く光り、同時に操作盤が爆発した。

音もなく扉が開くと、そこには、

「ハエがいた……」

「ハエちやうわー!」

身長三〇センチもないくらいの、小さな少女の姿があった。優奈の台詞にペースを乱された少女は、今のは自分の本当の態度じゃないのと言わんばかりに上品そうな咳払いをした。その顔は非情にかわいらしいものであったが、その顔よりも、そしてその小さな体よりも、何よりも見たものを印象付けるのは、その背中に生えている二枚の透けた羽であった。童話の世界から飛び出してきているかのような可愛い装飾のある服を上下すっぽりとまとい、丁寧にその背中はくり抜いてあり、羽がのぞいている。

妖精のような少女は優奈の顔の高さのところで羽ばたき、宙に静止している。

「妖精だ、と言われたことは何度もあるけど……」

ハエと言われたシヨックに悲しそうであった。

「あ、ごめんごめん。ええと、妖精さん」

もう遅いけど、いちおう謝ってみる。

「ま、ここから出してもらったんだし、こちらこそお礼を言わなきゃ。ありがとう。……ところであなたは？ どうしてここに？」

妖精は、優奈に訊ねる。

「うーん、どうしてここにいたかっていうと、簡単に話すのは非常に難しいんだけど。……あたしは、この真下の地上に住んでいる高校生。ごくごく平凡な、平和を愛するどこにでもいそうな女の子、緋鷹優奈です。ちょっとここどうなってるのかなって来てみたんだけど、迷っちゃって……」

「そうなんだ」よその星の普通レベルなど分らないので、妖精は優奈の言うことを鵜呑みにしてしまったようだ。「あたしはシルピィ。インケン星人に、惑星ごと滅ばされちゃって、あたしが最後の一人になっちゃった。えへへ」

「なっちゃったえへへじゃないでしょ、えへへじゃ！ マイペース

主義のあたしが、他人事に口出すのも珍しいけどさ」

などと言いつつも、続いてシルピーから詳しく聞かされる彼女の身の上話は、聞くも涙、語るも涙という代物で、優奈は自分の涙腺がこつも緩いものだったのだと改めて気づかされた。

「大ボケかと思ったら、無理して明るくふるまっちゃってたんだね。シルピー可愛い娘、うっ……」

「いたぞ！」

部屋を出た優奈達、男達の怒号が聞こえる方向を見ると、さきほどの兵士とは違って屈強そうな男達が数人。

間髪を入れず、何の容赦もなく、警告もなく、彼らは熱線銃を撃ち放って来た。間一髪銃口の向きから攻撃を計算して、避けたつもりではあったが、このような戦闘などそもそも初めての体験である間に合わず、優奈のまさに心臓のあたりを一条の光線が貫いた！

何？ ……これは。優奈の全身を何とも言えないような不思議な感覚が包み込む。

熱線は優奈の体を這い、背中に回り込み、そしてまた直進をしていた。見る者には優奈の体を貫いたかに思えるだろう。優奈の体が、うつすらと黄色い光に覆われている。

「シールドの魔法を張ったの。相手の光線や熱線などによる攻撃は全て封じたわ」

「魔法……？ そんなものが……」

優奈は驚きを隠しえない。しかし、今自分が生きていること自体が、確かに魔法の力が働いていることの証明なのかも知れない。

「なんだろう」

「なんだか分かんないけど、銃がきかない」
「捨てちゃえ」

男達は小さな少女の奇怪な術で熱線銃による攻撃を封じられたと分かるや否や、瞬時にして銃を捨て、肉弾戦を挑んできた。しかし、この喋り方のアホっぽさ。優奈は察する。先ほどの兵士は見回り専門で、何かあったら叫ぶか何かするだけか役割なのだろう、そして

こいつらは戦闘専門なのだ。やっとさっきの兵が、目が覚めて、連絡をしたということだろうか。戦闘力はあるが、脳がちよつと足りないのだ。

しかしその戦闘力たるや、半端なものではなかった。風圧を受けるだけで、その打撃を食らったらどうなるか容易に想像がつく。紙一枚の差などで避けていては、皮膚が裂けてしまいそうだ。それは凄まじい、拳であり、蹴りであった。だが、それを難なくかわす優奈も優奈であった。どこでそんな体技を見につけたのか。驚くほどに敏捷な上、驚くほどに体が柔軟なのである。攻撃をかわしては、その時に生じた相手の隙、相手の死角をたくみに突き、相手の急所にその柔らかな小さな拳をたたき込んでいく。

だが、相手は鎧のようなダメージを吸収する効果のある服を着ているし、何より多勢である。しかも優奈は背後にシルピーを庇っている。優奈は次第に息を切らせていった。

背後から、何か暖かいものを感じた。不思議な感覚が優奈を包み込んだ。拳に心地よい軽い痺れが走った。

「優奈の拳をエンチャントしたよ」

「何したって？」

喋りながらも男のアゴに優奈の掌底がヒット。男はもんどり打って倒れた。気を失っているのが一目で分かる。

これがエンチャントか……

優奈、自分の両の拳に目をやる。

「こりゃ、凄いや」

優奈は魔法というものの不思議な性質に感心した。

仲間が倒れるのを見ても、男達の攻撃は止まらない。

だが、彼らが最初の一人と同じ運命を辿るまで、ものの数秒もかからなかった。「あっ」も言わない間に、優奈は男達全員を叩きのめしてしまったのである。

「第二章も、完全勝利！ ブイツ」

優奈につこり笑って、どこへともなくブイサイン。よく分からない

いが、シルピーもいちおうブイサイン。

「いたぞ、逃がすな！」

「殺せ！」

男達の叫び声。戦闘兵だか何だか、今倒したのと同じような身なりの男達が、さらに六人、七人とこちらに向かって走ってくる。

「ぎええ、きりがないっ」

ばたばたと響いてくる足音に、優奈達はたまらず逃げ出した。角を曲がるなり、

「よし、近道だ。エンチャントされたこの優奈のストロンガーな拳で、壁に大穴パーンチ！ 砕け散れ壁っ！！」

優奈の叫びとともに、ボキベキツと強烈な音。

砕け散ったのは優奈の手のほうであった。

「ほ、骨が、間違いなく骨が折れた！ 粉微塵に砕けた！！
……全然強くなつてない。シルピー！」

のたうち回る優奈。

「……さっきのは、相手の生体にダメージあたえるものだから、物質破壊したいなら言うてくれれば別の魔法をかけたのに……」

「分かるわけない！ 痛いよ」

足音、そして声がどんどん大きくなって来た。

優奈、いきなりがばつと起きあがり、

「優奈復活。あゝ、痛かった。……シルピー、直接魔法で壁を破れないの？」

凄まじい音がしたわりには、結局、拳の骨は無事だったようである。

「残念だけど。……それが出来れば、ここに捕まってないし」

さらに足音が大きくなってきた。もうその曲がり角のあたりまで来ているようだ。

「時間がないか。……しょうがない、その物質破壊の魔法つていうのかけて。……あ、ちよつとまって、怖いから念のため、足にかけてよ、またさっきみたいに複雑骨折しちゃかなわない」

一瞬で治るのか、あんたの骨折は。

シルピーの両手から出た淡い光が優奈の足を包み込んだ。

「エンチャント完了！」

「いづくぞ〜！」

さつそく壁に蹴りをくれる優奈。

かなり分厚い金属の壁だというのに、あっさり簡単に壁がぶち抜け、崩れた。魔法をかけられた側の、もとの能力を引き出す作用があるのだろう。シルピーが自身にかけてもたかが知れているわけだ。

「景気よくもういつちょ〜！」

さらに壁をぶち破ると、激しい風が吹いてきた。空が見えている。遙か下に雲、そしてさらに下には優奈達の街が見える。

高度二千メートルは下らないだろう。

優奈はその壁の隙間に、ためらいなく身を躍らせた。

戦艦から脱出した優奈は、宙を落ちていく。

慌ててシルピーも落下し、優奈に追いつく。そしてしがみつき、懸命に羽をはばたかせる。

「優奈〜、そんな大きな体、あたしじゃ支えられないよ！ 無謀！

羽もないくせに！」

「だ〜いじょうぶ」

優奈はのんびり言っ、おもむろに腕時計型の通信機を操作……しようとしたところ、バチツと小さな感電にのびした手を反射的に引っ込めた。パネルが完全に割れて、中の回路がむきだし。細かいコード類が切れて、パチパチとショートしていた。先ほどの格闘の際だろうか……

「そんなあ……壊れてる……エグゼリオン呼べないよ。死ぬ〜、落ちて死ぬ〜！ 羽が欲しい、でも死んで頭に輪っか乗つけて羽ばたくのは嫌〜！ 誰か〜、シルピー、助けて〜！ やだよ〜、おちる、むきいいいいいいい！！ い、息……が……あ……あ」

この時の優奈の表情を細かく描写するのはあまりに本人に酷なの

第三章 戦慄 インケーンの血族

1

「シルピー元気？」

「シル、ういゝす。ついでに緋鷹も、ういゝす」

「おーすシルピー」

「元気か」

「シルちゃん、おはよー」

朝の授業前の時間だ。

生徒達が次々に教室に入ってくる。優奈のクラスメイトが口々に妖精のような小さな少女に声をかけている。

巨大メカで宇宙人と戦っていることがとくに皆に知られている身の上である。別にシルピーとの出会いを秘密にしてもしかたがない。ただし先生達にはちよつと授業がやりにくいかも知れない。何やらちつこいものが、優奈の肩や机の上にとまって、羽をばたばたやったり、欠伸したりとされては……。時折、教室上を飛び回ったりするし。

現在、シルピーは優奈の家に世話になっている。

ひよんなことから出会った二人だが、シルピーは自分の星を滅ぼされてしまっているため、身を寄せるところがない。優奈の家には連日のように何やら怪しげな男たちが来て、引き取り手になろうとしていたが、優奈はきつちりと断った。どんな妙な実験に利用されるか分かったものではないからだ。

「ねえシルちゃん、あたし達に二組の森本君が振り向いてくれるように魔法かけてよ」

二人の少女が声をかけてきた。杉田知美と秋本豊子である。

「ごめんね、二人とも。……そういう魔法は使えないんだよ」

シルピーは優奈の頭で羽をはたかせている。

「なんだゝ残念」

二人は自分の席に戻っていった。

「……杉田も秋本も、あたし達って、二人に森本君が振り向いちゃったら、戦争になっちゃうじゃない。まったく。ねえ、シルピー、ほんとうにそういう魔法って使えないの？」

「ないわけじゃないんだけど、あたしたちの星では、魔法というのは、あくまでこの小さな体のために弱い身体能力を補うために、生活上どうしても必要でやっていることであって、人の心を読んだり、いじったりというようなことは、普通は絶対にやってはいけなんだよ。自分の命を守る時くらいしか使ってはいけないの」

「そうなんだ……あゝあ、もしもそんな魔法使っていいなら、あたしなら……」

いいかけて、はっと口を噤む優奈。

あたりをきよきよと見回し、頭の上を飛ぶシルピーを素早く捕まえて、自分の顔の前に引き寄せ、

「ねえ、シルピー、あたしの心読んでないよね？ 読んだりしてないよね？」

シルピーの小さな肩をかるくゆさぶる。

「……とか優奈が言うから、読むつもりなのに……読んじやった……プツ」

笑うシルピー。

「やゝん。やめてよシルピー。ばかー、今のその記憶そっくり抜き出して、あたしにわたしなさい。絶対心を読んじゃ駄目ってシルピー星人の戒律を自ら破っていいのか？」

「シルピーは名前だよ、シルピー星人じゃないよ」

「んなことどうでもいいの！ このこと誰かに言ったら八つ裂きにするよ！ コンクリートに詰めて海に流すわよ！ 型を取ってガレージキットにして売るわよ！」

「お、緋鷹、シルピー、おーす」

「ぎやはゝゝ、本人ゝっ！」

優奈は飛び上がった。

「……なんだ？」

金城翼也はきょとした表情を浮かべていた。

「ぼけぼけっとしているくせに、いつもいつも騒々しい人ねえ」

吉波瑠璃子だ。

「ごめんなさい、吉波さん」

と謝る優奈の後ろで、シルピーが好子に何やら耳打ち。それを聞いた好子は思わず吹き出してしまった。

「シルピー！ 好子ちゃん！ ねえ、いったい何を話しているのかなあ」

と、一見とてものかな光景ではあるが、実際のところ、優奈の生活はそれなりに多忙だった。まず、前にも述べた通り、高校一年なりに大学進学のための勉強をすでに計画立ててしっかりスタートさせていること。そして、強制的にやらされている仕事の手伝い。さらには、今回の宇宙人襲撃の件で、いつ狩り出されるか分からないため、エグゼリオンの調整。新聞や雑誌のインタビューなど。地元広報誌の表紙写真の撮影。噂によるとCD化の話が持ちあがっているという話もあるらしいが、果たしてどんなCDになるのやら。

2

円卓には季節の野菜をたっぷり使った料理、魚、みそ汁、肉じゃが、目玉焼き、見た目は質素だが栄養のしっかりした献立。その円卓を、ヨネ、源三郎、優奈&シルピー、遠山伸也及び由利香が囲んでいる。

「もう、こいつったら、ほんとお喋りなのよ。何でも喋っちゃうんだから」

「ごめーん、もう喋らないから」

「優奈、おめえそんなだから、いつまでも彼氏の一人も出来ねえんだよ。なんでそっち方面に関してはやたら内気なんだ」

「うるさいわね！」

毒づく源三郎に、ぷつと頬をふくらませて睨みつける優奈。

優奈も年頃である。恋愛に興味はあるし、おしゃれして素敵な彼氏とデートを楽しんだりしてみたい。しかし学校でそういう告白どころか、そういうことを考えるだけで顔が赤くなってきてしまうのである。

「修学旅行」という言葉を聞いただけで勝手に色々な事考えすぎて鼻血出した事があるらしい。夏が近づくと「プール」と耳元で言ってみるだけでまた鼻血を出すらしい。と、同じ中学出身の同級生の男子が冗談なのか本気なのか陰でよく言っていることである。

実は意外に優奈に気のある男子は多い。優奈は顔立ちも可愛らしく、またその純情さも人気の秘訣である。しかし、すぐに顔が赤くなる癖のために、今誰に興味があるのかがあまりに一目瞭然なため、男子達は声をかけにくいのである。その相手の男子も、優奈のその視線にまったく気づいていないことは非常に鈍いといしか言いようがなかった。

「悩んでる事があつたらどんな些細な事でも相談してよ。同じ屋根の下で暮らす家族なんですからね」

「あ、ありがとう、由利香さ〜ん」

「地球って面白いものが色々あるよねえ」
しみじみと呟くシルピー。

「何がよ？」

と、優奈。例えば親子喧嘩。などと嫌味を言われるかと思つたが、答えは予想に反したものだつた。

シルピーは一同を見回しながら、
「面白いロボットがいたり……」

優奈を除く一同の顔が硬直する。

「そ、そうだな、エグゼリオンとかな！」

源三郎、慌てたように言う。

「あと、優奈と会うまで見たことも聞いたこともなかったけど、あのインケン星人に、女性なんてものがあつたって事も……」

「わーーーーーっ」源三郎が、シルピーの声をかきけすように

叫んだ。「何を出鱈目言つてんだシルピー！ 優奈、おれがさつき酒のませた。シルピーに酒飲ませた。酔ってんだきつとシルピーはおれも飲んだ！ わけ分からんこと教えたかも知れん！！」

「そうだよ、優奈、優奈がインケン星人なわけないじゃないか」ヨネも源三郎の言うことを必死に取り繕う。

「そ、そ、そ、そ、そう……だよ、優奈、ちゃん、そんな、ばば、馬鹿なこと」

伸也まで……

皆一斉におろおろあたふたし始める。

そんな態度を見てシルピーが、

「あ、あたし何か悪いこと言った？ もしかしてこれって言っちゃいけない真実だったの？」

「あほー……ー、真実じゃねええええ。シルピーはこれ以上喋るな、バレるだろうが！」

「馬鹿、源三郎！」

皆の視線が、ゆっくりと、今話題となっている人物の顔へと注がれた。

その顔から表情は消えていた。ただ正面を向いているだけだった。どこを見ているのかまったく焦点の定まっていない、うつろな表情だった。

そしてどのくらいの時間が過ぎたのだろう。優奈にとっては長いようなはたまた一瞬だったのか。

ようやく優奈は、ぽつりと呟いた。

「あたしが……インケン星人……」

ここで物語が、いきなり妙な転機を迎えるのである。

「つまらない……冗談だね……」

優奈は湯飲みを手にした。

お茶を飲んだ。

手が震えていた。

「騙し通す気はなかったんだよ。薄々と気づかせたほうがよかった
と思って」

と、ヨネは謝った。

「……シヨックということを考えると、最初から全て教えという育
てていこうとも話しあったんだけど、なるべく地球の、他の皆と同
じように育って欲しかったしょ」

と源三郎が付け加える。

優奈はひたすらぼくとしてている。

たまにお茶をすするが単なる反射であるかのように、顔は無表情
のままだった。

話しても耳に入っているのかいないのか分からないが、ともかく、
ヨネは語り始めた。

何百光年も離れたところに、インケン星はある。

もう何十年もの昔のこと……

自分の星から追われた逃亡者が地球にやってきた。

その異星人の男は、地球で緋鷹一郎と名乗った。

ヨネと出会い、結婚をした。

源三郎が生まれ、そして優奈が生まれた。

「そ、それにしても、びつくりしたなあ」

遠山由利香が唐突に喋り出す。

「おばあちゃんのお姉さんは、インケン星人と結婚したんだよつ
て聞かされてたけど、でも、生前の一郎おじいさん、どこから見
ても地球人と変わりなかったし、わたし自身今まで半信半疑だったの
よ。だけど、シルピーちゃんという地球外生命と出会ったし、それ
に今回の、その当のインケン星人による、地球襲撃。テレビで見
たけど、確かに彼らも地球人と何ら変わらぬ姿形をしていた。やつ
ぱり、本当の本当に一郎おじいさんも、源三郎おじいさんもインケ

ン星人だったのね」

いつになく饒舌に喋る由利香。

「あたばうよ、二分の一よべらばーめ」

源三郎は何だか意味の分からないことを威張ってみせる。

「普通の人生……」

優奈がぼそりと呟いた。

唇が震えている。

「普通に進学……就職……普通に恋愛……結婚……普通に……出産……育児……」

ぼそり、ぼそり、と確かめるように、一つずつ区切って言った。

優奈のモットーである「何事も普通に生きる」ということが、いろいろくつがえされてきた苦難の人生であったが、まさかここまで過酷なことが我が身に降りかかるとは。

つつ、と頬を涙が伝った。

「普通に、インケン星人として生きる」

源三郎が優奈の耳元で呟いたその一言がスイッチとなり、優奈の目がかつと開いた。

そして、感情のコントロールが出来なくなっているのか、笑いたいのか泣きたいのが、よく分からぬ百面相が始まったかと思ったら、次の瞬間には、大泣きしはじめた。

「やだ~~~~~!!」

子供のようにじたばたとわめきはじめた。

「宇宙人だなんて嫌だよ！ 生きていけない！ 結婚も出来ないよ！ 誰も貰ってくれないよ！ しかも……しかも、あいつらの仲間だなんて、あんまりだよ！ うええええええん！ 地球人の普通の女の子として暮らしたかっただけなのに！」

優奈はいつまでも泣きやまない。

「まあ、でもなんだよな、こういう姿を見て、冷静に考えてみると、性格がすでに普通じゃないよな。100%地球人でも、やっぱり普通じゃないかっと思ったと思うぜ。人は生まれではなく、環境で育つてことだ

な、ははは」

自分達の環境のせいで優奈な性格が変なのだ、と暗に言っているようなものだ。

「うええん。自分の娘の性格を冷静に分析するなこの馬鹿オヤジ、シルピー、拳のエンチャントお願い、この男を宇宙の果てまで吹っ飛ばすうえええん！」

4

鼻歌を歌いながら、買い物カゴを持って、インラインスケートで坂道を下る優奈。衝撃的な事実を知ってから一日しかたっていないというのに、もうすっかり気分爽快な様子だ。

優奈は驚くほどに立ち直りが早い。寝て起きてまだメソメソしていたことは、この十六年の人生で、かつて一度もない。

実際のところは、いろいろと辛く複雑な気持ちもある。でも、自分だけではないし、源三郎などもっと血が濃いわけだし、自分はもうほとんど地球人と一緒だし、と開き直っていた。やがてこの赤毛の少女の前に自分の存在そのものの意味を揺るがすような衝撃的な事件が起こるのだが、まだそんなことはつゆも知らず、少女は相変わらず元気いっぱいであった。

「な、何？」

坂道を下り終え、少し滑ったところで、優奈は異様な……というより優奈とは本来縁のなさそうな集団に襲われることになった。

それは数十人の男達。学生服を不良風に着ており、髪型はいろいろだが、スキンヘッド、モヒカン、リーゼント、いずれにせよ、ある方向性を持った雰囲気の種類だ。

「緋鷹優奈だな。……死ね！」

一人、白い、まるで特効服のような学生服を来た男が、手にしていた自転車のチェーンのような物を振りかざしてきた。

優奈の顔をチェーンが薙ぎ払う。

いや、すでにその位置に優奈の顔はなかった。間一髪、身をよじ

って、かわしていたのだ。

危なかった。

こんなものの直撃を顔面に受けたら、おそらく肉がえぐれ、傷は一生残る。

いくら雑誌に載って少し有名になったからって、何もこんな連中に狙われる筋合いは……

そもそも別に優奈にとっては目立つことなど少しも有難いことではない。優奈は平凡に暮らしたいだけなのだから。何故自分がこんなことに巻き込まれているのか、さっぱり分らない。

今度は木刀の一撃をかわす。

さすがに少しむかつ腹の立った優奈は、インラインスケートのつま先で不良男の腹部、そして顎、と連続二段蹴りを放った。降ろす踵で、飛びかかろうとしていたもう一人の額を割った。命に別状はないよう手加減したはずだが、ともかく男は額から地を流し、地に崩れた。

男たちは恐れるどころか一斉にかかってきたが、研ぎ澄まされた優奈の感覚の前には、そして自分のこの運動能力の所以を知った優奈にとっては、止まっているのも同然だった。

突き出す拳の一つ、上げる足の一つごとに、必ず一人がうめき声を上げ、地に沈んでいく。買い物がこをもっているため、優奈は片手である。しかも激しい運動に、一切買い物がこの中身が乱れないのはさすがであった。

優奈は一人の男の首の後ろにキラリと光るものを見た。刺さっているのか、張り付いているのか、バッヂのような小さなものが見えた。よくよく注意してみると、どの男の首にもついているようだ。優奈はスリとしてやっていけないかと思わず自分で思ってしまうくらいの一瞬の早技で、そのバッヂのような物体を抜き取った。途端にその男は、「な、なんじゃ、わしや何をしとんじゃー」と叫びだす。正気に戻ったようである。果たして正気に戻らなかったほうがよかったのでは、というような態度ではあるが。

全てを理解した優奈は、彼らの隙をつき、体と体の間をはいくぐり、伸びてくるその手をふりほどきながら、逃げ出した。優奈はインラインスケートをはいている。誰も追いつけはしなかった。いや、彼らにはもう追いかけるつもりはないようだった。

優奈の手から、バラバラと沢山のもものが地面に落ちた。

優奈は一つだけ残しておいたものを、自分の目の前に近づけて見た。

幅二センチ、厚み一ミリほどの金属の板。中央には小さな針状のものがあつた。中には機械のようなものが入っており、その部分が皮膚にささることですその人間を自由に操ることが出来るようだ。

「インケン星人……今度はこんな作戦に出てきた」

自分にも四分の一その血が流れているのだ。

でも関係ない、自分は地球人として暮らしていくんだから。今まで通り平和に暮らしていくんだから。

優奈は少し首を右に傾げた。

銃声！

風を切る音。

「何、今のは？」

びっくりした。

銃声にはない。

音すら届かないうちに、銃弾に気づき、弾道を見切り、かわした自分に対してだ。

戦闘タイプのインケン星人の血が流れているのだろうか。

もう一度銃声、

そして優奈はもう一度驚愕することになる。

なんと銃弾を、その手に掴んでしまったのである。

目の前に、警官姿の男が立っていた。拳銃を手をしている。

警官が引き金を引く直前、優奈は鉛の銃弾を拳銃の銃口目がけてすさまじい速度で投げ込んだ。

拳銃は暴発した。

悲鳴を上げる警官の横を、インラインスケートを履いた一陣の風が過ぎる。そして、すれ違うその瞬間、首にあるはずの小さな金属を抜き取り、そのまま駆け抜けた。

自分にこのようなことが出来るとは思ってもみなかった。

自分の中の何かが、急速に成長してきている……

素晴らしい能力には違いないが、常人を越えるそのような能力は、優奈には不快なものでしかなかった。

だが、自分のことよりも、今は家族のことが気になる。

地球侵略に來た宇宙人に立ちふさがった優奈に対し、ついに彼らは優奈個人を狙い、攻撃をしてきたのである。

5

「おとうちゃんただいま」

家にたどり着くと、すでに夕暮れ。

のどかな、平和な、見慣れたいつもの我が家であった。

「おう、早かったな」

源三郎が声をかける。

「そうでもないよ……いろいろあったから」

台所へ行き、買い物かごを置いてくると、また源三郎のところに戻ってきた。

優奈は手にしていたものを源三郎に渡した。

「下手すりゃこの顔が傷だらけになるところだった。……あいつら、今度は新たな手で来たよ。不良番長達やお巡りさんを、その怪しげな機械を首にくっつけて、操って襲ってきたよ」

「ああ、ずっと見てたからよ、ハラハラしたぜ」

「ずっと……見てた？」

「いろんな事態に備えて準備しようと思って、さっき、カメラやビーム兵器を備えた超小型衛星打ち上げたんだよ。……それで何となくお前のこと追ってみたんだよ。寄り道してないかな、悪いことしてないかな、実は彼氏といちゃいちゃしてたりしないかな、

千円拾ってポケットに隠し入れたりしてたらあとでお菓子せびつてやろうかな、って思っで。そしたら、不良グループに襲われてるだろ。思わずビーム砲をお見舞いしてやろうかと思っただぜ。なに、半径数百メートルは余裕で吹っ飛ばせるから、不良生徒が百人二百人いたって、一人たりとも逃しやしねえ」

「あたしが死ぬわよ！」

優奈は源三郎をにらみつけた。

そして、次の瞬間には思わず微笑んでいた。

自分の身の上に関わる色々な事があったというのに、結局、何も変わってない……

相変わらずなこの雰囲気。

この見慣れた夕焼け。

遠くをぐるりと取り囲む山々。

「おい、優奈、遊ぼうぜ」

近所のケン坊、佐助がサッカーボールを持ってあらわれた。

「よし、遊ぼうか！」

優奈はかけたした。

「なんだ、また勉強が」とか言うのかと思っだ」

「やるよ、ちゃんと夜に」

「広場にみんないるから、ミニサッカーやろうぜ」

「それなら、あたしキーパーやってあげるよ」

「それじゃ、ゴール量産決まったようなもんだ！」

「一点もやらないもん！」

しかしこのあと優奈はケン坊にハットトリックを食らうなど、ぼろぼろにやられてしまうのであった。

第四章 優奈の年末年始

1

身を切るような乾いた寒気が少し開いた窓の隙間から流れ込んで来る。

優奈は二階の自室にいた。開いた窓から夜空を見ている。視点がなんとなくうつろで、ぼーっとした表情を隠しもしない。まあ誰が見ているわけでもないのでもいいんだけど。

夜空一面を覆う厚い雲の天幕に、うつすらと街の灯りが反射して淡く輝いている。いつ雨が降り出してもおかしくない天候だ。

だけどこの雲の向こうには綺麗な星空が広がっている。

同じように自分の心を覆い隠す雲の向こうにも、澄んだ空が広がっているのだろうか。

先日、家族から聞かされた衝撃の事実。

まだ、自分の全身を流れる血液の事が信じられない。

自分は普通に育ち、老い、死んでいくことが出来るのだろうか。

普通の人生を歩むことが出来るのだろうか。

優奈は苦笑し、首を横に振った。もちろん楽しい事実ではないけれど、だからつくよく悩んでいても仕方がない。理屈ではそう分かっているはずなのに。

優奈は基本的に立ち直りが早く、どんなショックな事でも翌日にはケロリとしている。今回もとくに立ち直っているが、やはり事が事である。ことあるごとに、つつい考えてしまう。

今日はせっかくのクリスマスだというのに、優奈は先ほどまで一階で事務の手伝いをさせられていた。「せっかくの」と思いはするものの生まれてこのかたクリスマスらしいクリスマスなど過ごしたことがない。緋鷹家は盆や正月など和のイベントは大事にするが洋のイベントには誰もいっさいの関心がない。ハロウィンとまでは言わないがクリスマスくらいやればいいのに、と優奈は思う。

そもそも普通の高校生は、クリスマスはどう過ごすものなのだろう。大勢で集まってパーティを楽しんだり、ひっそり恋人と過ごしたりするのだろうか。優奈はまだ一度も異性との交際というものをしたことがないので、恋人と過ごすと言ってもいまひとつ想像が来ない。

親友の好子は以前に、年上の男性と付き合っていたことがある。一年足らずで別れてしまい、それっきりだという。別れた時には電話で泣きじゃくる好子の話を聞いてあげたが、優奈には何と言って励ましてあげれば良いのかよく分からず、結局、一般論的な慰めの言葉を言うくらいしか出来なかった。しばらくの間、好子の落ち込んだ辛そうな顔を見るたびに、優奈自身の心も悲しい気持ちになった。ただ、それとは別に、そういう恋のドラマの主人公を演じている好子を羨ましく感じてしまった。

今日は、みんなで集まって女だけのクリスマスパーティーでも開いて、シングルな者同士で盛大に盛り上がるう、と好子達に誘われていたのだが、仕事の手伝いがあるからと、参加しなかった。実際本当に仕事の手伝いもあったが、それ以上にどうにも気分が乗り気ではなかったのだ。

空から何か白いものがゆっくりと舞い降りてきた。

優奈は窓を全開にした。窓から身を乗り出し、空を見上げた。

冬空からのプレゼントが、まるでタンポポの綿毛のようにゆっくりとふわふわと、次から次と舞い降りてきていた。

2

優奈は大きくしゃみをした。

今日は大晦日。

だというのに、優奈は今日も仕事の手伝い。契約の書類を届けるため、電車で隣駅まで行って来たその帰り道である。まったく、営業している相手も相手だ。お互い、年末年始がかきいれどきといった家業じゃないんだから。口には出さないがつつい愚痴っ

う。

でもよく家の商売の手伝いを頑張っているご褒美にと、暖かいおしるこ缶ジュースを貰った。実は優奈は、缶ジュース自動販売機で冬に扱っている商品のなかで、おしるこが一番好きなので、嬉しかった。

また大きなくしゃみ。よく、くしゃみの音を小さく絞れない人間がいるが、優奈もそういうタイプだ。小さく堪えようとすると、かわりに鼻水が激しく噴き出してしまう。

先日、ケン坊達に雪合戦に誘われたものの、合戦というより、一対十五の一方的な虐殺で、優奈は五分とたたぬうちに雪の中に埋まった。降参しても攻撃の手はゆるむことなく続いた。子供らが飽きて帰ってしまい、それから数十分後、ようやく優奈は自力で這い出してきたのである。「あいつら……裁判所に訴えてやる。パパママに言いつけてやる、お子さんいじめっ子ですよ。か弱い高校生の女の子を泣かせていじめてますよって」呪詛の言葉もなんともみつともない優奈であった。

さて、大事な書類はもう渡し終えているので、おしるこ缶を手にかけているだけだ。

今、駅前の雑踏の中にいる。大きな有名デパートがあり、正面口前は非常な賑わいを見せていた。今頃近くの市では、遠山夫妻が正月を迎えるための買い物をしていることだろう。

今日も外は身が切れるような寒さだ。天気予報では雨や雪の心配はないとのことだが、それにしても空はどんよりと曇っている。町を取り囲む山々は雪で真っ白だ。先日の大雪はまだまだ道路に残っており、ところどころ氷状になっている。先ほど優奈はそれを踏んで滑って豪快に転んだばかりだ。まだお尻が痛い。

「優奈ちゃん」

後ろから肩を叩かれた。振り返ると、同じクラスの小林寿美と木下輝良と安食奈美がいた。仲良し三人組だ。そういえば確か三人とも優奈と小中学校は違うが最寄り駅は同じだった。

「なんだ、誰かと思ったよ」

優奈はほっとして小さなため息。叩いたのは小林寿美で、彼女は
その手でそのまま「おっす」の仕草。優奈もおんなじ仕草を返す。
「やっぱり優奈ちゃんだった。木下が違うんじゃないのって言うか
ら」

隣の木下輝良は頭をかきながら、

「緋鷹かなとも思ったけど、シルピーが見えなかったから」

「今日はおとうちゃんの手伝いで家にいるよ」

「しかし優奈って地味なのか派手なのか、よく分らないよね」

と、安食奈美がぼそりと一言漏らす。

「地味です」

と一瞬の間も置かず強く主張。

「赤っぽい」というより文字通り真紅の頭髪。そこだけ見れば非
常に目立つはずなのだが、意外に群衆の中に溶け込みやすく気付か
れにくい。しかし髪の毛の色が色だし、あらためてまじまじ見ると
ド派手このうえない。そういった点が今ひとつ印象のはっきりしな
い理由だろう。

三人はこれから電車ではるばる仙台のアミューズメントパークま
で出かけ、有名芸人が司会をつとめる年明けカウントダウンイベン
トに参加するのだそうな。

「それじゃあな、緋鷹」

「三人とも、良いお年を」

優奈は手を振った。

三人は駅の方面に歩いて行った。

優奈は自宅以外で年を越したことがない。紅白を観ながら年越し
そばを食べて、紅白が終わる頃に窓を開けて除夜の鐘を聞く。小さ
な頃は、起きたまま年の変わり目を迎えたいと意気込むものの眠気
に勝てず願望を叶えることは出来なかった。

起きていられるようになってからは、年が開けたことをしみじみ

実感してから、まだ深夜のうちに近所の神社に初詣。戻ってきてから、どんな夢を見るのかを楽しみに床に着くのである。初夢は新年元日から二日にかけて見る夢のことだが、優奈は最近までずっと勘違いしていたので、今でも大晦日から元日にかけて見る夢のほうが楽しみなのだ。

これが優奈の年の越しかた。

そして実際に今回も例年と変わることなく、元旦の夢を迎えたのだった。どんな夢だったのか、それは秘密。

3

先日とはうってかわって、どこまでも澄み渡る青空。

朝の十時。優奈はたった今日がさめたばかりだ。

寝間着姿で、二階の自分の部屋の窓から通りをながめている。窓をあけるとたたぷり陽光を含んだ心地よい冷気が部屋に入ってくる。騒がしい。商店街を訪れる人で賑わっている。なかには振り袖姿も見えた。

だんだんと頭がはつきりとしてきた。

一階に降りるともうみんな起きていた。

年が変わった直後、まだ起きていた源三郎と遠山夫妻にいちおう「おめでとうございます」は言ったが、あらためて、本格的にみんなに挨拶をした。

ヨネからは仕事の手伝い賃と称してお年玉を貰った。なんと三万円も入っていた。去年よりもずっと多い額だ。もう高校生だし、いろいろ必要だろうと思って、とのこと。家計のこともあるだろうに、裕福な会社じゃないんだから。こんなにたくさんは貰いにくいが、だからといって返すのも失礼なのでありがたくちょうだいすることにした。そのかわり、今度みんなに何か買ってあげよう。

炬燵の上に年賀状の束。残っているのは優奈の分だけだ。炬燵にあたりながら、一枚一枚に目を通した。好子をはじめ、クラスの友達、別の学校に行った小中学校の時の友達、担任の先生、そして……

「金城君からだ……」

あまり上手ではない骨太の字で金城君自身を描いたと思われるサッカーボールを蹴ってる少年が、来年もよろしくな〜と言っている。「もう来年じゃなくて今年なのに」

直接面しているわけではないので緊張することはなかったが、むず痒さというか、奇妙な感触があった。

住所は連絡網の一覧で簡単に分かるが、果たして金城君はクラスメイト全員に出しているのか、それとも……。わざわざ他のみんなに確認するのも恥ずかしいし、ちよつと困ったことになった。金城君とは高校で初めて一緒になったわけだし、まだ高校一年目だし、彼が年賀状に対してどんな主義を持っているのか分からない。「元旦に届くように年賀状を出さないタイプ」「クラスメイトに出すのは当然なのに、自分が受け取ってから慌てて返す奴」などと印象づけられてしまったらどうしよう……

「おとうちゃん、年賀状の余りない？」

炬燵の対面でテレビを見ていた源三郎は、

「沢山あるよ」

と年賀葉書の束を渡してくれた。礼を述べ受け取る優奈だったが、裏面を見た瞬間その表情は凍りついた。おそろおそろ、次の葉書に目をやり、さらに凍り付いた。ぱらぱらとめくり終わり、そしてむなしくため息をついた。すべての葉書には色鉛筆で幼児の落書きのように人の顔や今年の干支である酉年にちなんだ絵などが描かれている。その絵のまあ下手なこと……。たとえば文学の神様であっても筆舌に尽くすことは出来まい。

「何よ、この絵は」

「おれの力作。失敗に備えて年賀葉書を買い込んだんだけど、どれ一つとっても見事な出来だったからだいぶ余っちゃった」

「ちゃったじゃないわよ、ごつい髭面して。このクマ！……ひよつとしてお得意さんにもこの絵で年賀状出した？」

頷く源三郎。

優奈、三分間硬直。

「……あたしが一人立ちするまで、潰れないでくれればいいやもう」
開き直る。まあいつそ諦めがついたというものである。優奈は気を取り直し立ち上がると、

「年賀葉書買ってくる」

「おれの芸術作品使わんのか、遠慮するなよ」

「そんなすごい芸術なら人になんて送らず自分の部屋に飾ってれば」
そのほうが世のため人のためだ。とまでは言わなかったが。

「そうだな、家中に飾って画廊にしてお得意さんが来た時に見て貰おう。あと優奈の先生が家庭訪問に来た時とか」

「やめて、それだけは……」

もうこの親父に嫌味を言うのやめよう。通じないだけならまだいいけど、十倍も百倍も有害となつて自分に跳ね返ってくるのだから

さて、気を取り直し、着替えて出かけて行つた優奈だったが、一時間後、

「おとうちゃん……さっきの芸術作品一枚ちょうだい」

開いている店も少ない上、開いていたどこの店でも年賀葉書が売り切れていたため泣く泣く戻ってきたのである。

でも実際どうしよう、この葉書裏の酷い落書き。余った年賀状の束を再び目にし、あらためて深刻な問題であることに気付かされた。年賀状の上から白い紙を貼って隠すことも考えたが、透けてしまふだろうし、「こんな下手な絵を描いて隠そうとしてやがる、下手なら最初から絵を描くなよ。しかも、書き損じの再利用かよ」などと金城君に思われでもしたら、もう学校に行けない。というよりもおそらくショック死する。仮に生きていてもきつと滝から飛び降りて自殺する。

しかたなくそのまま使おうと一番まともな一枚を選んだ。それでも強烈なオーラを放つ一枚に変わりにはなかったが、たちは悪くとも冗談と思ってくれそうなかっただけまじである。他のは冗談の域を超越し、非常識きわまりない。人の感情を遺伝子レベルで挑発してく

るような絵であつた。わざとそうしているのなら大したものだが、無意識にそうしているならばもっと凄いことだ。

呪われた運命を嘆いていてもしかたない。作業にとりかかろう。まずは宛名からだ。表面は何も書かれていないがそれでも裏面から紙を突き抜けて怪しげな気が立ち上ってくる。本当にこんなものを送っていいのだろうか。受け取った相手が迷惑ではないだろうか。それだけならまだしも、ポストに投函したら、一緒になった他の人の葉書が腐ってしまわないだろうか。郵便物なんとか法違反などで逮捕されたりしないだろうか。優奈はちよつと、いやかなり不安な気持ちになつてきた。でも他に葉書がないのだからしかたない。

金城君の年賀葉書から、彼の住所を確認する。金城君の家は隣の市だ。電車で二駅。

なんとか表に金城君と自分の家の住所を書き終え、葉書を裏返した。

「……………何をためらつてんの。あたしはもう覚悟決めたのよ、極悪人の娘なのよ、共犯者なのよ」

などとぶつぶついつている優奈を、遠山夫妻らが啞然とした表情で見つめていた。

「どうしちゃったんだろうね、優奈ちゃん」

「さあ…………」

いざ覚悟を決めると、作業はあつと言う間だ。おぞましい落書きの、スペースの白い部分に、あけましておめでとうなどと当たり障りのない文を書き込んだ。

なんとも異彩を放つ年賀葉書ではあつたが、とりあえず形にはなつた。だが、そこでふと考えた。そもそも慌てて金城君への年賀状を書いたのは、金城君がくれたから慌てて返事を出したと思われたくないためではなかったか。今から郵便ポストに投函しては、いつ届くものだから分らない。

「どうしよう」

一時間後、優奈は電車に乗って隣の市まで来ていた。

前もって地図を調べ、略図を書いておいたのだが、あとから見ると自分で書いておきながら何が何だか分からず、結局コンビ二を見つけてはそこで地図を確認したり、派出所のお巡りさんに聞いたり、地元のおばあちゃんに教えてもらうなどして、何とか金城君の家にたどりついた。まだ不安感拭えないが表札に「金城」などという珍しい名字が彫られているのだから、たぶん間違いないのだろう。

彼の家は住宅街にあるごくごく普通の一軒家だった。同じような作りの家がずらりと並んでいる。どの家も大きくはないが外観がしっかりしており、高級そうな雰囲気を出している。

金城君の家をただ見上げているだけだったが、やがて意を決して、「よっしゃ！」

と気合いを入れると、バッグに入れておいた葉書を素早く郵便受けにねじ込み、そして逃げるように走りだした。遠目から見ると悪ガキのピンポンダツシュにしか思えない。

「おい、緋鷹じゃんか、ポストに何入れてたんだ？」

コンビ二の袋をぶら下げた金城君とばったり遭遇。優奈は予期せぬ事態に混乱したのと、慌てて金城君を避けようとしたとで、電信柱に思い切り激突し顔面強打。脳震盪をおこして気を失い地面に倒れたその瞬間、倒れた激痛に目覚めて跳ね起きた。この間、二秒。

「は、鼻が潰れた、軟骨が砕けた、血が、鼻血が」

今度はわめきだし、急いでジャンパーのポケットからハンカチを取り出し鼻をおさえた。

「おい、大丈夫かよ。えらい音でぶつかってたぞ、電柱にも地面にも。……しかし緋鷹、お前、地味でおとなしい奴なんだか騒々しい奴なんだかさっぱり分かんないよな」

「地味れふ！」

間髪入れずきっぱり言い切る。

「で、何やってたんだよ」

「……」

ふと気付けば、まったく言い逃れの出来ない状況に自分を追い込んでしまっていた。

結局、ここまで来ることになった経緯を全て正直に白状することになった。だったら最初からこそそこそしてなければよかったと後悔した。ただ、年賀状の内容にはいつさい触れてない。あんな絵を、父が書きましたなんてとてもいえない。自分がかいたと思われるのもとても恥ずかしいが、まだ、冗談ということで逃げられそうだ。

どうやら金城君はクラスの全員に年賀状を出していたらしい。

「おれが好きでやってることなんだから、気にする必要はないのに。ほんと、お前は変わった奴だよな」

金城君に変わり者と言われてしまった。

金城君に変わり者と言われてしまった。

金城君に……

普通だと思つてたけどやっぱりあたし、ちょっと変なのかしら……

「どんな年賀状なんだか、あとでじっくり読ませてもらうよ」

「今読んで！」

自分のいないところでどんな反応をされるのかと思うと急に不安になってきた。目の前で読まれるのはもちろん恥ずかしいが、今読んでいるのだろうかいつ読むのだろうかとずっと不安でいるより遙かにまだ。

「ほんと、おかしなやつだなあ。どれ……」

金城君は葉書に目をやった。

しばしの沈黙。

しばしの沈黙。

しばしの沈黙。

しばしの沈黙。

そして唐突に、金城君は沈黙を破り大笑いをはじめた。

優奈も一緒になって笑った。

「センスあんなー、な、なんだこりゃあ」

「でしょー」

もうやけくそだ。自分の書いたものが笑われてるんじゃないからいいや。

「いや、ほんとに笑えるな〜」

と、しばらく二人で大笑いしていた。

「よろしくね、じゃなくて、よろしくねだつて〜」

「そつちか〜い！ え、ちょっと見せて……ああっ本当にろがるになつてる！」

がーん！

優奈の書いた箇所だ……

なおも笑い続ける金城君に、優奈の顔はあつと言う間に真っ赤になった。

しかし、金城君の笑いのつぼというのはいったいどのへんにあるんだろう。父のあの絵については、特に何も思っていないみたい。

ひとしきり笑い終えると、

「せっかく来たんだからちよつとあがつてけよ」

「え、いいよ、元旦にお邪魔しちや悪いよ」

「平気平気。それに、思い切り顔を電柱にぶつけてたろ。なんか薬を塗つてやるよ。おれを避けようとしてぶつかっちゃったんだし」

「でも……」

「いいからいいから」

金城君は優奈の手を掴むと強引に家に引っ張りいれてしまった。

「お、兄ちゃんとうとう初彼女かよ」

金城君に顔の似た小学校高学年くらいの可愛らしい男の子がいた。兄と呼ぶところから、弟なのだろう。

「馬鹿、クラスメイトだよ」

やっぱり今付き合っている人いないんだ。それはまだしも、現在まで付き合った彼女がいないというのは驚きだった。……今、好きな人はいるのだろうか。

「お、いらっしやい。お友達か、翼弥」

階段を上ろうとしたところで、父親に会った。

「どうも、お邪魔します。緋鷹と言います、お正月だというのにすみません」

「そんなこと気にせず、ゆっくりしてってください」

やっぱり元旦だからみんな家でくつろいでいるようだ。優奈は気恥ずかしかったが、金城君はまったくおかまいなしだ。

金城君の部屋は二階にある。窓が北に面していて、隣の家の壁も近く、ずいぶんと日当たりの悪い部屋だ。以前は二人で日当たりの良い部屋を利用していたが、兄弟別々の部屋にする際に、良い部屋を弟に譲ったとのこと。金城君、偉い。

サッカー選手のポスター、本棚にはサッカーの本、雑誌、準優勝の文字が掘られているトロフィー。えらい迫力だ。

「本当にサッカーが好きなんだね」

「まあね。あ、そこ座れよ」

優奈は言われるままベッドに腰をおろした。

「おれ、将来はプロになりたいんだ」

「え……そしたら外国に行っちゃうの？」

「違うよ。Jリーグだよ。日本のプロサッカー」

「……日本にもプロサッカーなんてあったんだ」

「おい、何年前の話だと思ってんだよ。当時、ずいぶん話題になったのに」

「知らなかった」

「オレオレ、って歌が流行っただろ」

「あ、それ聞いたことあるよ」

父親が巨人ひとすじなので、優奈もテレビ観戦するスポーツといえば野球だけだ。そもそもプロサッカーなんて日本で成り立つのだろうか。

「そっぴや、緋鷹、お前今日はどもないな」

「え、どもりって」

「おまえどもり癖あるじゃん」

「別にどもり癖なんか……」

そういえば、金城君の前では、かちこちになってしまいが、彼はそんな優奈としか話したことないからどもり癖のある女の子だと思っただけだ。でもどうして、今は普通にしていられるんだろう。……たぶん、周囲の視線がないからだ。

そう気付くと気分が楽になった。

とはいえ、鼻に薬をぬってもらう時は、さすがにときどきしたけど。

趣味はまったく違うけど話ははずみ、とても楽しい時間を共有することが出来たのだった。

5

帰り道、華鳴駅まで送って貰うことに。悪いので断ったが、どうせ定期券もあるから、と華鳴駅まで送ってもらった。

優奈はあまり電車に乗る機会はないが、それでも年に何度かは眺めるこの景色が、普段とちょっと違っていている気がした。隣に金城君がいたから……

たかだか一駅とはいえ、それが驚くほど短いようにも思え、また驚くほど長いような気もした。

二人は華鳴駅で電車を降り、改札を通った。近代化の波がすこしづつこの地方にも押し寄せてきているようで、現在自動改札の設置工事中だった。都市部ではすっかり当たり前になった自動改札だが、華鳴駅では、まだ駅員がハサミをちやきちやきと鳴らしているのがある。手業もたいしたものだが、あの動体視力や、運賃の計算など、職人技だ。あまり電車を利用しない優奈ではあるが、自動改札に変わっていくのはちょっと寂しい気持ちがある。ここ数年、華鳴市の駅利用者が年々倍加しているので、しかたのないことなのは分かるが。

「優奈」

改札を出たところで、声をかけられた。小柄な少女が立っていた。

クラスメイトの箱根美咲だ。隣には山崎章。彼は反対にえらく背が高く、ごつい体軀をしている。二人はどうやら付き合っているらしいという話を聞いたことがあるが、こういうところを見ると本当なのかも知れない。

美咲と章は「ふ〜ん」「ほほ〜」などといいながら、にやにや笑みを浮かべている。

「なるほどね〜」

と、優奈の脇腹を肘で小突きまくる美咲。

「なによ〜、美咲ちゃん気味悪いな〜」

同様に金城君も章に小突かれていた。小突くというより、左右のショートフック連打がドスドスと音をたてて腹部に決まっている。

「ただの朴念仁かと思ってたら、このこの」

金城君と章は同じサッカー部所属である。中学は違うがサッカーを通じてそのころから知り合いだったらしい。

「なに、どつちから告白したのよ」

「ちょ……そんなんじゃ……」

そんなんじゃ……ないのだろうか、やっぱり……

優奈はゆつくりと視線を金城君の方に向けた。すでに誰がどうしたの誰が朴念仁かなど関係なく、章と金城君は満面の笑みをたたえながらも激しい音をたてて殴り合っていた。まったく、単純思考の二人である。

6

映画館にいた。

山崎章と箱根美咲に、付き合えと無理矢理に引っ張ってこられたのだ。

意外と強引なタイプが多いのね、うちのクラス。

ただいま映中だ。席はがらがらで、優奈達の他には、五人くらいしかない。

優奈の隣には金城君もいる。

狭くてぼろい、古い映画館だが、椅子の沈み込む感触がかなり心地よい。

今スクリーンに映っているのは、外国の恐怖映画である。この辺りにある映画館は正月に上映しているところはほとんどない。映画でも観ようということになり映画館を探したものの開いているのはここだけで、しかもなぜか恐怖映画しか上映していなかったのだ。「初志貫徹」と章は飛び込んだ。何十年前前にヒットした映画のリメイクらしい。静かな家に越して来た一家。平穏で幸せな生活が待っていると思っていたが、ある日近所に住む住人を初めて見て、あまりその様子が奇妙なのを疑問に思い……。

ここでみなまで語っても仕方ないが、ともかくそんなような映画で。

冒頭は田舎生活をたんたんと描写しているだけで、退屈だった。恐怖映画というものを初めて観る優奈は、恐怖といってもこんなものか、とがっかり顔でポップコーンを頬張っていた。いや、むしろポップコーンの塩加減がどうだとか、トウモロコシの固い部分が残っているのいないの、そんなことばかりに意識が集中していた。でないと眠ってしまいそうだったから。

しかし、映画が終わる頃には優奈はすっかり腰が抜けて立ち上がることが出来なかった。中盤あたりからぐいぐいと物語にひきこまれ、視覚的にも話の進行としてもこれでもかといわんばかりのショッキングシーンの連発。最後にすべての謎が判明した時、ストーリーの頭から終わりまでの全体がまた怖くなる。そして後味の悪い、救いようのないエンディング。最後の最後は見せていないので、もしかしたらどうにかなるのかも知れないと思わせるところが、また妙な気持ち悪さを感じさせる。……先にトイレに行っておいてよかった。まだ心臓がどきどきしてる。

スクリーンに左右から幕がかかり灯りがついた。隣の金城君は気持ちよさそうに熟睡していた。優奈がいくら揺り動かしても夢からさめる気配もない。章が首と肩の境あたりに容赦なくエルボーをぶ

ちこむと、あつさり夢の世界から戻ってきた。

そのあと、ファーストフードで軽く胃を満たすと、水族館に行った。

これもまた狭い水族館だが、山間の盆地には水族館自体が珍しいのでそこそこ客が入り、いつも賑わっている。狭いとはいえ、入った時間帯が遅かったし、一通り見終わって外に出ると、空はすっかり暗くなっていた。

明るい時には気付かなかったが、出入り口のところイルミネーションがある。日が暮れたためライトが点灯しており宝石のようにきらきらと輝いていても綺麗だった。少し離れたところにベンチがあり、四人は腰をおろした。水族館の感想や、その他他愛のない話。

しばらくして美咲と章は何か買ってくると言い席を離れた。

待てども帰ってこない。

「何…… やってんだろね」

「そうだな」

そろそろと帰り客。

「遅いね……」

「そうだな」

金城君と星空のもと二人きり。

こんな元旦になるとは誰が予想できただろう。

「何…… やってんだろね」

「そうだな」

…… 会話の進展がまったくない二人であった。

実は美咲と章はすぐ近くに隠れてて二人の様子をうかがっていたのである。

「なんか見ててイライラするな、せっかく演出してやったのによ」

「ほんとほんと。手を触れるどころか、ほんのちよっとも距離が縮まってるよ」

五十センチの距離をたもったままだ。

「でも、ま、あれはあれでいいのかもな」

優奈のこちこちにかたまった表情の初々しさになんとか微笑ましいものを感じた。

などと観察されているとはつゆも知らない金城君と優奈。

ぴくりとも動かない金城君に対し、優奈はきよるきよるそわそわと、まあ落ち着きがないこと。

人々のざわめきも小さくなってきたころ、ふと優奈は空を見上げた。

漆黒のカーテンに、無数の斑点がきらきらと宝石のように輝いている。澄み渡った空気に、星々は天高く、今にも落ちてきそうである。

「あたし、まだ小さかった頃、星空を眺めるのが大好きだったんだよね」

ぼそりと、でもはつきり金城君に語りかけるように言った。

「へえ」

「現在でも好きだけど、でもあのころほどじゃない。……あのころの無邪気な気持ちで星を見ることはもう出来ないかもしれないけど、でもあの心地よかった気持ちは覚えている。今、こんなふうに星空をみあげることができて、久しぶりにあの時の気持ちを思いだしたよ」

こんなに遅くなると思わなかったので、厚着をしてない。皮膚が切れてしまいそうなくらい寒い。でも優奈は、何ともいえない暖かいものに気持ち包まれていくのを感じていた。

「おれも星を見るのが好きだったよ。近所に望遠鏡もってんのを自慢してる奴がいてさ。仲悪かったから、おれにだけは絶対に見せてくれねーの。悔しくて、おれも見てやるって小学校の理科実験室から、顕微鏡を拝借してさ……」

「顕微鏡？」

「そう。これではうちり星を見て、もう見ちゃったからお前のなん

か別に見せてもらわなくてもいいよって言ってやりたくて……。さ
いはいその日は冬の快晴、絶好の天体観測びより」

「それで」

もうオチの想像がついて、今にも笑いだしそうな優奈。

「まっ黒、何もみえねーの。いくらツマミをカリカリ回して調整し
てもさ。頭来てたたきつけたら壊れちゃってさ。返すに返せなくな
って、捨ててしまおうとしたら、親にばれて先生に言われて二人か
らこっぴどく怒られたよ」

優奈はもうこらえきれず大笑いした。

「そんな笑うなよ」

「だって……」

確かにこれ以上笑ったらおなかが痛くて死んでしまう。と、なん
とか笑いをおさめる。

あらためて周囲を見回してみると、すでに客はみんな帰ってしま
ったらしく誰もおらず、しんと静まり返っている。

むこうにあるイルミネーションは相変わらず綺麗に輝いている。

少し離れているので、満天の星空の輝きをいっさい邪魔することも
なく、見上げれば様々な星座がそれぞれのドラマを繰り広げている。
子供の頃、もしかしたら同時に同じ空を見たりしていたのだろう
か。

「かなり、冷え込んできたね」

優奈は寒々とした様子で両腕で自分の上半身を覆った。どこかで
大きくなくしゃみが聞こえてきたように思えたのは、気のせいだろう
か。

優奈の肩に何かかぶさった。金城君がきていたダウンジャケット
だった。

「ありがとっ、でもそっちが寒いでしょ」

「厚着して出たから、別にいいんだよ。毎日鍛えてっから」

「ありがとっ」

もう一度、お礼を言った。

それでも、じっとしていると凍えてしまいそんな寒さに変わりはないかった。

でもなんだか、心の中がぽかぽかとあったまってくるような気分。なんと表現したらよいのか分からない、くすぐったいような感覚。こんな元旦を過ごせたことにしみじみと感謝の念を覚えた。

第五章 絶望 インケーン皇帝出現

1

「あたしつて、やつぱり馬鹿なんじゃないかしら……」

優奈は頭をかかえた。

すでに三学期。

数学の時間なのだが、今日は何だかさっぱり先生の言っていることが理解出来なかった。ちようと昨日ばかり予習をしておいた箇所のはずなのに……

俗に左利きは天才肌などという。優奈は左利きだ。やはり利き腕がどっちだろうと馬鹿は馬鹿なのだ、と落胆する優奈。

実際はいろいろあって単に頭が疲れているだけなのかも知れないが……

結局、血筋のことを聞かされようと、家庭生活同様にその後の学校生活も何も変わるところはなかった。

普通にシルピーと登校して、勉強して、適度に部活などこなして分らないところをシルピーに教えてもらったりして……（自爆）。親友の好子がたまに使う表現だが、優奈はやはり優奈であった、ということか。

天真爛漫、明朗快活、といった感じの、ただし吉波瑠璃子に言わせると少しボケたところのある少女であった。

運動神経が人並み外れて良いわりには、よく床の段差に躓いて転びそうになるところも、みんなが優奈らしいと感じる瞬間であった。金城君の前では真っ赤になって何も言えなくなってしまうところも、

よく乗るバスを間違えて反対方向に行ってしまったたりするところも、

相変わらず吉波さんから嫌味ばかり言われているが、ひねった言

い回しを全く理解出来ず、ちつとも堪えていないところも。

それでもやはり、落ち込む時は落ち込んでしまっけど。あのアホ惑星の人間の血が流れているのだから……と。

無理もない。優奈の言う彼らがどの程度のアホなのかは、この続きを読めばよく分かるのである。

2

果てなく、宇宙空間が三六〇度広がっている。

無数に輝く星の空。

宇宙空間であるため、星は瞬かずに、ただ静かに輝いている。

宇宙戦艦内部のとある場所に作られた、限られた者しか知らない秘密の部屋である。全方位モニターとなっており、さながら宇宙空間の真ん中に漂うようである。

そのような一室の中に、数人の幹部達はいた。

第一次地球制圧部隊司令長官カルロー・コスはインケン星人である。非常に不細工な面の男であった。地球人の感覚からするとかなり不細工な男であるが、もともとインケン星人は顔こそネクラ族みたいだが顔立ちそのものはそれなりに整っているのが普通である。それゆえにインケン星人から見るとカルロー・コスの顔は、地球人が見る以上に醜悪この上ないものであった。でもカルロー・コス本人はアホなので、難しいことはよく分からず、あまり自分のことは気にしてなかった。あんまり鏡も見ないし。

「はい、ご意見！」

一人が右手を高くあげた。

「はい、ご意見、よし！」

カルロー・コスが提案者をびしっと指さし、発言を許可する。

「先日行った実験により、地球人が我々の技術で脳波コントロール出来ることは分かりました。エグゼリオンとやらを動かす緋鷹優奈を襲わせることにも性行しました、そこで今度は……」

「お前、今何か凄いこと言わなかった？」

カルロー・コスはそれとなくツツコミを入れる。

「いえ、何も。……そこで、今度は街の愚連隊のような輩ではなく、全ての商店街の店員さんに対して操り装置（彼は名称を知らない。だって馬鹿だから）を取り付けてしまうのです。そして、市民どもには何も物を売らないという作戦で、地球の流通経済を窮地に落とし込むというのは如何でしょうか」

「するどい！ 七十ポイント！（ポイントがある程度貯まると景品と交換出来るらしい）ではさっそく、操り装置の量産を命令しておく。さ、次のご意見は？」

「先生！」

一人が手を挙げた。

「いや、先生じゃないんだけど……まあいいや。はい、ご意見述べていいよ」

「ではご意見を述べます。恐怖を植え付けるため、テレビジャックによる放映で我々の戦力を公開しているにもかかわらず、地球人が面倒くさがってUFOとしか呼んでくれないゼオルス型ですが、今までにない規模の大編隊を組み、大爆撃をしかけるのです、必殺の爆弾で！」

男は自信ありげに言い放った。

カルロー・コスは興味を持ち、訊ねた、

「何か、その必殺の爆弾とは？」

「お母さんです！」

男は揺るぎない自信のこもった表情で、ビシツと言った。

「ああ、地球にはお母さんという存在があるらしいが、しかし……すまないがオチがよく分からないよ。……一発で、『あーそうか、あはは』って笑えるようなものじゃないと困るよ。……そもそも君は軍の規律を舐めすぎている！」

「は、申し訳ございません！」

宇宙空間に浮かぶ彼らの足下に、青く、そして白く輝く、大きな

球体がある。

地球である。

現在また、ゼオルース型と、ギューカッシュと呼ばれる人型兵器とを地球侵略のために送り出しているところだ。

戦果の気になるところであつたが、議題にエキサイトしている間に、戦いは終わり、その報告は届いた。

部隊全滅。

なんだかんだ言いながらも単なる物量作戦という正攻法で攻めてしまふ彼ら。

執拗に作戦会議は行っているのだが、「金がないから却下」

いったい兵器を作る金と、陰険侵略作戦のための小道具作る金と、彼らの世界ではどちらが比重が重いのだろうか。地球人も疑問に思うことだろう。単に感覚の相違で片付けられる問題なのかどうか。

「あ、彗星だ」

一人がのんびり口調で言った。

「本当だ」

光の尾をひいた何かの飛行物体が、こちらに向かってやってくるではないか。それはギュルギュルと音を立てて回転しながら（本当は宇宙では音は伝わらない）近づいてくる。彼らの目に、その姿は次第にはつきりとしてきた。

それは彼らのよく知っている顔であつた。

彼らの畏怖する存在であつた。

彼らのいる場所は、宇宙空間のまっただ中のように見えるが、周囲は壁であり、宇宙空間はモニター映像に過ぎない。

果たしてその光は壁を突き抜けてきたのか、いきなり彼らの前にあらわれ、降り立った。

「この無能な指揮官め、死ねい！」

男は叫ぶと同時に、力道山チョップをカルロー・コスにぶち食らわした。カルロー・コスはもんどり打って倒れた。

「インケーン皇帝！」

「敬礼！」

みな一同、その暗い顔つきの中に、さらに畏怖の表情を加えた。
「ついでにお前も死ねい」

皇帝は、まったく関係ないただの警備兵にも真空飛び膝蹴りを食らわし、頭突きをかましたりなどし、逃げる奴には三段蹴りで、一通り暴れ回り、気分がすつきりすると、これが本題とばかりに早速その場で新たな人事を発表した。

「……ええ、では、そのようなわけで、しばらく、今後の作戦はわたしが直接指揮をする。だいたいだ、我々はインケン星人なのだから。堂々と宣戦布告をして、堂々と攻める馬鹿があるか！ 緻密に計算し、相手の嫌なところから攻める。これが王道なり！」

意外にも皇帝はこんな彼らの中にあつて比較的まともな感覚をしているようにも見られるが、その直前の行動がかなり常軌を逸脱しているのです、まだ彼の評価を下すには早いかなと思われる。

そして、会議は続いた。

3

F県華鳴市。

人口、約六万五千人。

四方八方をぐるりと連峰が囲む中、四つの市郡があり、その中の西南に位置する市である。特に観光地というわけではない。地元成人の七割ほどは近くにある野々部市に会社員として働きに出ている。この一帯は近代になって開拓されてきたもので、都会の喧騒から離れていて、なおかつ住環境が非常に整っているため、都会からの移住者が年々増加している。

華鳴市の真ん中を縦断するように、陸奥西部開発鉄道高原宮線と、国道2××線が通っている。

市内に鉄道の駅は三つある。北から、野々部高原宮遊園地前、華鳴駅、そして線路が途中で分岐していきどまりの駅になる柏轟倉庫という駅。

優奈達の通う私立華鳴北第二高等学校は、華鳴駅から東へ十分。国道2××線を横切って少し進んだところにある。大半が電車通学だが、バス通学者も多い。徒歩圏内から通学する者はあまりいないようである。

優奈の家は、反対に華鳴駅から西南へ徒歩二十分。華鳴駅と柏轟倉庫との中間に位置する。緋鷹商事のある商店街を抜けるとそこにバス停留所があり、優奈はそこからバスで通学している。

校舎は、まず四階建の第一校舎。L字型をしており、北が上を向いた地図上でみると、Lの字を百八十度回転させたようになっていゝるそのすぐ東側に、七年前に建設された五階建ての第二校舎がある。旧校舎新校舎それぞれ一番南側の通路から、体育館に続いている。

旧校舎北ブロックの、その屋上にプールがある。

今は一月の極寒の最中だというのに、なんと近々新年恒例儀式である寒中水泳が行われる。そのため明日はプールの大掃除が行われる予定である。

校庭は旧校舎のL字の内側、そして新校舎の東側の広大な土地の二カ所があり、何となくの慣習的に、通常は校庭と言えば前者を指し、後者はグラウンドと呼ばれている。

グラウンドを利用した部活動ではサッカーが盛んで、ここ最近、名門と肩を並べる程度にその実力をつけて来た。サッカーのために別の地方から入学してくる者もいるくらいだ。野球部の練習場もあるのだが、あまりに弱く、居場所がなく練習もしづらい様子……であるためにますます弱くなるこの悪循環。

優奈は一年F組。

旧校舎北ブロックの三階、一番西側から一つ隣の教室である。

夏場であればさぞかし強烈な日差しだったのだろうが、このような季節では、ぽかぽかと気持ちいい。そんなおだやかな太陽の光を窓越しに受けながら、二人の女生徒……いや二人の女生徒と一人の妖精少女(?)が、食事をしていた。

今は昼休みである。

眼下には、すでに食事を終え、はしゃいでいる生徒達。その向こうには煙を吐き上げ大通りを行き交う車の群れ。その向こうには、華鳴駅周辺のデパートなどを含むビルディング地帯が見える。

「ほんと、お疲れだったね」

好子が優奈をねぎらいながら、ウィンナーサンドを頬張る。

「しかし、いいのかなあ。授業中に抜け出しちゃって……」

優奈もパン食だ。少し千切りながらシルピーに分けてあげる。

「いいんじゃないの、地球のことよく分らないけど、セイフもガッコウも公認だつて言つてたんだから。……あたしもうお腹一杯」

シルピー　妖精のような姿の少女はそう言つと羽ばたきあがり、

優奈の頭の上をくるくると回っている。食後の運動だろうか。

「ま、さばれていいじゃん。気にしない」

好子はけろりとしたものである。

「あたしは勉強したいの！　授業でなかったらますます遅れちゃうし」

「だいたい優奈は勉強勉強つて、気にしすぎるんだよ。あたしなんか家に帰つてもぜんぜん机なんかに向かつてないんだから」

ズギューン！

と、優奈の心臓を一発の銃弾が撃ち抜いた。

それで優奈より成績がいいのだから、優奈の立場がない。もつとも優奈を慰めるために誇張して言っているだけで、結構しっかり勉強しているのかも知れないけど。

「しなかつて、出来る人はいいいよ。あたしは、あまり成績がよくないから頑張らないといけないんだ」

「ともかくまだ高校一年なんだから、そんな心配する時じゃないっていうの。しっかりコツコツ努力しているのは分かつてる。結果は必ず出るって。ねえ、金城君」

おかかのおにぎりを頬張りながら通りかかった金城君に、好子は何となく話を投げかけた。

少しだけ聞こえていた金城君は、

「そうだなあ。まだ一年だし、いろんなことやらないと、もったいないぜ。あ、でも緋鷹はもういろんなことやってるか……」

やりたくてやってるわけじゃないんだけど……

「でも、もう一月だし、あと少しで二年生だな。そしたらもうあーだこうだ言ってられなくなっちゃうか。……まあ、おれなんかはさ、どっかの大学にスポーツ特待でって考えてるから、そこそこ勉強して、あとはもうサッカーだけやってればいいんだけど」

「確か九州のなんとか大学からも、声かかってたよな」
近くにいた山崎章が言った。

「ききき金城翼也君、きき九州行っちゃうの？　ほとんど日本の端と端じゃん」

優奈は唐突に叫んだ。またどもっている。

「いや、そのサッカー部の監督が声かけてくれてるっただけで、そこに行くかどうかは分からないよ。でもこのへん、サッカーの強い大学ないから、やっぱりどこか遠いところになると思うよ……」

優奈は、へなへなと力が抜けるのを感じた。

しかし、よくよく考えてみれば、みんながここで育ってここで就職して老いていくわけではないのだ。高校を卒業すれば、みなばらばらになっていく。東京に出て行く者も多いだろう。当然のことであつた。

そして、自分はどうなっていくのだろう。

「でもさあ、そんなこと言ってるわりには、金城君この前の期末テストよかったらしいって、末広が言ってたよ」

「そんなことないって。まあ、自分でもちよつと驚いてしまうような成績ではあつたけど。でもヤマ張ったところがたまたま出ただけだよ」

好子の言葉に少し謙遜してみせる金城君。

出来る人達が、ほんとに羨ましいなあ。

隣で優奈はますますみじめな気持ちになっていた。

頑張っているつもりなのだが、どうしても成績が上位に食い込めないのである。いや、それでもはたから見れば別に恥じるところのない成績なのだが。ただ、精一杯努力していてこの成績だということとは、少しでもペースを落としてしまったならば、あつと言う間にみなに抜かれてしまうのでは。という点が心を暗くする。だって、好子の言うとおりまだこの時期、努力していない人なんか一杯いるということとは、その人達が本格的に勉強を始めたら……

優奈は自分の人生を左右するような、立っていることも辛いというような、衝撃的なことに関しては、意外にも一晩寝るとあっさりと復活してしまう性格である。しかし、こういうことに関しては、何かのきっかけのたびにクヨクヨしてしまうことが多かった。それは彼女自身気づいていないことだが、彼女が口癖のように言うモットー「普通に生きたい」ということの裏返しだったりする。成績に関しても普通の高校生のように悩みたい、という無意識が働いているのである。

「エー、マイクチェックマイクチェック。えー、みなさまいかがお過ごしですか」

まったくもって唐突であるが、外に、雲を突くような大きな男が立っていた。ひらひらとした黒い豪華な衣装を身にまとい、その体の周囲には様々なきらびやかな装飾がされていた。

大きな冠を頭に戴いている。

巨大怪獣……

ではなく、それはどうやら、宙に映し出される立体映像のようだ。しかし派手な姿であった。

大晦日恒例の某歌合戦で派手な衣装の男女が衝突するが、それと比べて一切見劣りしないものであった。

そして、男はおもむろに、そして地球人の驚くような言葉を発した。

「我は、インケン皇帝である！」

空に突如出現した巨大な立体映像の男……。

自らをインケーン皇帝を名乗る男……。

男の周囲には、腰をかがめて小走りしているマイクを持つ男や複数のカメラマンの姿が時折ちらちらと映り、裏方事情が丸分かりなのが、何とも痛々しく思える映像ではあった。

「地球に住む者どもよ……聞くがよい！」

ここで皇帝を名乗る男は、一度言葉を切り、そしてまた口を開いた。

「我々は、あらためて地球に宣戦布告をする！」

その時、皇帝の後ろに映っていた士官が、思わず呟いた。

「陰険云々言つてたわりに、結局、皇帝陛下も堂々としたこと言っているけど……」

皇帝はすかさずダツシュ！

「うぬ！」

地を滑るように低く風を切り士官の懐に入り込むと、突如飛び上がり、士官の首を目がけ両手でモンゴリアンチョップ！士官はあつけなく昏倒し、そして永遠に起きあがることはなかったのである。窓を開け、見上げる優奈。そして、クラスメイト達。

優奈は、みなに自分の正体は明かしていない。よその宇宙人だというならばいざ知らず、現在地球襲撃をしている宇宙人張本人達と同じ血が混じっているなど、さすがに言えるはずがない。そこは、お喋りで何でも喋ってしまいそうなシルピーにも、しっかりと口は封印してある。

ただ、やはり今後の人生の気になることとして何点か上げるならば、上位に来ることの一つが自分の結婚のことだ。自分が地球人と何も変わらないことを考えれば、確かに出来るのだらう。父だって地球人の母と結婚したわけだし、それで自分も生まれたのだから。ただし自分の寿命のことなどもよく分らないし、普通のひとちよつと違う肉体能力があるようだから、生まれる子供も大変かも知れない。……あれ、そういえば、なんでおとうちゃんは、まったく普通なんだろ、と思わず自問。自分は、四分の一だけなのに。

ちらりと金城君の横顔を見た。

金城君は、他の友達らと一緒に、立体映像の皇帝の言動に茶々入れたりなどしている。

「普通に……していただけなのに……」

優奈は最近すっかり口癖のようになってしまった台詞を吐きながら、スカートの下から青いジャージのズボンをはいている（今年の一年生は青ジャージ）。上着を脱ぎ、ブラウスの上からジャージを着た。

これから起こる事態に備えてのことである。

「さつきも、授業抜け出したばかりなのに……面倒だなあ。お昼が潰れるだけならいいよ、あたしの勉強時間を潰すのはやめて……」

皇帝の映像はそのあとも、あーたらこうたら、と主義主張を説明していたが、いきなり、

「ガイア・エグゼリオンとやらを操り、我々の野望の前に生意気にも立ちはだかる緋鷹優奈よ！」

皇帝のその声に、生徒一同、

「おお、名指し！」

と、優奈の顔を見る。

「これか我が指揮のもと初の作戦、バババピッカードーン計画……大編隊による地球襲撃、お前に見事くい止めることが出来るか！」

……何計画ですって？

深く長い溜息。

「やってやろうじゃん……」

溜息とともに嫌な気持ちを出し切ってしまうと、今度はなんだか一暴れしたい気分になってきた。

「作戦開始だ！」

何か上空から降下してきた。彼らの誇る戦艦であった。ある程度まで降下をすると、その中からおびただしい数のゼオルス型と呼ばれる我々の感覚で言うところのUFO、そしてギューカツシュと

呼ばれるエグゼリオン程度の大きさの、黒い人型兵器が降りてきた。
「よし」

優奈は呟く。ジャージを履き終えたので、するりとスカートを脱ぐ。

エグゼリオンは機体内部から思念で操縦する。もつとその思念が伝わりやすいように、特別な戦闘服を源三郎達は開発中とのこと。いや、もう基本部分は完成しているらしいのだが、「叫んでステッキ振ると同時に一瞬にして戦闘服へ！」という機能がまだらしい。そんな恥ずかしいことしなきゃならないのなら、そんな服、欲しくない。

「次はおれの国語の授業だから、早くすんだら思い切りサボッてきちゃっていいよ」

と、担任教師である藤代先生の言葉。

「あたしは授業に出たいんですってば！……もう」

とつと、蹴散らしてやる。と、優奈はファイト満々。

「優奈、地球の平和守ってよ」

「緋鷹、がんばれよ」

生徒達の声援。

「まかせといて。じゃ、緋鷹優奈、ちよつと課外活動してきまゝす」
ここは校舎の三階である。

優奈は窓からためらいもなく飛び降りた。

「エグゼリオン！」

4

地震！

立ってられないほどの激しい揺れ。しかし不思議なことに、生徒達はどこにつかまるわけでもなく平然と立っている。ゆりかごで激しく揺さぶられているようなのに、花瓶の一つも落ちることがない。

校庭、一瞬のうちに大きく地が左右に裂けた！どこまで続くの

かというような深い暗い裂け目へと優奈の体は落ちていく。優奈の体が完全に吸い込まれた、その直後、地の裂け目からはい上がって、巨大な人型のメカがあらわれた。

巨大人型機動戦闘兵器ガイア・エグゼリオン。雑用メカから、既に市民の認識はそうに変化していた。

優奈はその操縦席の中に立っていた。

基本的には機体の動きは全て思念を送り込むことのみで操作が可能。エグゼリオンはそのようなポリシーのもとに設定されており、レバーを引くなどの物理的な操作は一切行う必要はない。ただし、思念は乱れるものであるし、また、いつ誰が操縦することになるとも限らないので、スイッチングすることにより、操縦席内の内壁部分上下左右から計器類、操作盤類、そして座席が出て来るようになっており、飛行機を操縦するような感覚の手動操作も可能になっている。操作系統に関してはかなりのカスタマイズが可能で、優奈が普段行っているのは、機体の手足の動きに関しては、完全に優奈の体の動きに同調させてしまうというもの。エグゼリオンは人間に近いスリムな体型をしており、普通の人間の出来る関節の動きは全て再現可能だ。

バーニアの噴射、ミサイル発射、などの動きについては思念で行うが、右の人差し指だけを軽く折って戻す、などキーとなる肉体の動きと思念の組み合わせにより誤動作を防ぐよう、自分なりにプログラムしてある。

「優奈、自衛隊から出動要請が出たよ！」

「了解！」

ヨネから言われるまでもなく、どのみち、名指しでの挑戦、受けてやるつもりだった。

優奈は右腰に熱線銃の収まったホルスターを取り付けた。ホルスターは裏面が特殊素材で、どんな服にもぴったり吸着する。

敵編隊が攻撃を開始したのは、隣の市。このあたりに住む者の大半が通勤している小さな都市だ。今まで何故か執拗に優奈のいるあ

たりを攻略しようとしていたように思えてならなかったので、今回はなんだか普段と勝手が違う。

しかし、敵の弱さについては普段と何らかわるところはなかった。ふわふわと飛行しビーム状の兵器で街を破壊していくUFO、そして人型兵器ギューカツシュ、その大群の中に単身を踊らせたエグゼリオンは、まったく普段通りの調子で蹴り、拳、また蹴りを放ち、その一撃ごとに確実に相手は爆発炎上していく。エグゼリオンにもビーム兵器は搭載されているが、被害が大きくなるのであまり使いたくない。特に今回はビル上空である。撃墜したゼオルース型やギューカツシュなどが地面で爆発しないように、川にむかつてぶん投げたり、（エネルギー消費が激しいのであまりやりたくないのだが）爆発寸前の敵機を次元転送して安全なところに墜落をさせたり、など、優奈はかなり気を使い、慎重に戦った。

そのために戦いは多少長引きそうだが、戦力的に考えるとライオン対アリのように、戦う前からあまりにも完全な優劣が決まっている。そのため、戦いの結果云々というよりは、いつ相手が撤退をしていくかというだけの問題であった。

「なんだかんだ言つて、いつも通りじゃん」

と、ジャージ姿で課外活動中の少女は余裕の発言。

しかし今回は、まだ作戦の序章に過ぎなかったのである。

「ふっふっふ、かかったな！ 愚か者め！」

優奈達の住む華鳴市、最近戦火によく巻き込まれてしまっているところだが、ここに先ほどの立体映像ではない本物のインケン皇帝の体が……しかも、エグゼリオンほどもある巨大な姿で出現したのである。

「そっちとみせかけてこつちなり、しかも物質巨大化装置で皇帝陛下自ら暴れちゃうよ大作戦！」

そして、自ら言う通り、皇帝は暴れ出した。

なんかこう、子供が暴れているような感じだが、なにせ体が十メ

ートルを優に超えている。その破壊力は家を壊し、アスファルトの道路をばりばりとめくり、銭湯の煙突をおっかき、それはもう滅裂とした次に何をやらかすのかまったく読めない動きであった。

ただ、冷静に考えると、街で巨大ゴリラが暴れているようなものであり、地球侵略とは無縁な気がしなくもない。

「優奈！」

通信回路に祖母ヨネの声が入ってくる。

「分かってる！」

もう優奈の周囲の敵はあらかた始末した。本当は自ら撤退してくれば一番よかったんだけど。

なにせオフィス街である、どこにも建物が密集している。被害を抑えるため時間をかけたが、むこうでも皇帝出現により被害が出てしまっているの、多少手荒になっってしまうが、なるべく人のいなさそうなところに敵を落とすなどし、素早く部隊を壊滅させた。

「次元転送、ポイントSQL3474！」

優奈は目を閉じ、エグゼリオンの脳波ジェネレーターに思念を送る。

目を開く優奈の前に映っていたのは、皇帝の姿であった。

「なんと、一瞬で！」

皇帝の表情には驚きが隠しきれないようだ。

「地球の上なら、どこで暴れたって同じなんだよ、エグゼリオンの前には！」

優奈は手を突き出した。

エグゼリオンの右拳が皇帝の頬に炸裂。

「痛い！」

皇帝は叫んだ。

もう一発、反対の頬、

「痛い！」

皇帝は殴り返そうとするが、エグゼリオンの軽快なフットワーク

に難なくかわされ、懐に入られ、腹部に拳の連打を浴びる。最後に膝蹴りが腹部にめり込む。「むー！」と、お腹をおさえた瞬間に、今度は頭、背中、お尻、足、脛、顎、再び腹、大事なトコ、頭、腹、腿、とまさにタコ殴りといった状態であった。

「痛い痛い痛い痛い痛い！」

かつて地球にだって、ここまで無様な姿を晒す皇帝がいただろうか。

「うぬ、覚えておれ！ うおおーん」

皇帝は、泣きわめきながら走って逃げていった。

そして姿を消した。はたして元のサイズにでも戻ったのか、透明にでもなったのか、飛んで逃げたのか、瞬間移動したのかは分からないが。

優奈は緋鷹商事、自分の家まで戻ってくると、エグゼリオンの腰をかがませ、胸部扉を開いた。

「おお、優奈、ご苦労さん」

源三郎が出てきた。

「おとうちゃん、こっちは大丈夫だった？」

「ああ、もう少し皇帝に暴れられてたら、ここら一帯壊滅してしまっていたかも知れないけど。そしたら、ここもどうなっていたか」

優奈の肩につかまって、余裕の戦いぶりを見ていたシルピーであったが、いきなり何かぞくりとするような感覚に襲われた。

「優奈、なんか嫌な気がする！ 気を付けて！」

「な……」

優奈が言いかけたその時である、

「実はまだ、近くに隠れていたりして！」

開いた胸部扉の上に立つ優奈。いつの間にか等身大に戻っていた皇帝の姿をその視界に捉えた。彼は緋鷹商事の家屋二階の瓦屋根の上に立っていた。

言い放つと同時に、皇帝の体が怪しく光った。クロスさせた手から、さながら光の龍のように一瞬にして走る黒紫の一条の閃光、優

奈の体を直撃した。

戦いの無い時以上に優奈が油断をする瞬間、それは戦いの直後である。皇帝はそこを突いたのだ。

体が中から爆発するような凄まじい衝撃、全身が裂けるような痛み、優奈は激しく息を吸い込んだだけで、悲鳴をあげることも出来なかった。

即死せずにいられたこと自体が、奇跡のようなものだったのかも知れない。開いた扉の上にいた優奈は、皇帝の姿を見るや、本能的に、後ろへと、エグゼリオンの内部へと、倒れ込んでいたのだ。胸部の扉は開いたままだったが、エグゼリオンの空間防御シールドの効果で、かなり威力が軽減されたのだろう。

それでも優奈に今までかつてない激しい苦痛を与え、全ての神経網を麻痺させ、気絶をさせるには十分すぎるほどの威力だった。操縦者保護のため後ろから競り出てきた座席が、優奈の体を包み込む。優奈の背中の下敷きになったシルピーは、体を潰されながらも咄嗟に防御の魔法をとねえ、自分と優奈とを守ろうとした。自分は優奈と違い直撃ではないのに、それに魔法防御をしているというのに、それでも今までに感じたことのない痛みが身を貫いた。

「ふふふ」

と笑う皇帝の顔を真一文字に薙ぐように、熱線が走り、ジューと目玉焼きを作る時のような音があがる。

「あじじじじじ、痛い痛い、ぬううう、覚えておれ〜。うおおん。顔が痛いよ〜」

顔に熱線銃の直撃を受けた皇帝は、今度こそ本当に、泣き叫んで走って逃げていった。

倒れ際、気を失う直前、無意識のうちに、優奈が腰のホルスターにある熱線銃の引き金を引いていたのである。

「優奈、大丈夫？ 優奈！」

シルピーが呼びかける。

優奈は椅子にぐったりとしている。

両目を閉じ、首を項垂れている。

その息は小さく、

何度呼びかけても、ぴくりとも応じることはなかった。

第六章 闇

1

何故だか、最初からこれは夢であるということが直感的に分かっていた。

上品そうで、綺麗な女性であった。

優しくそんなその瞳には、弱々しさはなくむしろ心の強さを感じる。和服を着ている。

顔立ちだけからすれば、質素な感じの日本風な美人である。

ただし髪の毛の色は黒ではなかった。赤い。赤くさらさらと柔らかい。陽光を受けると炎が燃え上がるかのように輝いた。

その夢には自分の姿はなかった。

女性一人きりの映像である。夢に自分は存在していないのか、それとも、自分の視点からの夢なのか、それすらも全く分からない。

えてして夢というのはそういうものかも知れないが、清楚な立ち姿のその女性が、今どのようなところにいるのか、はっきりと映っているのにも関わらず、どのようなところにいるのかがまったく分からなかった。漆黒の闇に浮いているようにも見え、崖の淵に立っているようにも、どこかの山小屋の中、草原の中の風景のようにも……そして、夜のようにも昼のようにも思えた。海の中とも、空とも、宇宙とも。

近づきたいのだが、自分に手足があるのかどうか分からないどころか、果たして自分がその世界に存在しているのかも分からない。それに、追えども相手が遠ざかっていくようで、なのに彼女はいつまでも同じ場所にたたずんでいた。

いったいあの人は誰なのか……

そして自分は誰……

目が覚めた。

ゆっくりと目を開ける。

眩しい……

大量に飛び来んでくる光に目が痛い。

いきなり水の中に潜ったかのように、視界はぼやけていたが、周囲の色がだんだんと分かるようになってきた。

自分は横たわっているようだ。布団に寝かされているようだ。なぜ、こんなことになっているのだろう。

一人の少女が自分を見下ろしているようだ。視界はまだぼんやりしていたが、雰囲気ではつきり分かる。親友の好子に間違いなかった。

その隣に源三郎、そしてヨネ、由利香……

「好子ちゃん……」

優奈のその声は力なく、囁き声にすらならず、自分の口の中に全て消えてしまった。

「よかった、優奈が生きてて。なんか大変なことになっているって聞いて、もう学校飛び出して、かけつけて来ちゃったよ」

優奈は上半身を起こそうとしたが、意識と体がまったく別になっ

てしまっているようで、肉体が全く反応しなかった。

「ありがとう、好子ちゃん」

体は動かないが、口だけ、何とかかろうじて動かすことが出来た。それでも、精一杯頑張つて、やっと囁き声程度だ。

「どうだ、具合は？」

源三郎が訊ねる。

「まだ、目がよく見えない……」

左目はかなりぼやけてはいるが一応光を感じることは出来る。だがその左目を閉じると、いつさいの光が入ってこない。右目は全く機能していなかった。

「全身の神経がやられちゃってるみたいだ、でもいずれ回復してくると思うから」

ヨネが説明する。

皇帝の必殺技は凄まじい殺傷能力があり、仮に一命を取り留めたとしても身をよじるような激痛、神経麻痺で数日間は動くことも出来ない。

治療のしようはなく、ただ時を待つだけなのだが、とりあえず優奈の目に負担がかからないようにと、ヨネは両目を冷たいタオルでおおい隠しておいた。

優奈の手がぴくりと痙攣するように動く。もう一度。

「はやくよくなってよ……」

好子は優奈の手をそつと握った。

「好子……ちゃん」

「あまり喋らないほうがいいよ。はやくよくなって。今はおとなしく寝てなね。勉強のことも考えちゃ駄目」

好子はその後、少し源三郎達と優奈の容態について話をし、改めて安心すると、

「じゃ、おじさん、おばあちゃん、優奈が無事なの分かって安心して、帰りますね。おじやましました。お茶ごちそうさまでした」
帰っていった。

「良い娘だね」

ヨネがしみじみと呟く。

「そりゃ……あたしの友達だもん」

優奈は切れ切れとした口調で、笑みを浮かべた。

3

好子が帰って一時間ほど。

もう夕方、五時である。つい十分前まではまだ日差しが残っており明るかったが、もうすでに太陽は完全に山の向こうに隠れ、真っ暗である。急激に寒さが増した。

優奈はやっと自力で上半身を起こすくらいのは出来るようになった。ほとんど回らなかった呂律も幾分かまともになってきた。

だが、神経をやられただけでなく、肌が焼け付くほどの激しい閃光を直視してしまったため視力は相変わらずの状態。かえって多少神経が働くようになってきた分だけ、体がズキズキと疼いて痛む。

そんな時であった……

緋鷹家にかつてない珍客があらわれることを告げる呼び鈴が鳴ったのは。

普段通りのチャイムの音に、普段通りにインターホンにて「はい、緋鷹商事です」と応対するヨネ。しかしその声を聞いた途端に、表情が渋いものになった。

「どうも、インケン皇帝ですけど」

すぐさまヨネはドアに向かって駆け出して行った。

「あんたなんか来るんじゃないよ」

「こら、土足で上がるんじゃないよ馬鹿」

「さっさと帰りな！」

ヨネの怒声が連発。

そして一分後、ヨネの制止をもとめせず、インケン皇帝はその姿を緋鷹一家の前にあらわしたのである。

ずかずかと上がり込んで来た男の顔を、優奈ははつきりと見ることは出来なかったが、体を感じるその気配、見るまでもなかった。

インケン皇帝は、皇族用の豪華な装飾の黒い服を着ているのだが、今日は緋鷹商事への訪問ということで、さらにその上に、セールスマンのようなスーツを着ている。優奈のお見舞ということなのか、手には花束と果物を持っていた。

「あ、おかまいなく」

由利香がつい癖で持つて来てしまったお茶に手の平を差し出して制する。

「ほんと……インケンだね……あんたらは」

優奈はたどたどしい口調で、なおかつ馬鹿にしたように言う。

「いや、それほどでも」皇帝、なんだかんだ出されたお茶をずずっとする。「うむ、まずい、もう一杯」

インケン皇帝の顔には、さきほど優奈が放った熱線で焦げた後が、まだくつきりと残っている。

お茶を飲み終え、ちゃっかりおかわりを頼んだところで、

「さて、社交辞令はこれまで。本題に入るか。……緋鷹優奈よ」

そう言つと優奈のほうを見る。優奈はぴくりと体を反応させるが、まだよく視界がさだまらない。

「いや、ルウカ・ラム・リ・フィ・ル……我が娘フィ・ルよ。迎えに来た、我とともに来るのだ」

優奈の体を電撃が走り抜けた。

我が娘……

フィ・ル……

皇帝の……

娘……

「あたしが……」

そんな馬鹿な……

「やいやい、このインケン野郎！ 適当なこと言つなよ」
源三郎が叫んだ。

「そうだ、優奈はあたしの可愛い孫なんだから」
ヨネが続く。

「そそ、そうだ、ぼくの妻の祖母の姉であるところのヨネさんの孫娘なんだからな」

伸也が続く。

みんなの喋り方のたどしきから、下手な芝居だと誰にも分かる。

……ということは……

優奈は血の気が引いていくのを感じた。みんなの顔が見たくて、起きあがるうとして、襲う激痛に身をもたえる。

皇帝は彼らの態度から色々と察したらしく、

「なかなか面白い環境で、我が娘を育てたようだな」
鼻で笑った。

「おとうちゃん……こいつ、何……言ってるの？」

「ふふ、誰がお前のおとうちゃんだと。お前のおとうちゃんは、我、インケン皇帝である……！」

そついうと皇帝はサラリーマンスーツを脱ぎ捨て、皇帝の黒い装束をばつと広げた。女子高生の前にあらわれるコートを着たオヤジみたいである。だが皇帝は恥じることもなく、続ける、

「そしてこの男は、いやこいつらは、ただのインケン星で働く召使いロボットのなれの果てだ！」

源三郎を指さした。

「だ、誰がロボットだ、このくそ皇帝が！」

源三郎は皇帝に飛びかかり、殴りかかった。

だがその拳はむなしく空を切る。

いや……それは源三郎がわざと外しているようにも見えた。皇帝からは一切避けようとしている様子は感じられない。

「フィ・ルよ、これがその証拠だ！」

皇帝が両の拳を握ったまま腕をクロスさせ、それを前に突き出すように広げた。その手の先から黒紫の光のような煙のようなものが走ったが、一瞬であつたためよく分からない。……直後、モヤのよなものが源三郎の体を包み込み、そして爆音が……

爆音とともに源三郎の腕が吹き飛んでいた。

「おとうちゃん！」

いったい何が起こったのか……

源三郎の腕がつけね部分から消失しており、肩から火花を散らしていた。

……機械部品がショートしている。

機械の体……

自分は源三郎の娘ではなかったのか……

ヨネの孫娘ではなかったのか……

「くそつたれ！」

片腕を失った源三郎、今度は体当たりでもしようと思ったか皇帝

に飛びかかった。だが、またもや皇帝がかわすまでもなくわざとやっているかのように子供のように無様によるけ、倒れてしまう。

皇帝は邪悪な笑みを浮かべ源三郎の顔に目をやる。

「人並み以上の知性を持ち、感情を持ち、逃亡や反乱などの賢しき企てを考えることは出来ても、所詮は回路内の抑制プログラム三箇条のおかげで、お前らには、我をどうこうすることなど出来はしないのだ！ 小癪なロボット風情よ」

いったい……

何なの……

自分を取り巻く環境が、二点、三点して、何が何なのかがさっぱり分からない。

わたしは……

誰……

教えて……

わたしは何者……

わたしに流れている血は……

それともこれは夢……

誰か……

「……畜生。やっぱり駄目だったか。……優奈、おれはこの通り皇帝やインケン星人を攻撃することは出来ねえ。お前が……戦ってくれ、インケン星人のために……本当のインケン星人のため、そしておれ達のためにも立ち上がってく……」

源三郎の絶叫にも近い言葉が発し終わらぬうちに、

「黙れ！」

皇帝の声とともに、源三郎の体が爆発した。

皇帝の怒りのエネルギーは、今度は腕だけにとどめず、全身を粉々に砕いてしまったのである。

すでにそこには、源三郎の姿はなかった。ただ、数秒前まで源三郎の立っていたところに、機械の破片が落ちていた。

「おとう……」

優奈の頭の中は真っ白になった。

何かを叫んでいたかも知れない。

涙を流していたかも知れない。

わかつているのは、ただひたすら不快な気持ちが頭の中に充満しているということ。

たえ何があるうと、どのような秘密があるうと、やはり今まで暮らしてきた、父なのだ。それが一瞬にして、このような姿になってしまったことは信じられないことだったし、そして、

「……許さない」

優奈がゆっくりと立ち上がった。まだ肉体の感覚の大半が麻痺しているというのに、どこにそのような力があるのか。

自分の中にかくも邪悪な感情があったのか。……優奈は、目の前にある男を八つ裂きにしてやりたい気持ちを感じ、そんな自分に対して嫌悪感を覚えた。

「ほう、許さなければどう……」

「ブン殴る！」

皇帝の月並みな台詞が言い終わらぬうちに、優奈は踏み込み、皇帝の顔面めがけて素早く拳を突き出した。

拳は虚しく宙を切る。

「馬鹿な、さきほど皇帝フラッシュビーム浴びているのに、なんだこの回復力は？」

しかし、まだかなり足下がふらふらとおぼつかない。

皇帝だって武術訓練はしている。さきほどだって生身で街を壊して暴れていたほどである。このような攻撃を避けること程度、造作もなかった。

それでも優奈は一心不乱に皇帝に拳を振り回し続けた。どうせまだ視力が戻っていない。闇雲に、出鱈目に攻撃を続けた。

優奈は泣いていた。

涙を流していた。

その涙の一粒一粒には、父との思いでが詰まっていた。

「痛い！」

ついに皇帝の頬に優奈の拳が炸裂した。

闇雲に拳を振り回しているだけの優奈だったが、それが逆に皇帝の予想もつかない攻撃に繋がったのだ。

驚いて動きが止まった隙に、もう一撃が、今度はフック気味にあたった。

軽い脳震盪を起こして頭がフラフラとなる皇帝に、さらに優奈の攻撃が襲う。頭、頬、頬、首に地獄突き、脇腹、鳩尾、金玉膝蹴り×2、脛、アゴにハイキック、格闘技の反則技サミング、左頬に右フック……と、もう、皇帝ズタボロ。エグゼリオンとの戦いの時同様に、タコ殴り状態で、あつと言つ間にボロ雑巾のぼうがよつぽどマシという状態になってしまった。

「痛い痛い痛い痛い！」

ついに痛みに耐えきれず、皇帝は逃げ出した。最後に目の下にくらった一撃がよほど痛かったのだ。

「そんなロボットもの言うことなど聞かず、我がもとへ来るのだ。フィールよ……我が娘よ。お前はインケン星の皇帝の娘なのだぞ、どちらを選ぶか、よく考えておくがよい。うおおおおおん、痛いよー！」

皇帝は応接間のドアを開け、あつという間に姿を消した。

優奈は自分の両の拳を見た。ぼやけた視界の中、真っ赤になった両手が映る。皮膚が切れて、血が滲んでいた。

優奈の思いを察したヨネは、

「あんたは生身だよ。……皇帝の言っていた通り、やつの娘なんだから。体の基本的な構造は地球人と全く同じ……赤い血が流れているんだよ」

「……こんな血なんか、全部流れ出しまえればいい！」

優奈、半錯乱状態となつてしまい、声を荒らげ、テーブルの上にあったナイフを取り、自分の腕に突き立てようとする。慌ててヨネが優奈の腕をおさえ、なだめた。

優奈は、ヨネに抱きつき、泣き崩れた。

4

優奈はヨネに傷の手当てを受けている。

「ばあちゃん……って言っているのか。……今度こそ、本当のことを聞かせてくれるんだろうね」

額、両腕、脚にどんどん包帯が巻かれていく。

消毒液が激痛に感じられるほどに神経も回復してきたが、精神状態は全く落ち着かなかった。あまりに急激に変化していく事態に、どんな表情を作ればいいのか。

「ああ、ここまで来たからには、真実を話すよ。インケーンのために、そしてあんたのために」

「インケーンのために……」

さきほど源三郎も爆発前にそのようなことを言っていた。

「誰があいつらのためになんか！」

「まあ、今の優奈には、そう思うのも無理はない。それじゃ、インケーン星の昔のことから話さないといけないね。じゃ、話すよ」

「ごめん……待って……やっぱり……聞く勇気が出ない。聞くのが怖いんだ……」

源三郎もヨネも、遠山夫妻も……ここに暮らす者は自分以外みなロボットだった。それだけでさえ、衝撃的な事実だというのに、さらに自分の秘密をここで聞かされたら、それだけで頭がパンクしてしまう。少し落ち着く時間が欲しかった。

戻りたい……

優奈は心の中で呟いた。

何も知らなかった頃に、戻りたい……

5

その日、優奈は好子の家へ久しぶりに電話をかけた。

仕事場にはビジネスホンが何台か置いてあるが、居間に置いてあ

るのは古いダイヤル式の黒電話だ。

毎日会っているというのに、先ほども会ったばかりだというのに、電話で聞く好子の声はまた暖かった。

とりたてて、何を話したわけでもない。

二十分ほどの通話であったが、ほとんどが優奈のすすり泣く声ばかりで、まるで会話になっていなかった。

最後のほうで、優奈はぽつりと言った。

「何があっても、あたし達、友達だよね」

唐突の質問に困惑しているのだろうか。返答に若干の間がある。

「……へんだよ、優奈。何があったの……」

「ごめん、変なこと聞いて、何でもないんだ。ただ……」

「友達に決まってるじゃない」

「うん……友達だよね……」

優奈はそう言つと、また泣き出した。

第七章 暗澹

机に突つ伏している。

1

頭に包帯、右目に眼帯、さらにところどころに包帯、絆創膏、それ以外にも生傷だらけ、という姿が実に痛々しい。それでも、優奈は一日学校を欠席しただけで、翌々日には元気には言えないまでも自力でバスに乗って登校していた。学校に行くのも苦痛だったが、それ以上に家にいることが苦痛だった。

宇宙人襲撃の件だけでなく、警察からの要請で、人命救助のために授業を抜け出すことは度々あった。しかし、病気とは一生無縁かと思われるほど頑丈で健康な優奈は、病欠などは一度もしたことがなかった。そんな優奈が昨日は欠席したのである。級友達を心配させるには十分すぎるほどだ。お見舞に行った好子が病状説明をしてはいたが、それでもやはり優奈が怪我や病気で休むこと自体、どうにも信じられなかった。

しかもその理由がインケン星人との戦いによる負傷とのこと。登校してきた優奈に対し、本来ならばみんな驚き、そして周囲を取り囲んで褒め、そして本人からの武勇談をせがんでいたことだろう。それが出来なかったのは、優奈のその痛々しい姿のせいというよりも、その暗く落ち込んだ表情のせいだったのである。

……自分はインケン皇帝の娘

爆発四散する、ずっと自分の父親だと思っていたロボット

床にはその断片だけ……

そして父の正体だけでなく、家族みな……

頭の中をそんな思いが映像のように何度も何度も繰り返される。

辛く落ち込むようなことがあっても、翌日にはすっかり回復している、というのが優奈の取り柄だったのに。したがって、生徒達は

みな、落ち込む優奈の顔をよく見ることはあっても、登校時にすでに暗い優奈の顔など、初めて見たのである。どう接していいのか分からなかったのである。

好子も当然困惑している。

何があつたのかは分からない。何か戦いの中、辛いことがあつたのだろうか。せっかく登校してきた優奈だというのに、彼女のその上にだけ、暗雲がたちこめて、激しい雷雨になりそうなほどにゴロゴロと怪しげな気配を放っているのである。あの夜の電話もやはり様子がおかしかったし、いったい何があつたのだろう。

「弱つたなあ……ねえ、金城君、励ましてやったら」

好子は金城君の脇腹を人差し指でつつく。

「よし！」

つかつかと優奈に近づき、背中をぽんと叩く。

「おい、緋鷹」

反応無し。

「緋鷹、元気だせよ。お前らしくない……こらー、聞いとるか！」

背中をバーンと叩いて気合いを入れてやる。包帯だらけの優奈に対し、容赦のない攻撃。

が、反応無し。

「優奈、金城君が励ましてくれてんだよ！」

好子の言葉にも優奈はピクリとも動かず。

普段の優奈ならば金城翼也に振られようものならば、腰を抜かしてしまうか、天井まで飛び上がってしまいそうなくらいなのだが、そんな普段とのギャップが、見ているクラスメイト達をますます心配させた。

逆に一人いらいらした表情を浮かべて優奈を睨んでいたのが吉波瑠璃子だ。

優奈が悲劇のヒロイン的に注目されているのが気に入らないのか

……

いや、違った。

吉波瑠璃子は優奈の机にいき、バンと激しく机を叩いた。

「なに落ち込んでいるの、あなたらしくない。いつもみたいにバカな顔して、へらへら笑っているか、ぼけーっとした顔をしてくれないと、調子が狂ってイライラしてくるわ」

吉波瑠璃子なりに、優奈のことを励ましているのだろうか。好子はそう思った。

そんな中、皇帝が指揮者をつとめる演奏会の二幕目が上がったのである。

2

それはまた立体映像であつた。

「また皇帝があらわれたぜ」

そう、青空に皇帝の映像がいきなりあらわれたのである。

皇帝の足下のあたりに、「L I V E」と書いてある。

そして、まるで日本軍歌のようなBGMが流れ始めるが、バックにちらちらと小走りする裏方の姿が映ったり、小声でスタッフに指示する声を聞こえて来たりなどの杜撰さが細かい演出を全て台無しにしていた。

「ええ、お久しぶりです。覚えてますか？ 皇帝です。皆様におかれましては、元気そうで何よりです」

「あいつ、毎回社交辞令から入るよな」

金城君が、常々思っていたことを呟いていた。

町内会の挨拶のような台詞がつらつらと続き、皆が飽きてきたころ、ようやく、

「さて、挨拶はせいぜいこのあたりまでとして。地球人の諸君、

今日は大事な発表がある。心して聞くように。お前らが地球の味方だと思っているガイア・エグゼリオン、あれは我々インケン星人が先兵として送り込んだ殺戮兵器である！」

ジャジャーーン！

と、効果音が鳴った。「ちょっとタイミングが遅い！」と、裏方に怒っている皇帝の姿をカメラはばっちり捉えていた。

「そんな！」

「エグゼリオンが？」

一同の表情に同様が走る。

一斉に優奈を見たのは言うまでもない。

優奈は皇帝演説にも興味ないようにひとり自分の席に座っていたが、さすがに顔を上げ、そのインケン皇帝の映像に目をやっていた。どうでもいい事だが、インケン皇帝の顔には、まだ優奈に熱線銃でやられた焦げ痕が生々しく残っている。

「そう、我々はエグゼリオンを地球を救う英雄に仕立て上げることになった。それは、諸君に絶望という果実を味わってしまったための第一段階だ。さあ、緋鷹優奈、いや我が娘、ルウカ・ラム・リ・フィ・ルよ。今こそ、エグゼリオンを使って、地球を混乱に陥れるがよい。そして我が元に戻り、天からこの星の壊滅する様を眺めて酒を飲もうぞ。支配される愚かなる民の姿を見て、笑おうぞ」

再び、皆優奈の顔を見る。

優奈はうつろな表情をしていた。皇帝の映像の方角を向いているが、視線はどこにも定まっていないうた。

「で、でたため言ってたよね、ね、優奈」

「何とか言えよ！」

「緋鷹さん！」

「優奈……」

好子が、そして他の生徒達が次々と優奈に話しかけ、問いただそうとするが、優奈は体を震わせているばかりで一切の応答がなかった。

「優奈！」

好子は優奈の肩を揺さぶった。

「おい」

「まさか……」

「本当のことなのかよ……」

優奈は何も言い返すことが出来なかった。

単に嘘だと言えはいだけなのだ……

皇帝の出鱈目だと言えはいだけのことなのだ……

それが優奈には出来なかった。

先兵である、ということについては嘘だと弁明できよう。自分は地球の味方だ、と。絶対に間違い無い。

しかし、皇帝の娘ではない。と言えばみんなに嘘をつくることになる。そこにイエスともノーとも言わずはぐらかし、とにかく味方なんだと言つても信じてもらえるはずもない。結局、皇帝の娘であることは本当である、と言わねばならなくなってしまう。

優奈は、そういった部分の思考、話術に関しては、信じられないくらいに不器用な少女であった。逆にそういう点が人に信頼感を与えていたのだが……

「優奈、嘘だつて言つて。何で黙ってんの!」

好子の言葉、優奈はすっかりその胸に受け止めていた。しかし、返す言葉が何も出てこなかった。信頼に応えたい。不安に感じている皆の心を救いたい。そう思っているのに、思うように喋ることが出来ず、ただ弱々しく震えているばかりであった。

そして、

一条の涙が頬を伝った。

これが好子への精一杯のメッセージだったのかも知れない。

結局、その口から何らかの言葉が発せられることはなかった。

3

その日のテレビラジオのニュースはこの話題で持ちきりであった。街でも号外を配って宣伝していた。

皇帝はF県のある有名ホテルの一室で記者会見を開き、テレビ局関係者達の質問に答えていた。

「では、やはり緋鷹優奈は皇帝陛下の娘ということですか?」

一人の女性がマイクを向け、訊ねる。

「然り」

皇帝は大きな声ではないが、威厳よく言った。

「雑用メカとして以前からある程度の知名度はありましたが、あのガイア・エグゼリオンも、皇帝陛下達が送り込まれたという事実間違いはないですか？」

「うむ。間違いはない。……作戦の行き違い上、このように『ガイア・エグゼリオンによる地球人を絶望させて侵略計画』の全ての真実を話してしまったことは我々も迂闊だったかも知れないとは思っておるがな。しかしこうなった以上、もう隠していてもしょうがないのだから、我々の主義には反するが、我が軍、そしてガイア・エグゼリオンとで、正々堂々と地球を侵略しちやおうかな。わはははは」

4

優奈は自分から弁明の機会を捨てた。

優奈のクラスメイト達は優奈からの、自信に満ちた返答を待つていたというのに……

優奈は無言のまま、学校を早退してしまった。

生徒らは優奈から取り残されてしまったのである。

不安、何ともいえないわだかまりの感情が残った。

そうになると、優奈に対しての怒りが沸いて来る者などもいた。

マスコミが大騒ぎしているように、「やはりあの皇帝の発言は事実だったのだ。緋鷹優奈はインケン星人だったのだ。そして、あの皇帝の娘だったのだ」と完全に優奈敵視の発言をする者まで現れる始末。悲しい集団心理によって、彼らはどんどんその意見になびいていきはじめたのである。

なんとまだ、あれから一時間もたっていないというのに。

人の心というのは、かくまでも儚く弱いものなのだろうか。

「優奈……」

好子の呟きも怒号喧騒の中むなしくかき消されるばかりだった。

皇帝の発言による直接被害は、当然、緋鷹商事にも及んでいた。大騒ぎになっていた。

……こちらは、ヨネが必死になって釈明をしたが、政府、警察にはまったく受け入れられなかった。

戒厳令を敷かれ、そして、緋鷹商事は自衛隊や警察官によって隔離され、厳重な警護のもとに置かれた。

怪しい行動がとれないよう、建物の中にまで警備の者が入っている。

一家は居間に集結している。警備は居間の中にまでは入ってこなかったが、それでも扉のすぐ向こうに立っている。法治国家とは思えない、中世の魔女狩り並の横暴さだ、とヨネは主張したが、一介の警官達に聞いてもらえるはずもない。

そんな騒ぎの中、優奈は力ないふらふらとした足取りで自宅まで帰ってきた。後ろに二人、警察の者がついていて。学校から、バスの中まで、ずっとついてきたのだ。

優奈の表情がうつろである。周囲を妖精のような少女、シルピーが飛び、舞っている。

警官達は居間に入ろうとする優奈を通した。

「おかしな真似はするなよ」

警官の言葉は優奈の耳には入っていないかった。

「おかしな真似してんのは、あんたらじゃない！」

シルピーが優奈にかわって文句を言った。

居間に来るなり、制服姿のまま優奈は倒れ込んだ。力が出ない。

「優奈……なんだかえらいことになっちゃったけど」

と、ヨネ。

「すべてを話す時が来たようだね。……もう、行動の強制はしない。真実を……本当に真実を話すから、あとは優奈の勝手におし」

そして、ヨネは語り始めたのである。

インケン星は銀河系から三百八十万年離れたところにある。
平和な星だった。

生まれによる身分の差などない。星自体が豊かな物資に恵まれていたためとりたてて貧しい者もない。人々は助け合い、戦争なども有史上、外惑星からの自衛のためという目的以外で行ったことはなかった。

人々は、性格や話し方が地球人と比較するとちよつと暗いが、それは単なる表現方法の違い、とにかくみな根が善良で、身を投げうって他人に尽くす者も少なくない。

そして歴史は流れ、現在の皇帝の時代が来た。

これからも平和な治世が続くはずだった。少なくとも、それを疑うものは誰一人いなかった。

だが「その時」は、いきなり訪れたのである。

星の政治経済すべてを管理する中央コンピュータが暴走した。外惑星を支配する魔王のかけた呪術のせい、という説もあるが、真実のほどは誰にも分からなかった。このコンピュータの暴走自体、ごく限られた少数しか知らないことから。

そのコンピュータの意志が完全に暗い闇へと染まっていく中、まだわずかに残っていた善なる意識が、新たなプログラムを作りだした。そのプログラムは巧みにメモリ空間上に隔離配置され、その微弱な電流は一つの意志として機会を待った。

さて、インケン星の人々は、中央コンピュータの邪悪な脳波誘導支配を受け一人また一人と操られていった。急速に、「全宇宙の支配」という目標に向け、全員の意識が統一されていった。本来の彼らにはそのような幼稚な思考など微塵もないはずなのに。

全員が支配されてしまったわけではない。強烈な脳波誘導による精神支配を受けなかった強靱な意志を持つ者達がいた。

自分達の星が、どんどんおかしくなっていく。今こそ武器を持つ時である。平和を愛する自分達ではあるが、それ故に、これは戦う

べき戦いである。そして彼らは反乱を起こした。絶対的に人数が少ないためゲリラ的に戦いを挑んだ。

まだコンピュータに善なる意志があった頃に作られた、あの身を潜めていたプログラムは、今がその機会だとばかりに、反乱兵達へ接触を図った。ネットワークを通じ、家電、召使いロボット、戦闘兵器へと入り込んだのである。大半は建物回線に入る前の公共網内で害敵探査され、そのまま抹消されてしまったが、それでもそれなりの数が、反乱兵達と接触することが出来た。

そのプログラムによる意志達は、当然、中央コンピュータ内部で起きたことを知っている。自分らはそこから生まれたのだから。そして、そのことが、自分の誕生の発端なのだから。意志は反乱兵達にすべてを伝えた。

戦いの目的は、中央コンピュータを倒すためのものとなった。

だが残念ながら、仲間の絶対数があまりに少なすぎた。

さらに、次々と仲間達が、中央コンピュータの脳波誘導に支配され、数を減らしていく。意志の強さで支配をはねのけていただけなのだから、戦いの中で精神的に疲労し、弱った者はすぐに支配の力に取り込まれてしまうのだ。

逆を返すとそのような中で生き残った彼らは、誰よりも強靱な意志を持つものばかりであった。

彼らは強引な、そして死をも恐れぬ作戦に出た。いや、作戦というものですらなかった。中央コンピュータのある教皇区への死の突撃である。数少ないとはいえ、精神的にも肉体的にも優れた精鋭揃いである。運良く誰かが辿り着き、中央コンピュータを破壊することが出来れば、みな洗脳は解けるはずだ。もしも失敗すれば、相手は自分らの数千倍の兵力だ、取り囲まれ、逃げ場所を失い、みな処刑されるだけの話だ。

結束固く、教皇区へと進軍した彼らは、中央にあるコンピュータを倒すため、進んだ。

「理解不能！」皇帝側、いや狂った中央コンピュータは、彼らの

突撃の理由を理解することが出来なかった。だが、阻止、排除せねばならない相手に違いはない。結果、コンピュータは強引かつ単純な回答を弾き出した。それは、洗脳装置電波の出力強化。

教皇区の建物の中で、惨劇が起きた。すでに洗脳をされていた兵士達の一部は、耐えきれず、脳が破壊され、倒れてしまった。残った兵士達はよりいっその忠誠を、そして反乱兵の撲滅を、皇帝に誓った。反乱兵達の中にも、洗脳電波の出力強化により、同士討ち、そして耐えきれずに気絶する者、洗脳される恐怖に自害する者などが現れた。

その誰一人まともな者のいない狂乱のさなか、反乱兵に従って来ていたロボット達はうろたえた。自分達は戦う人間の補助は出来ても、自分らにプログラムとして組み込まれている「三箇条」という掟のため、直接武力に訴えるようなことは出来ない。

逃げるしかなかった。

そんな中、ロボットの一体が、泣いている一人の赤子を見つけた。何か、この赤子は、他と違う……

ロボットは数奇な運命のようなものをこの赤子に感じ取った。そして、連れ去ったのである。それは間違いなく、「プログラム」という思考を超えた、一つの奇跡であった。

彼らロボット達は「三箇条」に抵触しないよう、巧みに自分らの能力を生かし、敵を攪乱させ、巨大宇宙船を奪取。インケン星を脱出した。

内戦に疲弊したのか、それとも逃げるロボット達などに興味が無いのか、それとも戦いの愚かさを嫌というほど思い知ったのか、追手がかかることはなかった。

実際に、逃げるロボットの存在は、彼らにとってはどうでも良い存在であったのだ。

だが、皇女（インケン星には無い言葉だが）の行方が分からないことに彼らが気づいた頃にはもう後の祭りであった。

巨大宇宙船には、ロボットが三十体ほど乗り込んでいた。

それぞれに様々な考えがあり、途中の星で降りていく者もいたし、事故で壊れてしまった者もいる。自ら、固定された機械の体を持つことを嫌がり、単なる電流に戻ってしまった者もいる。だんだんと仲間は減っていく。

話は遡るが、インケン星での反乱兵突撃の際に、ロボットの一体が、ある軍事計画のデータと接触した。瞬時にして、そのあまりの恐ろしさに気づく。こんな兵器を、あのような連中が持つべきではない。宇宙の破滅を恐れたそのロボットは、そのデータを軍事目的に利用されぬよう消去してしまった。そのデータこそが後のガイア・エグゼリオンである。そのロボットは、消去する前に、自分の中にデータを全て取り込んでいたのだ。

ロボットの仲間達はゆく先々の惑星で、鉱物など資源を集め、巨大宇宙船の中で、後にガイア・エグゼリオンと呼ばれることになる人型兵器を開発していった。自分達は戦うことは出来ないが、いつかインケン星を救うために戦う者があらわれるまで。……いや、この不思議な赤ちゃんがいずれその存在になるかも知れない。

その宇宙船が次に向かう予定の星が……

太陽系第三番惑星　地球。

5

別に気力を取り戻したというわけではない。ただ、話の内容が内容である。優奈は起きあがり、ヨネの話しに聞き入っていた。

「……それで、その赤ちゃんというのが、あたしだったということだね」

優奈はヨネの表情の変化を確かめるように、ゆっくりと、呟くように言った。

「そう。地球時間でちょうど十五年ほど前の話さ」

ヨネは頷く。

「でも、インケン星人に、普通、女はいないんだよね」

「そういう区別がないんだよ。みんな、今まで見てきたあいつらみたいな、あんな顔や声をしているね」

「……それなら、どうしてあたしは女なの？ あたしは、どこでどう生まれたの？ それとも……造られたの？」

……ばあちゃん達みたいに。

さすがに、そこまでは言えなかった。

「インケン星人がどうやって子供を授かるか、知っているかい？」
知るわけがない。しかし、優奈はいろいろと想像してしまい、顔を真っ赤にしてしまう。

「夢の中から引っ張り出すのさ」

「まさか！」

「本当だよ。上空の二つの月が、その人に適した満ち欠けの状態になった時に、神官が夢の中に手を差し入れ、取り出すんだよ。満ち欠けの組み合わせと寿命を考えると、一生に一度か二度ほどしか出来ないけどね。月の周期がとんでもなく長く、インケン星人の寿命はせいぜい二百年から三百年だから。それでも地球人よりは遙かに長いけど」

「三百……」

「とにかく、そんなわけで、向こうには男も女もないのさ。そうすると、戦闘力にすぐれる、こちらで言う男のような体格にみんななつていくのさ。まあ、最近はやなよしたヘンなものも出てきたけどね」

「……そ、それだったら、あたしは一体何なのよ？ どうして、あたしは女なの！ わけ分かんないよ！ また、あたしのことを騙そうとしてるんじゃないの！」

「それは……ごめん、分からない。なんでだろうね。もしかしたら、皇帝本人ですら知らないことなのかも知れないね。我々だって本当に驚いたよ。はじめから……肉体形状が少し違うし。ただね、宇宙を旅する間、我々の歴史、我々のコンピュータにはなかった、雌雄という存在を知った。そして、インケン星人と同じような形状を

持ち、なおかつ雌雄の存在のあるこの地球という惑星を発見し、これこそ運命とばかりにそこに移り住むことにしたのさ」

「ば」このあと少しためらってから、「ばあちゃんは、ばあちゃん達は、あたしに何をさせようと言うの？ 何を考えているの」

「正直言うと、分からないね。わたし達は、インケン星人を救うために生み出されたプログラムだけど、この地球に来て、優奈とずっと過ごした十数年。……ずっとこのままでいい、ずっと優奈の成長を見ていたい。みんな、そんな思いになっていたんだよ。ただいつか優奈が真実に気づいていくかも知れないことを考えると、不安でしょうがなかったけどね」

ヨネが柔らかく、目を細める。

「みんなロボットだったというのなら、じいちゃんが死んだってのは……」

と優奈が訊いた時、

「優奈、じいちゃんだよ」

と、ヨネが喋った。その声は、男の、老人のものであった。

「おねしょばかりしてた優奈が、ほんと、大きくなったよなあ」

「じ……じいちゃん？」

優奈は目を丸くした。

次の言葉はもうヨネの声に戻っていた。

「記憶回路は最初は宇宙船の中だったけど、大破しちゃったから、今はエグゼリオンの中に組み込んである。小さな基盤状の部品をね、じいちゃんのと、わたしのものと並べて組み込んである。だから、わたしら夫婦はいつも一緒なんだよ。……本当はロボットがそんなことにこだわってもしょうがないんだけどね、でも優奈と一緒に過ごした期間が……優奈が……わたし達を変えたんだろうねえ。わたしも、もともと男も女もない星だったというのに、こちらで、こんな姿でいるうちに、あんたのおばあちゃんを演じているうちに、すっかり魂まで女になっちゃったみたいだよ」

優奈の祖父は病気で死んだと優奈は聞かされていた。優奈が五歳

の頃である。死体に覆い被さり、大泣きした記憶がある。しかしそれは、ヨネ達の芝居だったのである。自分達は人間を演じているのだし、優奈がそれを知らない今は、いつか死んでいく存在。いつまでも生きていくわけにはいかない。それに、優奈が健やかに成長していくためには、人の暖かさだけでなく、人の死も学ぶ必要がある。地球の文明や考え方を学習し、その美点をいつかインケンのためを生かそうと思っていた祖父は……祖父役であったロボットは、優奈の体を抱きしめられないことを……優奈の成長を自分の体で感じられないことを少し残念がりながらも、その機械の体と決別したのである。

だが残念ながら、彼らのその思いは、結局今の優奈には通じなかったのである。

「あたしは、ずっと……騙されていた。からかわれていたんだ。みんな、あたしを騙していた……あたしは何なの？ あなた達のおもちゃなの？ 勝手なことばかり言って!!」

「優奈……」

「もう、なんだか分かんないよ!」

その時、ガラスの割れる音とともに、部屋の中に何かが飛び込んできた。「石を投げるのはやめなさい」と拡声器の声、それを無数の市民の怒声がかき消した。

市民達が石を投じているのだ。

インケン星人の地球襲撃に対しての優奈の戦いは、当然、地球を護るためのもの、市民を護るための。侵略に対して防衛しているだけだ。本来は、軍隊がやるべきことをやってあげただけだ。それでも、優奈はなるべく被害が出ないように戦ったが、優奈の力及ばず、建物が破壊され、怪我人も出るなど、ある程度の被害が出ている。そんな被害にあった当事者が最前線で音頭を取り、緋鷹家に抗議をしていた。それが、まだ直接的な被害にあっていないものの不安を感じている他の人達をも巻き込んで、一種の狂乱の大きな渦を作っていた。そして、その中央に優奈達はいるのである。

おそらく小石が建物にあたってたてているのだろう音がいつまでもやまない。

また、ガラスの割れる音がした。

「……さよなら」

優奈は無表情にそう呟くと、立ち上がった。

「せめて、通信機は持っておいき。何かあってもわたし達と連絡が取れるし、エグゼリオンも呼べる」

優奈は手を伸ばし、腕時計型の通信機を受け取った。

歩き出す。

そして、通信機を足下に落とした。全体重をかけ、通信機を踏み砕いた。

優奈は外に出た。二人の警備の者が後に続く。

怒声。

土砂降りのように、人々の声が響く。

土砂降りのように、小石や、いろいろな物が飛んでくる。

顔に石があたった。

もう一発。

小さな石が雨霰となり、顔や体のあちこちに当たった。

「不思議だな、全然痛く感じないな……」

優奈は胸に手を当てた。こちらのほうが、よほど痛い。

みかねたシルピーは、魔法をかけてやり、優奈の体を魔法のフィールドで覆ってやる。

途端に、優奈の体を石がすべるように避けてしまい、まったく当たらなくなる。そんな現象に加えて、優奈のうつろな表情、彼らは不気味に思い、恐れ、石を投げ続けることが出来なかった。

優奈は群衆の中をゆっくりと歩いていった。

優奈がはじめてガイア・エグゼリオンの巨体をその目にしたのは、まだ彼女が小学二年生の頃だった。

今でこそ優奈の背は同じ年齢の平均身長を上回っているが、この頃はクラスで一番小さかった。

真っ赤な髪の毛は、いじめっこにいじめられる格好の材料になっていた。優奈はいじめられても特に抵抗をせずにじっと耐え、嵐が過ぎるのを待つだけであった。喧嘩するのは嫌だったし、そんな勇氣も無い。嫌なことは嫌と言え、理不尽なことに対してはきちんと自己を主張しろ、大人は子供に対して簡単にそう言うてくるが、それがどんなに辛くて難しいことが。

先生に髪の毛を黒く染めたほうがいいのではと勧められた。自分も、いじめられるのは嫌だから黒く染めたい、と父親に訴えたが、お前のその髪はもって生まれたものなんだから堂々としていればいいんだ、と突っぱねられた。それに、今さら黒に染めても、それはそれでいじめられる原因になってしまうかも知れない、と。母親もおおむね同じ考えだった。

その時の両親の考えに、優奈は後に感謝することになる。確かに、そんなことを理由にいじめてくるほうがおかしいし、地毛を染めさせようとする教師もおかしい。

その頃、クラスには仲の良い友達は一人もいなかった。優奈はあまり口を開かない、おとなしい子供だった。髪の毛だけを見れば非常に目立つのだが、実際はなかなか人の視界に入り込んでこない子供だった。もちろん、背の低いこともあったのだろうが、それ以上に体から発散する雰囲気というものがいじめに怯えてすっかりと萎縮してしまっていたのだ。

ただし、家の中では明るくて、とても活動的だった。でも、家で

じつとおとなしくしているのも嫌いではなく、読書や、星空を見上げてることが好きだった。

「空のずっとずっと向こうはどうなっているんだろう」

と夜空を見上げながら、無意識のうちによく呟いていた。当時は、輝く星々が太陽のようなものだとは知らず、地球と同じで人間が住んでいると思っていた。どんな生活をしているのかを想像するだけで楽しくて、あつと言う間に時間が過ぎていってしまう。

まだこの頃は遠山夫妻との同居はしていない。

祖父が亡くなって二年ほど経っており、現在この家で暮らしているのは祖母、父、母、そして自分の四人だけだった。

さて、優奈とエグゼリオンの出会いに話を戻そう。

ここは、自宅から徒歩で遠くないところにある、大きな川の広い土手。

十人ばかりの人間が集まっていた。緋鷹家の四人全員。それと近所の仲の良い人達……の中の暇な人達。

「じゃーん」

源三郎は両手を上げて叫んだ。

「ガイア・エグゼリオンのお披露目式によっこそイエイ」

「なんだい、源さん、ガイなんとかというのは」

「まあなんだ、機械だ。人がのって動かす、でっかくて強くて……ようするにガン ムだよ、ガ ダム」

「ロボットってことかい」

「人が中で操縦するから、正確には違うな。もちろんロボットに制御させているところもたくさんあるけど」

年寄りには、源三郎が何を言っているのかさっぱり分らない。「それで、それがどしたんだ。まさかそんなものを作ったってんじゃないだろうな。テレビ漫画じゃああるまいし」

「そのまさかだよ、留さん。汎用巨大人型メカをつくったのさ」

「信じられねえな。だいたい、なんだって、そんなものをつくった

んだい」

「人間がそのまま、おつきくなり力持ちになるようなもんだからな。直感的な操作がしやすいわけよ」

「よく分らん。そもそも、そんなもん、どこにもないじゃないか」
「次元転送で呼ぶんだよ。ちよつと違うけど空間転移みたいなもんだ」

「……空を飛んで来るんじゃないで、ここにいきなり現れるってことかい」

「そういうこと。問題ないとは思うけど、なんてったって初めてのことだからな。ちよいと安全性を確認しとこうと思つてよ。ここだったら、少しくらい方位や位相がズレても、特に被害もないし。ま、留さんが踏み潰されるくらいだな」

「縁起でもないこと言うなよ、おい。でもまあ、おれにや信じられないけどな」

母に手をつながれ、父と留さんのやりとりを聞いていた優奈。彼女にもやっぱり父の言っていることがさっぱり分からなかった。留さんと違って、固定観念から来る先入観というものはなにもないが、まだ幼いために脳内の日本語ボキャブラリーがとても貧弱だったから。でも、なんだか面白そうな予感に、わくわくと胸をおどらせていた。

源三郎は、二十メートルほど離れた地面を指さした。

「そこにでつかく、赤いボタンが書いてあるだろう。これからそこに呼ぶから、念のため、みんなはもつと離れてくれ」

源三郎は一人残ると、腕を持ち上げ、反対の手の指が腕時計を細かく叩いた。優奈は視力がいいのでよく見えたのだが、普通の腕時計とは少し違うようだ。なにやら小さな計器がたくさんついている。

「エグゼリオン！」

源三郎は叫んだ。

「ふん、源さん今度はどんな冗談で我々を担ごうってつもりだい」
留さんは相変わらず疑わしげな表情。腕組をして、さあお手並み

拝見とばかりに源三郎に冷やかな視線を送っている。

が、瞬きをして、目を開いた時、目の前にある巨人に口から心臓が飛び出し、腰を抜かし、地面に尻餅をついた。

ほんの一瞬前まで存在していなかった鋼の巨人、ガイア・エグゼリオンのすらりとした姿がそこにはあったのである。

「凄い…… おとうちゃんより、ずっとずっとでっかい」

優奈は思わず呟いていた。

呟き終えた後は、口を閉めることを忘れてしまい、ただぼかんと口を開けているばかりだった。

少し離れた場所に立っているというのに、見上げないと頭部が視界に入ってこないほどだ。

どのくらいの重さであるのか、皆目検討もつかない。きっと、とても重たいのだろう。ところが不思議なことに、その体重を小さな二つの足で支えているというのに、柔らかそうな土手の土に、一切めりこんでいる様子がない。まるで地面すれすれのところを、浮いているかのようだ。

巨人のすぐそばに、源三郎が立っている。体の小さな優奈にとって源三郎だって熊のように大きい、この巨人は、それよりも遙かに大きかった。

実験は成功だ。

エグゼリオンは予定と寸分違わないところに出現した。

「はい、拍手」

源三郎の音頭に、まばらな拍手がおこる。

優奈は少しずつ近寄って行った。

「おとうちゃん、それで何が出来るの？」

「そ、そうだ、瞬きしてる間にぱっと出て来たって、ハリボテじゃ意味がないぞ」

留さんは断固として戦い続ける。

「本当に往生際が悪いなあ、留さんは。それじゃ、ちょっくら実技つてもんを披露してやるよ」

源三郎は、また腕時計のようなものを操作した。

すると、巨人……ガイア・エグゼリオンの胴体から、細い金属製のロープのようなものが降りてきた。それに掴まって、ロープを引き戻し、あつと言う間にエグゼリオンの手のひらに登ってしまった。熊のような体格だが、猿のごとき身のこなしであった。

「片手倒立」

源三郎は、巨体のくせに器用に片手で逆立ちした。

「お前の芸なんかどうでもいい」

ヨネに投げつけられた、なんだか分かんないものが頭部に直撃し、源三郎は哀れにも地面に落下して、とんでもない音と同時に首の骨を強打して、そのままのびてしまった。

結局せつかくのガイア・エグゼリオンお披露目式だというのに、姿を見せただけで何をすることもなく終わってしまった一日であった。

一週間後、すっかり首の状態もよくなった源三郎は、あらためてエグゼリオンをみんなの前で動かしてみた。

先週のお披露目式の際に、エグゼリオンの姿を目撃した通行人がたくさんおり、噂が噂を呼んで、やれ宇宙人の襲来だ、やれ地底人だの、地元のテレビ局が来てしまうほどの騒ぎとなっていた。慌ててテレビ局に連絡して事情を話すも事なきを得られず、膨れあがった観衆の前でお披露目の続きをすることになったのであった。

まるで超人気ロックバンドの野外ライブのような盛り上がり。こういう群衆を見ると煽りたくなるのが源三郎の性分だが、今回はヨネにきつく戒められていたため、不本意ながらもおとなしいお披露目式スタートとなった。

しかし、今回の結果は大成功であった。

エグゼリオンはまたも狙い通りのポイントに現れた。そして、乗り込んだ源三郎は、まるで人間が動いているかのごとく、器用にエグゼリオンを動かしてみせたのである。

どよめく観衆に源三郎は、胸部扉から飛び出し、

「みなさん、今日はばくの初ライブに来てくれて、ありがとうございます！
おわあ！」

最後の叫びは、ヨネが通信機を操作するのと同様だったから、たぶん遠隔で、頭を締め付けるとか電撃浴びせるとかしたんだと思う。「……みなさん、今日はガイア・エグゼリオンを見に来てくれてありがとうございます」体をふらふらさせながら、言い直した。「地道に顧客探しの営業するつもりだったけど、こんな騒ぎになっちゃったんでせつかくなんで利用させてもらいます。……えー、ご覧頂いたように、このガイア・エグゼリオン、結構凄いです。予想以上に、良いと思います。たぶん皆様の生活に役立ちます。土木作業、人探し、お買い物、などなど犯罪以外何でもやります、お仕事のご用命はぜひ緋鷹商事まで。電話番号024X XXのXXXX、おっなんでーそりゃいいねクワバラ、と分かりやすく覚えてください、それでは失敬」

一瞬後「分かりにくいぞー」という声が出た時には、すでにそこにエグゼリオンの姿はなかった。

先日の宣伝効果は抜群で、かくして緋鷹商事には次々と仕事が舞い込んで来るようになった。

解体作業、人命救助、等々。

テレビや新聞、雑誌などにもよく取り上げられ、緋鷹一家はちょっとした有名人になってしまった。

保有することや操縦することに資格が必要そうにも思えるが、なにしろ前例がないし、国や自治体にどうこうと検討されるよりも前に、実際に人命を救ったり人様の役に立ってしまったものだから、特例中の特例ということで許可が降りた。

エグゼリオンがどのような仕組みで動いているのか探るために接触を図ってくる者もいたが、源三郎はこれに関してだけは、いくら金を詰まれようと教えなかった。

こうして、貧乏会社緋鷹商事を持ち直せそうな、新しい仕事に加わったわけである。

しかし、維持費にどの程度かかっているのだろう。それは源三郎とヨネしか知らない。

優奈は、エグゼリオンが自宅近くで仕事をする時には、暇さえあれば見物に行った。

「おとうちゃんかっこいい」

幼い子供には、狭い事務所でお客に謝っている姿よりも、体を動かしているほうが、働いているおとうちゃんという気がして、格好良く思えたのだ。

いつしか、まるつきり正反対の考えになってしまふのであるが。

2

年月は流れ、優奈は小学六年生になっていた。

幼い頃の優奈は、学校ではとてもおとなしく、明るい暗いかと問われれば、暗いほうだった。あまり口を開かない。笑わない。六年生となった今は、学校でも随分と明るくなり、仲の良い友達も何人かできた。服装もスカートではなく、活動的なズボン姿でいることが多くなった。クラスで一番小さかった身長も、今やすらりと健康的に伸びている。

仲の良い友達の一人が、このあと優奈の生涯の友人となる好子であった。

とはいっても、それほど打ち解けた関係とも言えなかった。いつか去ってしまうのでは、また一人ぼっちになってしまふのでは、と優奈は常に怯えていた。嫌われたくないから、友達に何をされても何も言い返すことが出来なかった。黙って、何でも我慢してしまっていた。友達関係を続けていくというのは、こういうことなのだと思うていた。

赤の他人が見ていれば、とても仲のよい友達関係に見えただろう。だが、どこもないギクシャク感というものを優奈だけでなく、好子

達もまた、気が付いていた。

ある日、好子に面と向かって親友道を説かれたこともある。根の真面目な優奈は、確かに好子の言葉にも一理ある、と、それからずっと本当の友達とは何かを考え続けたが、答えを見つけることは出来なかった。

それどころか考えれば考えるほど、表層的な友達付き合いしか求めていないと思われるようで、なんだかとても悲しい気持ちになってしまうのだった。自分は自分で精一杯がんばっているつもりなのに。

優奈と彼女らとの付き合いは、そのような調子で、何も変わることなく続いていく。

小学校の卒業式を間近に控えたある日のこと。

源三郎が大怪我をした。

人助けのために溪谷に入り込んだはいが、エグゼリオンの巨体では作業の難しいところであった。降りて動こうとしたところ、岩盤を滑り落ちてしまったのだ。

全身打撲と、右足骨折。

包帯だらけのなんとも痛々しい姿になってしまった。

強靱な父のことだ、何日もすれば事務所の仕事には復帰できるだろうが、当面はエグゼリオンに乗ることは出来まい。

「あたし、乗ってもいいよ。エグゼリオンに」

優奈はエグゼリオンに乗ることを決断した。

エグゼリオンによる活動は、いつしか弱小会社を支える大事な仕事にもなっていた。なによりも肉体能力が大切となるため（鍛えれば精神だけで動かせるが）、自分か源三郎が乗るしかないのだ。

優奈は初めてエグゼリオンを見た時にはその大きさに感動したし、乗っている父の姿をカッコいいと思った。だが学校で、「おとなしくして、嫌われずにいることで友達を作る」ことを覚えた優奈は、何より平凡を好むようになってしまい、エグゼリオンに乗って喝采

を浴びている父の姿をあまり格好よいと思えなくなっていた。

ゆくゆくはお前が乗るんだ、とよく源三郎に言われていたが、優奈はかたくなに拒み続けてきた。なんだかとても、みつともないことのように思えからだ。

しかし、人類最強の無敵生物だと思っていた父が大怪我。

自分がやるしかなかった。

エグゼリオンでの仕事の家計を支えていることは事実だし、みつともない仕事と思うのならば、それを父だけに押し付けてしまうのはどうか、という思いもあったからだ。今まで書類運びと簡単な計算くらいしか手伝いをしたことはなかったが、仕事の大切さはよく分かっていた。

大怪我から数日がたち、源三郎は松葉杖をつきながらなら自由に歩けるようになった。

トイレの電球スイッチをぱちぱちと何やら押してからドアを開くと、なんとトイレがあるはずの空間は、果てなく続くかのような下り階段になっていた。

「どうなってるの、地下があるなんて……」

目が点の優奈。

「地下じゃねーよ。別の空間に次元転送したんだよ」

と唐突に言われても、そんなSFのようなこと、信じられるはずがない。しかしよくよく考えてみれば、すっかり慣れっこになってしまったエグゼリオンの存在だって充分SF的な存在だ。それに、エグゼリオンだって次元間転送を行っている。今さら驚くことではないのかも知れないが……

「でもよりによって、トイレにこんな仕掛け作るなんて……」

優奈はあらためて父の趣味の悪さを実感した。

壁が光り輝いている、綺麗なのか不気味なのかよく分からない階段。何分も降りていくと唐突にドアが現れた。開くとそこには部屋があった。なんだか、遙か未来の宇宙船内のような、不思議な部屋

だった。とても地球のものとは思えなかった。

こんな部屋、誰がどうやって作ったのだろう。……幼い頃からエグゼリオンを見てきたので、すっかり深く疑問に思うきっかけを失ってしまっていたが、あらためてエグゼリオンのことも疑問に感じた。

この中の一室に、源三郎がトレーニング部屋と呼ぶ部屋がある。

部屋の外壁には、なにやら見たこともない計器や機械がびっしりひしめいている。部屋の真ん中には軽い運動の出来そうなスペースと、かたわらには椅子。椅子の上には、全身に取り付ける、大リーグ養ギ スミたいなものが置いてあり、そこから伸びたコードが床に繋がっている。

これらが、エグゼリオンを操縦する基本能力を養うための装置なのだ。

エグゼリオンの操縦は理論的には思念のみで行うことが可能。うまく機能させられれば、手足で操縦するよりよほど効率がよい。しかし、そもそも念による操作など、現実的にはほとんど不可能なのである。前もって見た精密な図画を、頭の中に再現し、わずかたりとも歪めずに何時間も思えるか。また、まったく崩さず自由に視点を動かし、様々な角度から見る事が出来るか。普通に考えて無理である。エグゼリオンを思念のみで安全に動かすには、そのくらいの能力が求められる。右脳の処理速度を左脳の細密さで行うことが出来なければならぬ。このトレーニング部屋は、真面目に頑張りさえすれば、人間のそういった能力を目覚めさせることが出来るのだ。

トレーニングはそういう機器を使ったものと、アナログな手段との併用で行われた。

瞑想。

はじめはちょっと体が固くて座禅が辛かった。夜のお風呂上りに柔軟体操をはじめたこともあり、だんだんと慣れてきた。

コンピュータを使つての、イメージトレーニング。
なかなか一つの絵を思い続けることは難しいが、それでも少しづつ、長く思えるようになっていくのが感じられて嬉しい。

暗算。

これはソロバンで事務の手伝いをしている優奈にはお手のものだった。コンピュータとの対戦で「電太くん」に勝つことも。電太くんは名前は可愛いが、姿は不良番長そのものだ。髪型はリーゼント。

バーチャル座禅（瞑想・レベル2）

座禅。目を閉じると頭の中はお寺。二頭身のお坊さんが、木刀を持って背後をウロウロ。最初は可愛いお坊さんだなと微笑ましく思っていた優奈だったが、少しでも動くと、

バシッ！

「いたっ！」

お坊さん悲鳴に反応してさらに、
バシッ！

なんとか悲鳴を噛み殺しても、ちよつと呼吸が乱れて肩で息しちやったりなんかしていると、

バシッ！　バシッ！

「もうやだー！ー！！　やめるー！ー！」

バシバシッ！

バシッ！

バシバシバシッ！

小僧達もわらわら集まってきた、

バシバシバシバシバシバシッ！ー！！

バシバシバシバシッ！ー！！

「優奈、どうしたの、それ？」

翌日の登校時。好子の疑問はごく当然のものだった。顔や手など、肌の露出している部分はすべて痣だらけ。

「ちよつと……エグゼリオンに乗る特訓してて……」

バーチャルのはずなのに、何で痣までできるんだろう。もしかしたら、後ろでお父ちゃんが本当に殴ってたんじゃないかしら。と、いぶかる優奈。

「エグゼリオンで、あのでっかいロボットの？」

「うん」

父みたく、正確にはロボットではないなどどこだわるつもりはない。

「凄いいね。どんな修行したの？」

「とても、いえない……」

「そうか、秘密特訓なんだね」

「そ、そう、秘密特訓」

単に、坊さんと小僧に木刀で殴られまくったなどと、いえないだけであつた。

「それじゃ、部活も運動部だ」

「部活？」

「あとちよつとで卒業じゃない」

「ああ……そうか……」

もうすぐ卒業。いよいよ、中学生になるのだ。

新しく、仲良くしてくれる友達が出来るかな。

今の友達の内の誰かが一緒だといいな。

そして、エグゼリオンに乗るための特訓は続いていく。

卒業式の日。

体育館に全校生徒、父兄達が集まって、年に一度の独特な荘厳たる雰囲気を作っていた。

卒業証書授与。

次々と生徒が呼ばれていく。

優奈はしきりに後ろの父兄席を気にしている。
はたからみれば単なる落ち着きのない子供だ。
家族の姿を探していた。

今日のことは知っているはずだけど、でもそれどころじゃないんだろうなあ……

仕事の忙しさ。

源三郎の怪我。

溜息をついた。

諦めた。

前を向いて、静かに深呼吸。

少し気が楽になった。

いつの間にか優奈のクラスの番になっていた。

やがて、優奈が呼ばれた。

優奈は壇上に登り、校長先生から卒業証書を受け取った。

振り返ると、すぐ目に入ってきたのが、父、母、祖母の姿であった。

「優奈、卒業おめでとー」

源三郎は静まり返った体育館の中で、周囲の視線をまったく気にせず、松葉杖を振り回し、野太い大声で叫んだ。

ありがとう

さすがに大声は出せないが、優奈の口の形がそのように動いていた。

優奈の目から、涙がこぼれ落ちていた。

3

優奈は中学生になった。

結局、自分のクラスに小学生の時の友達は何人もいなかった。

今までは運の良いことに、常に前学年の時の友達が誰か一人はいた。いつもその友達におとなしくくっついていて、その友達

が友達を作り、なんとなく優奈とも仲良くなっていく。そんな風
にしか友達を作ったことしかないの、クラスに誰も知った顔がい
ないというのは、彼女の心をたまらなく不安にさせた。

小学校低学年の頃みたいに、またクラスで孤立していつてしま
うのだろうか。

いや、そうはならないように、頑張ろう。

新しく、友達を作っていこう。

まずは嫌われないことだ。

嫌われないためには、おとなしくしていることだ。

目立たないことだ。

優奈は自分にそう言い聞かせていた。

結局、いつまでたってもクラスに仲の良い友達は出来ず、なん
だか浮いた存在になってしまっていた。

周囲、特に男子を見ると、馬鹿みたいなこと言ったり、喧嘩し
たり、暴れたりしている子のほうが、友達が多いみたいだ。

よくよく冷静に考えてみれば、当然のことかも知れない。

だけでも、人にはそれぞれ天性の性格というものがあり自分には
とても真似出来ない。たぶん、一生無理だろう。

すっかり怪我の回復した源三郎だが、もうエグゼリオンに乗る気
はない。全てを優奈に託すつもりでいた。

優奈のエグゼリオンを操縦するための特訓は続いている。

基礎の基礎はとうに卒業し、シミュレーターを使い、実際に操縦
するのと同じ感覚での訓練をするレベルにまでなっている。

だいぶ上達してきてはいるが、ある一点をどうしても越えること
が出来ないでいた。単純な技術や、操作方法については申し分ない
だが、思念操縦をするにせよマニュアル操縦をするにせよ、どちら
であっても思念の力がかく大切である。今のおっとりした性格
ではどうも反応が鈍くなったり、念の波形が歪んで機械が誤動作を
起こす可能性がある。

「緋鷹商事ってどこか知ってますか？ この近所らしいんだけど」
中学に入ってから、土日に空手を習わされている。

ある日、帰り道で男に声をかけられた。

眼鏡の、なんだか頼りなさそうな、でも人の良さそうな長身の青年。

「それ、うちです。……取引先の方ですか？」

「あ……あの……由利香さんっているでしょ、そ、それ、彼女に、両親……」

急に喋り方がぎこちなくなった。

怪しい……

もしかしたら、自分のことも緋鷹家の人間だと知って声をかけてきたのでは。

確かに由利香はいる。

祖母の妹の孫娘で、ちょっとしたきっかけから、数年前から一緒に暮らしている。

案内すべきか、せざるべきか。

自分が案内しなくとも、調べれば場所なんて分かる。それなら自分と一緒に行ったほうがよさそうだ。事務所で話してほんとに怪しそうなら父が叩き返すだろう。

優奈は青年を、緋鷹商事まで案内した。

「どうしたの、こんなとこまで」

由利香は、驚きの表情で彼を出迎えた。

そういえば、由利香には結婚前提の恋人がいるときいたことがある。そうか、彼がそうだったのか。

「てやんでい、とつとと失せろ」

啖呵を切る源三郎。

「お前、それ言ってみたかったただけだろう」

ヨネにあっさりみすかされる。

青年を居間に上げた。八畳間で大きなテーブルを囲んで、青年、

由利香、源三郎、ヨネ。優奈は部屋の入り口のところで柱にもたれて座り、心配そうに、そしてちょっと興味深そうに様子を見ている。「ぼく達、これまで結婚を考えてお付き合いをしてきたのですが、今日こちらにうかがったのは……」

「とつととけえれ！ 由利香は絶対渡さねえ。二度とうちの敷地を跨ぐことは許さねえ！」

突然立ち上がり、叫びだす源三郎。

「決定権はお前にないよ。さっきからうるさい」

ヨネに空の湯飲みを頭にぶつけられ、男は地響きをたてマットに深く沈んだ。

なんだかんだとありながらも、あつと言う間に源三郎とも打ち解け、青年はそれから暇さえあれば緋鷹商事に来るようになった。

喋り方こそぎこちないが、稀に見る好青年で、優奈もすぐに好印象を持つようになった。でも、結婚しちやったら由利香さんがいなくなっちゃうなあ、と心配していたが、大丈夫、彼は半年後にこの住み込み従業員になってしまう運命だから。

優奈は彼に学校での悩みをよく相談するようになっていた。解決しないまでも、聞いてもらえるだけで、なんだか心が救われる思いをした。

さらに月日が流れ、もう夏休みも終わり、二学期になった。しかしまだ優奈には、同じ教室に友達はできなかった。

今年の残暑はあまり厳しくなく、はやくも蜻蛉の姿があちらこちらに見られるようになった。

暖かな秋晴れ。

のどかな陽気の日。

えてして、事が起こるのはそういう日なのかも知れない。

母が倒れた。

もともと体が丈夫なほうではない。

家庭を支えるための、仕事上の無理がたたってしまったようだった。

た。

家だけが、家族だけが、現在の自分の居場所なのに……
優奈の心は暗く、沈んでしまった。

どこに行けばいいのか。

いつまで待てばいいのか。

どうすれば、自分の空は青く晴れ渡るのか。

4

「てめえ、生意気なんだよ」

「どう落とし前つけるつもりだよ」

大勢の、女子の声が聞こえてきた。

当番でゴミを焼却炉に運んでいた優奈は、校舎の裏でクラスメイ
トの一人が上級生に取り囲まれているのを目撃した。橋本麻美だ。
彼女は不良生徒ではないが、とても自尊心が強く、少々好戦的なと
ころがある。まさに優奈と正反対のタイプだ。どうやらその性格ゆ
えに、上級生とトラブルを起こしてしまったようだった。

謝れ謝らないで、激しくもめて、言い争いをしている。

この上級生達は、何度か見たことがある。好子に、フダツキだか
ら気をつけたほうがいいよ、と注意されたこともある。

大変だ。先生を呼ばなきゃ……

と思った途端、麻美の悲鳴が優奈の動揺する心を吹き飛ばした。
不良生徒のうち一人が麻美の髪の毛を思い切り引っ張ったのだ。

優奈はゴミ箱を放り捨て、走り、飛び出していた。

後から振り返ってみれば、この時が優奈が人生で最初の一步を踏
み出した瞬間かも知れない。

「なんだよ、お前は」

「は、橋本さんと、おなじおなじクラ、クラスです」

優奈はつかえつつかえで、声を出すだけで精一杯。

「それが、何の用だよ」

「いじ、いじめよく、よくな……とおもいます」

「こいつ、おどおどして、ろくに口もきけねーよ。だったら無理してしゃしゃり出てくんじゃねえよ。おしっこもらしてんじゃねーのか」

一人が優奈の制服のスカートに手をかけた。

「よ、よわもの、いじめ、ひきょうだとおもいます！」

優奈は叫んだ。

力いっぱい叫んだ。

しかし頑張る優奈の気持ちなど、彼女らに理解出来るはずもない。単に彼女らを激昂させたただけだった。

もう麻美のことは眼中にこれっぽっちもない。

標的は完全に優奈に変わっていた。

彼女らは優奈に掴みかかろうとする。

先ほどの大声で肝がすわったのか、優奈はふたたび叫んだ。

先生を呼んだ。

不良少女達は慌てて逃げていった。

結局先生は来なかった。

優奈の脚はがたがたと震えていた。

ぎこちない表情で、麻美に笑いかけた。

だが、

「よけいなことしないでよ。何様のつもり？」

麻美は優奈を憎らしげな視線で睨み付けた。

「そんな……あたしはただ」

「弱い者で悪かったね。さぞかしいい気分でしょうね」

「だから、そんなつもりじゃ……」

「このこと言いふらしたら承知しないよ」

麻美は優奈の胸を思い切り突き飛ばした。優奈は後ろによろけ、尻餅をついた。

麻美は制服の埃を払うと、去っていった。

自分は麻美のプライドを傷付けてしまったのだ。そんなつもりは、まったくなかったのに。彼女を傷つけてしまったのだ。

立ち上がった後も、いつまでも呆然としている優奈。
少女らの怒声が現実に戻した。

「まだいやがった」

「先公来てねーじゃんかよ」

「おい、お前、覚悟できてんだろうな」

再び、優奈は囲まれてしまった。

優奈はうつむいている。

手が震えている。

だが先ほどの恐怖による震えとは、明らかに異なるものだった。

「なんで……そういうこと、するんですか」

優奈は小さく口を開き、囁くような小さな呟き声を出した。

「何がだよ」

「こいつ、なに言ってるんだよ」

少女らは笑っている。

優奈は顔を上げた。

「仲良くしたくても出来ない人もいるのに、なんでわざわざ喧嘩したり、いじめたり……」

「わけ分かんねーこと言ってるじゃねーぞ、ぼけ」

優奈は胸ぐらをつかまれ、引き寄せられた。

「あれ、こいつ……そうだ、近所の道場で見たことある」

少女は手をはなした。

「殴ってこいよ。空手やってんだろ。強いんだろ。殴ってこいよ」

「こんなことのために……習ってるわけじゃ……」

「じゃ、なんのためなんだよ」

エグゼリオンの特訓のため。それと、

「あなた達のように、ならないため」

「ふざけんじゃねえ！」

優奈の体が一瞬、宙に浮いた。

不良少女の右拳がフック気味に優奈の頬をとらえたのだ。

地にくずおれる優奈。呻く余裕すら与えられず、今度は腹につま先がめりこんできた。口を強く結ぶが、喉、口の中に酸味が一杯に広がり、咽せた拍子に胃液を吐き出した。

「汚ねえな、てめえは。靴が汚れたじゃねえかよ馬鹿」

再び腹を蹴られた。

何度も、何度も蹴られた。

優奈は朦朧とした意識の中で思っていた。

これでいいんだ。

橋本さんを助けることが出来たんだから。

翌日、優奈は頭と腕に包帯をぐるぐる巻いた見るも痛々しそうな姿で登校した。大丈夫だと言ったのに、由利香に半ば強引に手当てをされてしまったのである。

昨日、あのあと優奈は先生を呼ぶこともせず、ただ殴られ、蹴られるに任せているだけだった。怒らせて余計につきまとわれるよりも、好きに殴らせておいたほうがましだ。ちょっと痛いのを我慢すればいいだけなんだから。そう判断したからであつたが、それならば謝ればいいのだが、まったく非のないことで謝るのも嫌だった。殴られ、蹴られ続け、いつしか気を失っていた。気づくとすでに周囲に誰もおらず、日も暮れかけていた。家に帰った後も、優奈は今日のことを決して話さなかった。麻美に言われたことを意地でも守るつもりでいた。

こんな格好で教室に入ったら、クラスのみんながびっくりしてしまうのではないか。そう思っていたが、実際教室のドアを開けてみると、まったくそんなことはなかった。むしろ、逆であつた。みな、優奈を一瞥しただけだった。

なんなのだ、この雰囲気は。優奈はなんともいえない嫌な空気を肌に感じていた。自分に興味がないのではない。この空気は……そう、明らかな敵意だつた。

仲のよい友達はいなくとも、話せばみんな普通に受け答えしてく

れていた。それが今は、優奈が話しかけても、「別に」とか「さあ」などと言返すのみ。それならまだいいが、無言であったり、「話しかけんじゃねーよブス」と怒ってくる男子もいた。

「わたし……何かした？　何か怒らせるようなことしちゃったのなら謝るよ」

「とぼけてんじゃないわよ、麻美に悪いと思わないのかしらね」
「ねー」

二人の女生徒が小声で話している。

はっとして、橋本麻美のほうを見た。

麻美は頬杖をつき、優奈を見ていた。その顔には何とも言えない笑みが浮かんでいた。

優奈はなんとも言いようのないもやもやを胸にかかえ、その日一日を過ごすこととなった。

胃潰瘍にでもなってしまいそうなほどに、長い長い地獄の責め苦のような一日がやっと終わった。

放課後、優奈は自分と同じ気の弱そうな女子を捕まえ、問いただした。

やはり、原因は橋本麻美だった。

麻美から金を奪おうとして拒絶された優奈は、上級生をけしかけて麻美を襲わせた。

クラスの中ではそういうことになっているらしい。

なんで橋本さんはそんなことを……

聞いた瞬間、優奈の頭の中は真っ白になった。

そうか……

不良生徒にからまれ、その屈辱的なところを優奈に見られた。なにを言いふらすか分からないから、先手を打ったのだ。そして、プライドを傷つけられた復讐をしたのだ。

みんなこの怪我を見て分からないのだろうか。

……きっと麻美は、あの時近くにいて、ずっと様子を見ていたのだ。優奈の怪我のことを知っていた。だからクラスみんなには「

あのあと、緋鷹さんは上級生と仲間割れをしてた、いい気味だ。でも自分は絶対に彼女を許さない」とでも言ったのだろう。

昨日、自分が上級生に気絶するまで傷めつけられたのは、何のためだったのか。

先生に喋ることなく、心配する家族にも黙秘を貫いたのは、何のためだったのか。

優奈は自分が惨めで、悔しくて、たまらない気持ちだった。

それでも家の中では明るく振る舞った。

病気で寝たきりになってしまった母のために。

だが、今回の事件をきっかけに、優奈は学校では完全にいじめられっ子になってしまった。

話しかけても無視される。

バケツの水を浴びせられる。

給食のスープにゴキブリを入れられた。

押さえつけられ、無理やり口に放り込まれかけた。

体育の授業から戻ると制服が切り刻まれていた。

鉛筆の芯が全部折られていた。

脚をかけられ転ばされた。

背中に生卵をぶつけられた。

教科書に落書きをされた。頁を破かれた。杉田玄白の絵に髪の毛とカイゼル髭を書かれた。

体育着に針が千本刺さっていた。「飲め」とメモがあつた。机を廊下に出された。

休み時間、おさえつけられ、トイレに行けないようにされた。四時限目にととう漏らした。

財布を盗んだ犯人にされた。弁明しても、先生は信じてくれなかった。

「学校、楽しい？」

母の問いに、優奈は微笑み、黙って頷いた。

「そう。でも……なんだか辛いこと、かかえてない？ この前の怪我のことといい」

「なんにもないって。……毎日、とっても楽しいよ」

「一人でかかえることは、人に迷惑をかけまいとする尊い気持ちとも言えるけど、助けを求めたほうがもっと尊いことだってあるのよ。誰かを信頼しているってことなんだから」

「自分だって……おかあちゃんだって、一人でかかえてて、頑張るすぎて、そんなになっちゃったくせに」

母は、一本とられたというふうに笑ってみせる。

「絶対、よくなるよね。体、すぐによくなるよね。……いなくなっちゃったりしないよね。嫌だからね、そんなの」

「優奈がね、学校をもっと楽しもう、楽しいところに変えていこう、って頑張れば、それがお母さんの支えになって、もっともって頑張れると思うの」

「だから、楽しいって……学校、とっても……たの……」

優奈は泣き出した。

母に抱きついた。

久しぶりに声を出して泣いた。

5

もう一晩が過ぎたというのに、優奈の目は真っ赤だ。瞼も、こすりすぎて赤く腫れている。

自責の念で一杯だった。

母が大変な状態なのに……いつも笑顔でいようと決めたのに……自分の状況など、命の危険にさらされている母の状態にくらいべれば何ということはない。それなのに……

自分のことばかり考えていた自分に苛立ちを感じた。

学校では今日も当然のようにいじめられた。もう慣れてきたはずなのに、そして、昨夜の母への思いが胸の中にあっただはずなのに……

…やはり、辛かった。

「優奈、正直に答えてよ。……いじめられてるって本当？」

帰り道。

好子に問われた。

優奈は黙っていた。

いじめられてるともいいたくなかったし、嘘もつきたくなかった。

「ごめん」

何故謝られているのか、好子には分からなかった。

まだシミュレーターでの評価しか出来ないが、エグゼリオンを操縦するための基本的な念の出し方はマスターしていた。エグゼリオンは操縦者の肉体と動き連動させることが出来るので、本当は、ただ操縦するだけならば、そこまで念を鍛える必要はない。ただやはり、基本は思念操縦だ。それをマスターして使わないのと、マスターせずに使わないのでは、出せる能力に開きが出るし、なにより念が中途半端なのは事故のもとだ。

肉体能力という筋力に相当するような、単純な念の力はもう十分だ。だが、それを正しく御することが出来ないでいる。なまじ力がついてきている分だけ、危険な状態だ。調子のいい時もあるのだが、ちよつと波が激しすぎる。しかも、ここ数日はずっと酷い状態のままだ。

「何やってんの、あんた達。自分のやっていることが、恥ずかしいと思わないの？」

好子の叫びに騒がしかった教室は一気に静かになった。

優奈のクラスの教室。

給食の時間。

今日は担任が不在なのをいいことに、また優奈の給食にゴキブリを入れた男子生徒がいた。前回の件があつてから、優奈は給食に一切手をつけることが出来なくなっていたが、男子生徒は二人がかり

で、一人が優奈を羽交い締めにし、一人が無理矢理に優奈の口をこじ開けて食べさせようとしていた。みんな楽しげに笑って見ている。そんな中、激怒した好子が乗り込んできて、教卓をばげしく叩いたのである。

「中学生にもなつて、やっていいことと悪いことの区別もつかないの？　生き物として最悪だね。優奈が何かいじめられるようなことした？」

「橋本のお金を奪おうとしたんじゃないか」

「橋本麻美が勝手に言ってるだけでしょ。じゃ、なに、橋本麻美が、遠藤にお金とられたと言えば、明日から遠藤がいじめられっこ？　そんなことされたら、弁明するでしょ。優奈は気が弱いから何も言えないだけなんだよ。もしかしたら盗んだかも知れないね、あたしは信じないけど。でも、誰か優奈に、本当にそんなことしたのかって確認した？　してないでしょ。分かっているんだよ、あんた達も、優奈がそんなことするはずないって。結局抵抗しない者をゲームみたいにいたぶってるだけじゃん」

教室は完全に静まり返った。

「なにより一番悪いのは……優奈、あなただよ」

優奈は黙っている。少しだけ目が見開かれた。

「嵐が過ぎるのを待っているだけ？　自分だけじつと我慢していればいい、ってそれが勇気だとも思っているの？　こいつらの、こんな性根を見ちゃったんだから、叩きなおしてやらなきゃ、また他の誰かをいじめただけだよ。結局優奈は自分のことしか考えていない。優しいんじゃない。気が弱いだけ。逃げているだけ」

優奈は何も言い返すことが出来なかった。

たしかに好子の言う通りかも知れない。自分は自分のことしか考えていないのかも知れない。

だが結局、そのあと優奈には何をすることも出来なかった。

確かに好子の言う通りになった。だんだんと、嵐は過ぎ去っていったのである。

そしてそれが優奈の心を追いつめていく。もし、他の誰かがいじめにあうようなことがあれば、それは自分の責任だ。

6

優奈がエグゼリオンの操縦をマスターするまで、仕事は受けないはずだった。

解体作業など雑用依頼の電話が何回かかかってきたが、全て断っていた。

ところが、今回の依頼は、飛び込みで、近くの派出所勤務のお巡りさんから。人命のかかっているものだった。

こういう時に限って、源三郎は出かけている。

優奈が行くしかなかった。

中学校の制服姿のまま、腕時計型通信機を腕にはめ、外に出た。

「エグゼリオン」

その叫びが念となり、通信機により変換、出力される。地が裂けた。

その裂け目から、優奈の念を受けて呼ばれたガイア・エグゼリオンがゆっくりと浮かびあがってきた。

呼べた。

本当にエグゼリオンが現れた。

現れてしまった……

優奈の心臓の鼓動が速度を増してくる。

緊張してくる。

押し潰されそうだ。

逃げ出したい。

胸部扉が開く。地面と同じ高さになったタイミングで、優奈は扉に飛び乗った。脚を踏み外したら奈落に落ちてしまいそうで怖かったが、なんとか乗り込むことが出来た。

「ええと……」

扉を閉めたいのだが、どうすればいいか忘れてしまった。スイッ

チがあつた気がするが思い出せない。思念を送ってみたが反応しない。結局、手で扉をしめようとした。むろん動くはずないのだが、機械が操縦者の意図を察したのか、勝手に扉が閉まつた。

何も見えない。

扉が閉まつたは良いが、完全な真つ暗闇になつてしまった。

理論上は宇宙空間にも出られるような完全密閉設計であるため、光どころか音も全く入ってこない。自分の呼吸音が静寂に反響するだけ。

優奈パニックを起こした。

「もうやだ、やっぱりのるんじゃなかった！」
叫んだ。

「だらしねーこと、言つてんじゃねえよ、まったく」
灯りがついた。

小さなモニターに、源三郎が映っていた。

「おとうちゃん、帰つて来てたんだ。それじゃ代わつてよ」

「馬鹿。決心して自分から乗ったくせに、間抜けなこと言つてんじゃねえ。お前がやるんだよ」

「……無理だよ、やっぱり」

「教えてやるからよ。……自分がこのまま、変われなくていいのか？」

「どうして……」

「……自分の悩みを知っていたのか。」

「最近の落ち込み見てりや分かる。……てのは嘘、好子ちゃんが来て教えてくれたんだよ。優奈は学校で辛い目にあっている、ただ自分それをきっかけに成長したがっている。学校でのことには触れず、それとなく力になつてやつてくれないか、って」

「好子ちゃんか？」

「こうして喋つちまつたら、それとなくにはならねーな。そもそも、おれにやそんな器用な真似は出来ねーよ」

小さなモニター映像があるだけの、ほとんど真つ暗闇の中、優奈

は深く息を吸った。

そして、ゆっくりと吐き出した。

今、優奈は外にいた。

そして、優奈の体は宙に浮いている。

緋鷹商事、周りの建物を見回している。

優奈の思念に反応し、全方位球体モニターのスイッチが入ったのだ。そこには外の映像だけでなく、様々な情報を文字や図形で表示していた。何が何だか、学んだはずだが、ほとんど忘れてしまった。一つ覚えていた表示情報に、エグゼリオンとの同調率がある。同調率が高いと、エグゼリオンをより細かく操作し、より力強く動かすことが出来る。それだけではない、サイコフィードバックシステムにより、エグゼリオンの感覚を自分のものとするのが可能だ。操縦するのではなく、自分自身が十メートルを超える鋼の巨人、ガイア・エグゼリオンとなるのだ。

現在、同調率は四十五%ほど。思念操縦は絶対的に無理だ。ただ、もともと、主な機体の動きは自分の動きをトレースさせる仕組みを使うつもりだったし、なんとかなるだろう。

再び、小さな画面が映り、父、そして後ろには祖母の顔。

「大丈夫そうじゃなか」

「気をつけるんだよ」

後ろのほうで、激しくせき込んでいる母の姿が見えた。……なんだが、酷くなっている。

「お父ちゃん、あたしにこうしてついててくれなくていいから、お母ちゃんを看病しててあげてよ。……あたし、もう大丈夫だから」
「分かった」

父達の顔は消えた。

優奈はまた深く呼吸をした。

そして、少し吐き、息をとめた。

「ガイア・エグゼリオン……飛翔」

立ったまま、指先だけを何かの呪いのように動かした。

次の瞬間、優奈は空高くにいた。

エグゼリオンが大空へと舞い上がったのだ。

飛べた！

優奈の顔に、驚き、安堵、そして嬉しさによる笑みが順々に浮かんでいく。

「よし。……行くぞ！」

空をかける。

舞い上がれ……自分。

人助けそのものは、エグゼリオンでなくとも大人が五、六人で手作業すれば出来るようなものだった。だが、それでは間に合わないから、と救助の依頼がきたわけであり、巡査や救助された人に感謝されたことに変わりはない。ただ、本当のところを言うと、エグゼリオンの出勤が少しもたしてたので、あと五分もあれば、人手が駆けつけていたのだが。

人の命が助かったことはもちろん嬉しいが、自分に自信が持てたことが何より嬉しかった。

学校でも頑張れる。

きつと、クラスみんなともうまくやっていける。

何を思われようと、その人のためにちゃんと出来るようになる。その上で付き合っていけるのが、本当の友達なんだから。

やっと、好子の言っていたことを理解することが出来た。すべて彼女の言った通りだった。そして、彼女は自分を叱咤激励してくれる本当の友達なのだ。

そうだ、今日のことを、さっそくお母ちゃんに報告しよう。自分に自信が持てたことを話そう。今まで見守ってくれたことにお礼を言おう。いろいろと励まし、助言をくれたことにお礼を言おう。とにかく、いっぱいいっぱい、感謝の言葉を言おう。

優奈は、母にお礼を言うことは出来なかった。

初めてエグゼリオンに乗り、仕事をして帰ってきたというのに、誰も迎えにきてくれなかった。

優奈は真っ先に母の寝ている部屋に行った。

そこには源三郎も、ヨネも、由利香もいた。

そして、主治医の長谷倉先生がいた。

どくん

優奈の心臓は大きく脈打った。

長谷倉先生はガラクタから間に合わせで作った人形のように、顔はつぎはぎだらけで、体格は小柄で、その動作、表情はともぎこちない。優奈は常々「絶対ロボットだよ、しかも出来損ないの」などと、失礼なことを言っていたものである。母を治してみせることも出来ない、そんな、なんだか信用の出来ない先生の一言に、さしたる重みなどないはずだったのに……

「ご臨終です」

その時、自分はどんな表情を浮かべていたのだろう。

どのくらいの時が流れたのだろうか。

やっと優奈は表情を変化させた。

微笑んでいた。

いや、微笑もうとしていた。それは長谷倉先生よりも、遥かに出来損ないのロボットのようにぎこちなかった。

「絶対にいなくならないって言っていたのにね。……珍しいな、おかあちゃんが嘘つくなんてさ。……あたし、エグゼリオン、乗れたんだよ。いっぱい、いっぱい、話したいことあったんだよ。有り難うって言いたかったんだよ。ごめんねっていいなかったんだよ。おかしいね、それなのにもうおかあちゃんがいらないなんて、おかしいよね……」

優奈はぎこちない笑みを浮かべながら、ゆっくりと寢床の母へ近づいていく。

母の隣に座った。

顔をのぞきこんだ。

綺麗な顔をしている。

瞼を閉じている。

眠っているかのように静かだ。

「おかあちゃん……」

もう返事をすることはない。

優奈の目から涙がこぼれた。

天井を見上げるが、溢れるはどんどん優奈の頬を伝い、こぼれおちていく。

「おかあちゃん……。嫌だよ、死んじゃ嫌だよ。おいてくなんてズルいよ、あたしまだ中学生なのに……」

嗚咽から、いつしか慟哭へと変わっていた。

誰も、そんな優奈を黙って見ているしかなかった。

通夜、葬式は滞りなく終わった。

あれからもう一週間。悲しみが去ったわけではない。もう取り乱すようなことはなかったが、現実を現実として受け入れるには、まだ時間がかかりそうだった。

たったひとこと、お礼をいいたかった。

最後に母の見た自分の顔が、笑顔でなかったことが悔やまれてならない。

これから元気に頑張っていくことが一番の供養であることは分かっている。でも、当面はそんな元気はでないだろう。自分はそこまでする強くない。

明日、優奈は十三歳の誕生日をむかえる。

母のいない、はじめての誕生日。

第八章 宛てない道にて……

1

優奈は山へと入っていくのならかな道を登っていた。シルピーは優奈の周囲を飛び回っている。たまに上空に飛び上がり、行く先の安全を確認している。

すでに太陽は完全に山の向こう側へとその姿を隠している。道は公道で、街灯のほのかな灯りが二人の姿を照らしている。

さきほどまで、警察の者が二人ついて来ていたのだが、鬱陶しいのでシルピーが魔法で眠らせた。

山道を歩いている、といっても特に意味があるわけではない。ただ何となく来てしまったただけだ。どうやら上り坂のようだが、特に引き返す意味がなかったただけだ。何も宛てなどはないのだから。

学校の制服、スカート姿のままである。

インケン皇帝のため負傷をして、まだその翌々日だ。体を襲ってくる痛みは激しい。

精神状態も相変わらずで、ずっと無表情のままだ。何を思っているのか、見た目には全く分からない。

「ねえ、優奈、しっかりしてよ」

シルピーは優奈の周囲をまわりつくように羽ばたいている。

「たかが、二十五%が百%だっただけじゃない！」

優奈の表情に一瞬変化が表れた。だがそれは、決して良いものではなかった。

「一%たりとも、地球人の血が混じっていない……。優奈は微かではあったが、さらにその表情を暗くした。

「あたしなんか、自分の星、滅ぼされちゃったんだよ、あたし一人きりになっちゃったんだよ！」

自分の失言に気づいたものの、シルピーはただ優奈に元気になってもらいたかったただけなのだ。

それは優奈にも理解出来る。さぞ、辛い状態だと思う。

しかし優奈の場合は、自分の心の場所が非常に微妙な位置にある。種族、血統ということであれば、優奈は完全にあの皇帝の仲間であった。地球人ではないのだ。しかし優奈は当然彼らを味方とは思っていない。自分を地球の人間だと思いたい。だが今は、彼女がずっと暮らしてきた地球、ここの住人達からも迫害される立場になってしまった。

居場所がないのはシルピーも優奈も同じなのだ。仲間と呼べるものが全くいないのは、二人とも同じなのだ。しかも優奈の場合は、騙され、裏切られたショックがある。今までの自分が過ごしてきたことが全て、人を笑わせるための茶番の一幕だったのかと思うと悔しくて仕方がない。

ただ改めて考えると、同じような境遇の者が一緒にいることに少しほっとする。

「ごめん」

優奈は謝った。

シルピーの先ほどの台詞に直接謝ったわけではない。シルピーの境遇に慰められたという、自分の悪い感情に対して謝ったのだ。

分かれ道……

シルピーはふと何かを感じ、

「こつち……」

と右側の道に入った。

特に宛てはないのだ。優奈もそれに従う。

「あつち……」

と、今度は左の道。

「シルピー、あたし、なんだかあんたが悪魔に思えてきたよ」

ぼそりと呟く。

この胸にわだかまるもやもやとした感覚、これがじまったのは、シルピーが家族の前で口をすべらせたあの時からなのだ。ただ、冷静に考えるまでもなくそれはまったく関係ないことは分かる。事実

は事実として変わらないわけだし、それに結局は皇帝本人によって、優奈は正体を明かされてしまったのだから。

「ごめん」

また謝った。

「？」

だがシルピーは決して悪魔の導き手などではなかった。優奈はこれから、生涯忘れられない出会いを体験することになるのである。

いつしか公道からは完全にそれで、人が踏み固めて出来たような荒い道を歩いていった。シルピーの魔法による灯りがなければ、闇の中永遠に彷徨い歩くことになってしまう。

時折、木々の間から、麓の町灯りが見える。天の川のように、それは綺麗であつたが、さして優奈は興味が無いようだ。

学校の制服姿のまま家を出てしまったため、非常に寒い。ずっと歩いているというのに、少しも体があたたまってくることもなく、体はずっと細かく震えている。マフラーも、手袋もしていないし、コートも着ていない。手がかじかんでくる。

少し疲れて、足も痛くなってきたので、大きな木の根本で休むことにした。

「あたし、なんだか一人で馬鹿みたいなことやってるよな」

息をかけ、こすり、手を暖める。

シルピーは優奈に魔法をかけてやる。

「ほんとうはもう触媒があまりないんだけど……」

「あたたかい……ありがとう」

少しだけだが、優奈の体があたたまってきた。

優奈は、人の足元に気づいた。

「何をしてなさるのかね、こんなところで」

声をかけられた。

年をとった男の声だった。

懐中電灯の光が優奈の顔を照らした。

「女の子が、こんな暗い時間に何をしているんだ。危ないだろう。……おい、怪我だらけじゃないか！」

白髪頭の老人であった。中肉中背。顎髭を生やしている。獵師のような帽子をかぶっている。

優奈は眼帯をしており、しかも体中のいたるところに包帯を巻いている。肌も生傷だらけだ。

「髪の毛が……」

老人は呟いた。優奈の、真っ赤な髪の色に目を奪われていた。そして、おもむろにまた口を開く。

「はやく、家に帰りなさい。家族が心配するから」

「いいんです……どうでも」

優奈は自暴自棄気味に言う。

「家出かな……困ったもんだ。まさか家で虐待されたなんて言うんじゃないだろうな。……ここは寒くなるよ、凍え死んでしまふ」

「別に死んでも構わないもの」

「若い娘がそんなこと言うもんじゃないよ、うちに来なさい。体をあたためないと、おや、その小さいお前さん……」

シルピーのことを見た。

「新聞で見たことがある……あの妖精さんかね」

ということとは、あの赤毛の少女が、あのなんとかに乗ってた娘か……何かえらいことになっているようだなあ。怪我を見たときには、虐待されてる娘が家出でもしたのかと思ったが……まあ、そちらの

ほうがよっぽど問題か。

シルピーも、逆に老人の顔を見て何かを感じていた。

この人……近い人だ……その場所に、誰がいるのか分からないけど、優奈を連れて行きたい場所の近くに来ているんだ。

「優奈、おじいちゃんの言う通りにしなよ！ 優奈が死んだら、あたしはどうなっちゃうの？」

シルピーの激しい口調に、逆らうのが面倒なだけといった素振りで優奈は立ち上がった。

老人に道案内され、たどり着いたのは、特にどうということのない平凡な民家であった。

老人は山麓にある集落の、自警団の活動として夜道の巡回をしていたのだ。

老婆が出迎えてくれた。

それは和服を着た、昔はかなり美人であっただろうと思わせるような、そんな上品な老婆であった。七十歳くらいかと思われるが、背筋がぴんと張っており、すらりと美しい立ち姿であった。

「あ……」

優奈は思わず声をあげた。そして、同時に老婆も驚いていた。

老婆の髪の毛は、かなり白髪が交じっているとはいえ、色の残る部分の髪は炎の燃えるかのような深紅だったのである。

「おや、めずらしい。わたしとおなじ真っ赤な髪の毛の娘さんなんて。……染めてるのではなくて」

「地毛です」

優奈は呟く。

「そうなの。さあ、お入りなさい」

老婆は笑った。

優奈はまだ混乱の中にいた。

この屈託のない老婆に対してもどのような顔で、どのような気持ちで接すればいいのか分からず、優奈は相変わらず表情をつくることが出来なかった。

2

風呂は今沸かしている最中とのことで、まず暖かい食事を提供された。

にこやかな表情こそ作れなかったが、それでももてなしに対して最低限のお礼は述べた。

優奈はある種の有名人である。顔は知られていなくても、妖精と一緒にいる赤毛の少女、となれば、新聞やテレビをそこそこ見てい

る者ならば誰でも分かることであつた。それ故に、まったくそれらの記事で取り上げているような件について話さないのも不自然なので、ある程度は老夫婦も訊ねたが、あまり詮索はしなかった。とはいえ、お喋りシルピーが勝手にかなりたくさんの事を話してしまったが。

「こつちにも来たよなあ、空飛ぶ円盤。びつくりしたよな、お前」
「ええ、そうね」

「あと、皇帝とか言う奴が、空にどーんと映写機みたいに出てきた時もある」

「あ、え、ええ……」

優奈は、赤毛の老婆の表情をちらりと見た。老婆がその視線に気づくと、優奈は慌てるように視線をそらせた。

桧の風呂は豪華ホテルの豪華な個室のようで、とても気持ちのよいものだった。シルピーと一緒につかっている。

入浴剤の効果か、先ほどまでズキズキとしていた体の痛みが、今はそれほどでもない。

両の掌を見ると、充血してピンク色になっている。

しかし、その中に流れている血は……

優奈はため息をついた。

風呂から出ると、老婆が、新たな包帯を巻き直してくれた。

寝間着も貸してもらい、一泊させてもらうことになった。

優奈は、この老婆に話しかけようと思ったが、勇気が出なかった。言葉少なに、言われたことに応えるくらいだった。

それでも、この老婆といふことは、とても心地が良く、彼女は久しぶりに安らかな睡眠を取ることが出来た。

3

「熊だ！」

付近の住民が玄関を開け、息を切らせ、飛び込んできた。

去年の夏は台風が多く、餌を求めて熊や猿が麓まで降りてくるコースをよく見た。食い溜め出来なかった熊が、冬眠も出来ずに腹をすかせてやってきてしまったのだろうか。

「重さんが、重さんが熊に襲われている！」

優奈はためらわず駆け出していた。

「待て、わたしが猟銃を持っていく。お嬢ちゃんが行ったら怪我だけじゃすまんぞ」

「そんな暇ない！」

優奈は学校の制服姿で、普通のスニーカーで、風を切るような速度で山道を登って行く。全く息が切れない。速度が落ちない。そして、あつと言う間に、その場所に辿り着いた。

その熊は、今まさに老人を襲おうとしていた。どうやらその老人が重さんのようだ。

優奈は石を拾い、熊の顔めがけて投げつけた。

注意が優奈に向いた。

熊は威嚇のため、立ち上がり、優奈に向かって吼えた。

立ち上がると、その熊の背丈は優奈と同じくらいもあった。

優奈は怯えて逃げるどころか、平然とした顔で近づいていく。熊は再び吼え、優奈を攻撃しようとする腕を振り上げた。優奈はその瞬間に素早く踏み込み、その固そうな獣の腹に右の肘を打ち込んだ。

熊は絶叫し、あっけなく倒れた。

老人が銃を持ってかけつけてきた時には、すべて終わっていた。

「おじいちゃん、何か果物などないですか？ お腹すかせて降りてきただけだろうから」

目が覚めた熊。

優奈は果物を熊に向けてぽいと投げた。

熊はよほど空腹だったのか、その場で果物を食べ始めた。

食べ終わると、優奈に近寄り、大きな舌でその顔を舐めた。そして山へと引き返していった。

「おじょうちゃん、いったい何者なんだい……あ」

ここで、老人は、昨日の宙に浮かんだ皇帝の喋っていたこと、そしてその後の騒動、そして今朝の新聞の内容などを思い出した。そう、インケン星人の娘だということを。皇帝の娘だということを。不思議な能力があっても、何らおかしくはないわけか。

「おじいさん、あたし、ずっとここにいちゃ駄目？」

優奈は老人の問いには答えなかった。

老人は、優奈のその眼差しを見ているうちに、自分の望まぬ様々な辛いことに巻き込まれているこの赤毛の少女が可愛そうになった、そして彼女の事を愛おしく感じた。それが故に、本気で優奈のため思い、言った。

「お前さんを迎え入れてくれるところに帰るべきだよ」

「誰も迎え入れてくれる人なんていない……」

「何か悪いことでもしてきたのかな？」

優奈は首を横に振った。

悪いことなんて、何もしていない。

「ならば、堂々と生きていけばいいじゃないか。簡単なことだ」

空一面から襲い来るような耳をつんざくかの音が、優奈の鼓膜をびりびりと震わせた。音がさらに大きくなる。自衛隊の戦闘機編隊だ。

さらに向こうにはUFOの姿が見えた。

空中での格闘戦が始まった。

牧歌的な風景の上空で行われているこの攻防は、国や星の存亡をかけたもののはずなのに、どうにも見るものに緊迫感を与えない。

もちろん家を焼き尽くされ、大怪我を負うなど、被害にあった当事者の感情はまた別であろうが。

爆音。

そして光が四散する。

自衛隊の飛行機ばかりが、真っ黒な煙をあげて、一方的に撃墜されていく。

なんだか雰囲気妙だ。

普段と違う。

「そうか……エグゼリオンがないんだ……」

爆撃の下で、市民達が犠牲になっていないだろうか。

優奈は頬をおさえた。自分に投げつけられた石……。まだ、痣となりその痕は生々しく残っている。

クラスメイト達の顔が浮かぶ。

自分に詰めより激しい表情で糾弾してくる。

優奈は頭を抱えた。

駄目だ……

駄目だ、駄目だ！

これじゃあ、おんなじだ。

ここで逃げちゃ、三年前と同じだ……

いきなり、優奈は大きく口を開き、叫んだ。

体内にあるものすべてを外に吐き出してしまいたかった。

肺の中の酸素が全てなくなるかの勢いで、叫び続けた。

老人、そしてやっと夫のもとへ駆けつけてきた、老婆の顔を見る。

その瞬間、優奈の心のもやもやが完全に氷塊した。

優奈に笑顔が戻った。

「あたしは……みんなが大好きなんです！」

こんな簡単なことに、何で今まで気づかなかったのだろう。

護りたい。

街を。

みんなを。

みんなの未来を。

優奈は、左腕の袖をまくった。

「そうか、通信機……」

優奈は思わず、腕時計型通信機を感情にまかせて踏みつぶしてしまったことを後悔した。これでは家族と連絡が取れない。自分の場所を知らせることも、エグゼリオンを呼ぶことも出来ない。

だが、その時、奇跡は起きた。

激しい振動が……

木々がこすれあい、まるで何か楽器を奏でるかのような音をたてはじめた。

地が激しく揺れた。本来立つてられぬほど、目に見えるほどに右に左に風景が揺れているというのに、優奈は平然と二本の足で立っている。老夫婦達も、自らが全く転ばずに立っていていられることに不思議な感覚を味わっていた。

地が裂けた。

その激しい衝撃は、優奈達の目の前を瞬時にして走り、どこからどこまで続いているのか分からないほどの裂け目を地面に生じさせた。亀裂のこちら側と向こう側とが、どんどん離れ、幅が広がっていく。向こう側に見える大きな山が、まるで移動しているかのようだ。

その亀裂の中から陽光に照らされ輝く鋼の巨人、ガイア・エグゼリオンがその姿を現したのである。

だが、優奈は通信機を持っていない。エグゼリオンを呼ぶことも、家族に連絡を取ることも出来ないはずなのだ。

エグゼリオンは思念で操縦することが出来る。ただそれも、機体内部に乗り込んだ後の話だ。みんなを護りたいという優奈の強烈な念が届いたのか、それともまた別の何かが……

ただ、いずれにせよ言えることは、今ひとつの奇跡が起きたということだ。

優奈とシルピーは開いた胸部から、エグゼリオンに乗り込んだ。

エグゼリオンが完全に地面から姿を出すと、今度はゆっくりと地割れがもとの状態に戻っていく。フィルムを逆回しにしているような、不思議な光景だった。一分足らずで寸分変わらない状態に戻ってしまった。

「ありやあああ」

と老人はびっくりしている。

隣の老婆は、にこにこ笑っていた。

そして、優奈に向けてブイサインをしたのである。

その全てを包み込むような笑みに、優奈は全てを理解した。

「あたし、ここに来てよかった!」

優奈は元気よく叫んだ。

「おじいさん、おばあさんに会えて、よかった!」

「気をつけてな!」

老人が叫ぶ。

優奈は赤い髪をなびかせながら、風にとろけるような柔らかな微笑を浮かべた。

胸部の装甲板がしまった。

優奈は眼帯を投げ捨て、頭や腕の包帯を投げ捨てた。もうほとんど痛みはない。

優奈の脳波を受け、エグゼリオンのシステムが起動する。優奈の頭の中に、どつと大量の文字が雪崩れ込んで来る。

普段は何秒かかかるのだが、今の優奈は一瞬にしてエグゼリオンと同調した。

人にどう思われているか。嫌われていないか。そんなことに捉われていた自分が恥ずかしかった。そうではないのだ。自分がその人をどう思っかなんだ。その人を護りたいと思えるかどうかなんだ。そして、護りたいと思える人が多いほど、その人は幸せなんだ。

「行くよ。エグゼリオン!」

鋼の巨人は鳥のように軽々と、上空へと飛翔した。老夫婦の姿はすぐに点となり、見えなくなった。

4

先生達の大きな声も、生徒達の不安なざわめきにむなしくかき消されてしまう。

全校生徒、校庭への避難行動中。校舎からどんどん生徒が出てくる。今までも何度となく襲われているが、実際、被害はほとんどなく、どこかのんびりとしたムードがあった。今は違う。宇宙人の地

球への大攻勢。しかも、被害は地球側、自衛隊のほうにばかり出ている、この圧倒的な戦力差。

そしてついにこの学校へも魔の手は襲ってきた。

四機の編隊であった。ジェット戦闘機を撃墜したそのままの勢いで、高度を下げ、この校舎をそして生徒達を狙ってきたのである。

一機から放たれた光線が、校舎を破壊、壁が崩れて下に落ち始めた。

生徒達は自らの頭上に落ちてくる岩のような巨大な物体に思わず悲鳴を上げた。

残るUFOも同様の攻撃を行うつもりだったのだろう。地球人に圧倒的な力の差を思い知らせてやるつもりだったのだろう。だが彼らの思惑とその結果とは全く反対のものとなった。

まるであらかじめ透明な状態でそこに存在でもしていたかのように、すうつと空中にその姿を現した鋼の巨人が一瞬にして回し蹴りで四機を吹っ飛ばしたのである。すでにその一瞬前の砲撃によって壁が落下していたが、優奈は瞬時にそれに気づき、ガイア・エグゼリオンの巨体を、地面と、生徒達、それと落下物との間にすべりこませ、四つんばいの体勢をとった。崩れる壁は、エグゼリオンの背中へと激しい音をたて、落ちた。

優奈とエグゼリオンは同調している。優奈は背中に感じる激痛に顔を歪めた。

「今のうち、はやく、避難して」

エグゼリオンの胴体にある拡声器より、優奈の声が聞こえた。

急造のトンネルを通り抜け、残りの生徒達全員の避難が終わった。

「怪我はなかった？」

優奈はエグゼリオンの中から訊ねる。

「ふざけんなっ」

生徒のうちの一人が歩み出て、怒りの感情を鋼の巨人へとぶつけた。

さらに別の生徒が続く、

「グルになつてないと思わせたいために……わざわざ、遅れて、もったいぶって現れやがって！」

「それで今度はどこを壊すんだ、どこを征服するつもりなんだ」

「迷わすようなことしないでいいからよ、敵なら敵でいいじゃねーか。攻撃しろよ！ おれ達を殺せよ」

「だまされねーぞ」

エグゼリオンの胸部扉が開き、制服姿の優奈が出てきて、扉の上に立った。

一同、何がおこるのかと静まった。

優奈はみな顔を見て、安堵の笑みを浮かべたのである。

「みんな怪我がなさそうで、よかった。じゃ、あたし行くから」

まだ遙か後方では、インケン星軍対自衛隊の激しい戦いが続いている。

加勢しなければ。

エグゼリオンは飛翔した。

「なんだよ……あれは」

「まだ騙せてると思ってるのかよ」

「何が皇帝の娘だよ」

「冗談じゃないわよ」

と、また思い思い不平を漏らし始めた。

「あんた達、いい加減に目を覚ましなさいよね！」

ざわめきを一括したのは、吉波瑠璃子の轟き渡るような高い声であつた。

しん、となつたところにさらに言葉を続ける。

「インケン皇帝だか何だか知らないけど、何をみんな揃いも揃って踊らされているのよ。なんですって？ 緋鷹さんが悪の宇宙人で我々を騙している？ あんな単純な、何も考えてないような、素っ頓狂な顔の娘に騙される人間なんて、この世に一人もいやしないわよ！ 逆に、人を信じて騙されて大損するのはああいふタイプよ！

あの娘は、普通に勉強して、普通に就職して、普通に結婚して、

ささやかな幸せを手に入れることだけを考えてるの！ だけど、人のためにつて、ああやって嫌いな戦いをしてるんじゃない！ ボロボロになりながら戦ってんじゃない！」

「吉波……」

「吉波さん……」

金城君、好子は吉波瑠璃子の唐突な発言に、驚いていた。今まさに自分が言おうとしていたことを言われてしまった。

「そうだつ、おれも緋鷹のことを信じているぞ！」

金城は叫んだ。

「あたしだつて、疑ったことなんでこれっぽっちもない！ ずっと……ずっと、親友だったんだから！」

追うように好子も叫んだ。ずっとずっと思っていたことを。

そして、悔いた。周囲の雰囲気が雰囲気であつたために優奈を擁護することが出来なかつたとはいえ、そういう時だからこそ、自分が優奈のために何かをすべきではなかつたのか。

「おれも信じるぜ」

「おれも自分の生徒を信じてるぞー、緋鷹！」

藤代先生は両腕をあげて叫んだ。

「頑張つて優奈！」

「緋鷹は地球のために戦っているんだ！」

クラスメイト達、そして部活、委員会など優奈を知っている者達はみな自分のことを恥じた。考えてみるまでもない。自分達の記憶の中にある優奈を、少しでも思い出してみればよかつたのだ。

天真爛漫

純粹無垢

単細胞（これは吉波さんの思い出）

皆べつに心から疑っていたわけではなかつたのだ。信じたかつた。

しかし心弱く、周囲の雰囲気押し流されてしまっていたのだ。今、その氷の枷は完全に融けた。

優奈は彼らに人を信じることの尊さを教えてくれた。

そのようなやりとりなど優奈の知るよしもなかったことだが、どちらにせよ優奈の気持ち、彼らのために戦おうという気持ちは何ら変わるものではなかった。自分が人に好かれているか信じられているかではなく、自分がその人を好きか、信じられるかのほうがよっぽど大切なことなんだ。優奈はそう知ってしまったから。

さて、いよいよ最後の戦いに挑む巨人ガイア・エグゼリオン。

次回、最終章で、優奈は、そしてエグゼリオンは、さらなる奇跡を起こすことになる！

最終章 答えは風の中に

1

エグゼリオンのセンサーが取得する様々な情報が、全方位モニターに文字や図形として映る場合と、思念という形で操縦者に対して送られてくる場合とがある。

全方位モニターに囲まれていると、機体の中にいる実感に乏しくなり、まるで常に空中に浮いているような気がする。訓練をしていないと、自分がどこにいるのかさえ分からなくなってしまう。ただし、機体と操縦者との同調率が高ければ、エグゼリオンの視界として物を見ることが出来るので、どうということはない。

とはいえやはり透明な球体に乗って浮いているという奇妙な感覚は常に体を包み、スカート姿で乗ってしまう時などは、足下が気になって仕方がない。外にいる感覚といっても、見えているのは単なるモニター映像なのだから、自分の姿が相手に見られてしまうことはない。分かつてはいるが、自分の真下に人がいると、やっぱり何だか恥ずかしい。今も学校の制服姿、だが今はそれどころではなかった。

緋鷹家に被弾！

エグゼリオンからの情報思念が、どつと自分の脳裏に流れ込んで来た。

宙に静止していたエグゼリオンは、急に重力に引かれ、落下をはじめた。もちなおし、ふんばるように、また宙に静止した。優奈の焦りが機体同調率の低下を招いたのだ。

気を持ち直すと、優奈はエグゼリオンの機体を次元転送させた。宙に融けるようにエグゼリオンの巨体が消滅したのと同時に、その巨体は緋鷹家の上空へと現れていた。

そして見た。

優奈は目を見開いた。

そして、自分の目を疑った。

生まれてからのこの十六年、これほどまでの衝撃を受けたことはなかった。

あまりの驚きに、叫び声すら出なかった。ただ、ぽかんと口を開けているだけだった。

血液が逆流したかのような電撃が体を襲った。

体が冷たくなってきた。

指先が震えてきた。

自分の育ってきた……家族との思い出のたくさん詰まっていた家が、あとかたもなく消失していたのである。

爆撃の被害はこの辺り一帯に及んでいた。

爆風にやられた残骸が転がっている。

優奈の全身は震えていた。

「ばあちゃん……」

謝りたかったのに……

自分を騙しているのではないか、と祖母にぶつけた酷い態度に対して。

たとえロボットだとしても、今まで優奈にしてきてくれた優しい気遣いは本物だったのに。

ヨネ、源三郎達から分けてもらった暖かい気持ちへの、自分の感謝の気持ちは本物だったことに気づいた。だから謝りたかった。やりなおしたかった。それなのに……

宙に皇帝の像が浮かんだ。

また、背後に裏方が走り回っている。こういう映像が映る時は、皇帝は一番上空にある自分の戦艦の中なのだ。

「我に逆らうものの末路だ。……ふふ、我が娘よ、考えは変わったか？ 早く我がもとへ参れ！」

皇帝はマントをひるがえし、偉そうに言った。

「ふざけるな……」

口がかすかに動いただけの、小さな呟き。しかしその強大な思念に、エグゼリオンのレベルゲージは振り切って、計測不能になっていた。

「……今まで、こんなに人を恨んだことはない」

優奈は全方位モニターに映る、皇帝の巨大なビジョンを睨み付けた。皇帝はまったく意に返す様子も無く……いや、逆に楽しそうな態度であった。

「ほほう、ならばこれはどうだ。楽しんでもらえるといいが」

青空に……皇帝の映像の隣に、また別の映像が浮かぶ。

背景から、華鳴駅にあるデパート付近であることが分かる。

デパートの壁に、ヨネ、そして遠山夫妻が宙づりになっていた。

「どうということ……」

何が何だか分からなかった。

「合成ではないぞ。来てみれば分かる」

「優奈、行ってみよう」

シルピーの言葉に、優奈はエグゼリオンを次元転送させた。巨体は、駅上空へとその姿を移した。

そして確かにそこには屋上からつるされたヨネ達の姿があったのである。

「優奈……無様にも捕まっちゃったよ」

ヨネがさも情けなさそうに言う。

「優奈ちゃん……」

由利香、そして伸也もいる。

「優奈ちゃん、ぼ、ぼくらに、か、かまわないで戦って!」
伸也が叫ぶ。

その叫びをかきけすように、皇帝は声をあげて笑った。

「少しでも動いてみる。こいつらにしかけた爆弾がどうなるか……」

優奈はエグゼリオンを動かすことが出来なかった。

何をすればいいのか、何も考え付かなかった。

狭い機体の中、焦りと絶望が全身を包んだ。
激しい振動。

右肩に被弾。 損傷率四%。

「ぐ……」

優奈の右肩に痛みが走る。

UFOの砲撃だ。 普段ならば何なく避けることが出来るのだが、
今の優奈に避けることなど出来るはずがなかった。

胸部被弾

左脚部損傷

冷却機能低下

主出力低下

様々な方向からエグゼリオンは狙い打ちにされた。 優奈は激痛に
堪えた。

「このままじゃ…… どうすればいいの…… みんなを守れないよ……
ごめん。 …… おとうちゃん！」

「あたしが、あたしが行って、爆弾を外す！」

この砲撃の中、シルピーはすつと優奈の隣から姿を消し、エグゼ
リオンの外へと飛び出していた。

「無茶だよ、シルピー、危ない！ 死にたいの？」

砲撃の雨霰の中、必死にヨネ達のもとへと向かうシルピー。

「シルピーちゃん、危ない、こないで！」

由利香が叫ぶ。

シルピーは構わず向かう。 だがしかし、シルピーの体はヨネや由
利香の体に取り付くことは出来なかった。 何やら繭状に魔法障壁が
張っており、あっけなくはじき返されてしまったのである。 電撃を
受けたようなショックに意識を失い、落ちかけるが、何とか意識を
保ち、再度挑んだ。

「なんでそんなことをしてくれるの……」

「日本には一宿なんとかのギリ、とかいう言葉があるんでしょ、そ
れだよ」

今度は取り付くのではなく、やや離れた場所から魔法による力を飛ばした。しかし、無駄であった。

皇帝は優奈にシルピーがついていることを知っている。魔法能力を持つものへの対策は抜かりない。シルピーがかかる魔法は全て障壁にはじき返されてしまっただけだった。直接手で取り除こうにも、近づくことが出来ない。

振り返ると、エグゼリオンの被害はさらに酷いものになっていた。いっさいの身動きをしないため、好きなように攻撃をされていた。装甲が吹き飛び、火花がちっっている。ところどころ回線がショートしているのだ。

優奈の意識はどんどん薄れていた。優奈だから意識を保っているのだ。

だが、さすがに、もう限界だ……

優奈は暗闇の中に……落ちなかった。次の瞬間のヨネの行動が、優奈の意識を呼び戻したからである。

「戦うんだよ、優奈！」

ヨネの体が爆発したのだ。

魔法障壁内部の小さな範囲だが、その激しい爆発はヨネの体を粉微塵に吹き飛ばした。障壁がネットのような役割をし、そこに破片がぶらさがるようにひっかかっていたが、やがて障壁は消失した。ヨネを形作っていた物質は完全に破片となり、ぼろぼろと落下していった。

「あ……ああ……」

爆弾が爆発したからではない……きつと、自爆したんだ。瞬時に優奈はそう理解していた。

「エグゼリオンに戻るのよ、シルピーちゃん。優奈を助けてあげて」「優奈ちゃん、インケーン星のためじゃなくいい。地球のため……いや、自分のために、戦ってくれ」

由利香が、そして伸也の体がヨネと同じように爆発四散した。優奈は絶叫した。

全く言葉になっていなかった。獣のような、激しく、そして悲しい叫びであった。いつまでもその咆吼をあげていた。

しかし損傷を受けすぎた機体は、ついには重力に逆らいきれなくなり、むなしく、ゆっくりと落下していく。

「これでお前は一人。もう地球で暮らすことにも未練はなかるう」
皇帝の笑い声。

シルピーは涙をこらえ、落下していくエグゼリオンの中に戻った。
優奈が心配だったから。

「優奈……」

シルピーは優奈の顔をのぞきこむ。優奈の口がかすかに動いていた。

「……さない。……絶対に、許さない……絶対に許さない！」

優奈の体が光った。

それはシルピーにのみ見える人のオーラだったのか。

青く輝く炎のような、眩しい光に包まれた優奈。

「ガイア・エグゼリオン！ 疾風ファイナルモード……」

優奈の叫びとともに、エグゼリオンは変形を始めた。変形といっても、全身を覆う装甲板が移動するなど微々たるもので、スリムなシルエット自体は相変わらずだ。ただ、いかにも機械といったような複雑な部品が、ところどころあらわになっている。エグゼリオンの装甲はダメージ軽減のためだけでなく、攻撃力を抑える働きもある。今、それが取っ払われ、まさに全身が武器という形状となっていた。

優奈同様に、エグゼリオンの全身も青い光に包まれる。

優奈の真っ赤な髪の毛は、全てを焼き尽くす地獄の炎のように、より真っ赤に燃え上がった。

爆風が巻き起こった。

「うなれ！ 兆倍砲！」

優奈の体を包むオーラが爆発した。

一瞬、閃光に全てが白色に染まった。

エグゼリオンの全身から無数の光が触手のように放たれた瞬間、インケーン星人の数千機のUFO、人型兵器、そして数十の戦艦が爆発した。

UFOもギューカツシュも煙を吹き出しながらも飛行を続けるものの、武器が完全に破壊されてしまっている。まだ飛べるうちに戦艦に戻るよりなかった。

一瞬にして相手を次元の彼方へ送り込むことなどわけない。しかし兵士には別に恨みはない。そこまでのことはしたくなかった。自分らの星におとなしく戻ってもらいたかった。

しかし、あの男は……

優奈は、おそらく皇帝が乗っているであろう最上空、ほとんど宇宙上にいる巨大戦艦を見上げていた。その戦艦もすでに戦闘力は失っており、実際、消化活動やらで中は大忙しだった。

優奈の頬はやつれていた。

肌も乾燥して、ところどころささくれてしまい、ぼろぼろになってしまっている。それに加えて、数日前の戦いの生傷がまだ治っていないので、酷い見た目である。

兆倍砲　肌のささくれは、凄まじい威力を持った武器を使った代償である。そして、顔のやつれは、殺さぬように機体の戦闘力のみを奪うという神業を行ったがための精神力の消耗であった。

優奈は覚悟を決めた。

そして、目を閉じた。思念をエグゼリオンへ送る。

エグゼリオンの操縦席の中から、優奈の姿は消えうせた。シルピの姿だけが残った。

「優奈、どこ行っただの……まさか！」

2

一瞬前まで何もなかった空間に、優奈の姿はあった。エグゼリオンから単体、次元転送で優奈は戦艦の中へと移動してきた。

目の前にはインケン皇帝が立っていた。

「おお、ついに、我とともに来る決心をしたか」

皇帝は喜びの表情を隠さない。

「寝言は寝てから言え」

優奈はにべもない。

「お前に一つ聞きたくてここに来た。……昔、この地球に、日本に
来たことは？」

「ある」

優奈の問いに、皇帝は即答した。

「まだ平民だった頃。……地球時間でいう五十年ほど前のことが。
探索隊の一人として、この星に来たことがある。わたしは主にこの
あたりの調査を担当した」

「やっぱり……その想いが、あたしを生んだわけか……」

優奈の顔は少しすっきりしたようだった。

「何を言っているのだ、我が娘よ。……ま、まさか……では、あの
時の……あの麗人が……」

やはり皇帝自身も優奈の出生の秘密までは知らなかったのか。

「それだけ聞ければいい。命までとらないから、はやく全軍撤退さ
せて、自分らの星に帰りなよ。それじゃ」

と立ち去りかけた優奈だったが、ふと足を止め数秒の沈黙、いき
なり振り向きざまに皇帝の腹に拳を叩き込んだ。

「うむ！」

と唸って皇帝はぐったりしてしまふ。

「やっぱり……」

優奈は見た。

皇帝の首にあるコントロール装置らしきものを。

そしてその機械を取りのぞくと、床に落とし、踏みつぶした。

「どんなことがあったのかは知らないけど、あの人に惚れた人なら
ば……悪人なはず……ないよね」

優奈は微笑した。

それにヨネばあちゃんが言ってた。インケン星人は平和を愛する種族だと。

「合格だ」

どこからともなく低い声が響いた。

「誰？」

優奈はあたりを見回す。

「見事である。インケン星人初めての女、皇帝の娘よ……」

どこかで誰かが喋っているのか、それとも脳内に誰かの思念が飛び込んできているのか、優奈には分からなかった。ただ言えるのは、その声がたまらなく不快であつたことだ。

「何が……合格よ。そんなことのために、こんなことを……地球を！」

地球侵略という目的もちろんあつたのだろうが、優奈を試すことも目的の一つだったのだろう。

「我が娘、フィ・ルよ……」

優奈に腹を殴られのびていた皇帝だが、ようやく目覚め、よろけながら立ち上がった。

「今、お前の頭の中に入ってきたのは、我が星を乗っ取った中央コンピュータの意志だ。情けないことに、我々はコンピュータに支配されてしまっているのだ。皇帝なぞは、平民の中から、たまたまわたくしが選ばれたに過ぎない。我々の星には、本来、階級などというものはない。このままこのような邪悪な意志をほうつておけば、その害悪はいずれ宇宙全体に及ぶだろう。我々インケンが生み出してしまったことは、それ自体インケンの罪悪ではある。ただ、もうどうしようもない。我々の力では。フィ・ルよ、インケン星、いや宇宙のためにその」

「黙れ」

抑揚のまったくないその声と同時に、皇帝の全身が黒いモヤのようなものに包まれた。

どのような苦痛が襲ったのか、皇帝は絶叫を上げ、倒れた。

「インケーン星人は夢から生まれ、夢に帰る。さらば、フィ・ルよ……」
たどたどしい口調でそれだけ言うと、皇帝の姿は溶け、消えていった。

死んだ……。夢に帰るなどと言われても、優奈にとって目の前で起きたことは人の死に違いない。

優奈は呆然としている。

本当の父さん……

実感はまったくわかない。しかし、それは間違いのない事実なのであろう。そんな実父の消滅を目の当たりにした優奈の気持ちは、錯乱こそしないものの平静でいられるものではなかった。

また、あの不快な声が響く。

「さて、フィ・ルよ、前皇帝、お前の愚かな父親はこの通り消滅した。従って、自動的に皇位はお前に継承された。お前がインケーン星の皇帝である」

「誰でもいいんですよ。皇帝なんて。平民から選んでるじゃん。女が初めてだから面白ってだけとか。……ふざけないでよ。地球に……あたし達の星に、もう構わないで。何が皇帝よ。そんなくたないことに興味なんかないんだから」

「ならば死ね！」

爆風で部屋が吹き飛び、一瞬にして優奈は戦艦の外へと放り出されていった。

そう、確かにこの邪悪な意志を持つコンピュータは、優奈に皇帝を継がせることに固執しているわけではなかった。すでにインケーン星の支配は確固たるものとなっているのだから。他の惑星を侵略するにあたり、武力の誇示だけでなく、インケーン星に女性の生まれた奇跡を利用しようという計算があった。ただそれだけであった。

意のままにならない優奈には、残酷な処刑が待っていた。

眼下に広がる巨大な地球が、どんどん大きくなっていく。

高度数万メートルはある。

落下していく。

息が出来ない。

意識が朦朧としてくる。

そんな薄れていく意識の中で思ったのは、みんなのことだった。

長い間自分を育ててくれた家族。

商店街の人々。

近くの悪ガキ達。

クラスの仲間達。

好子の顔が浮かぶ。

金城君、波吉さんの顔が浮かぶ。

そして……

「会いたい……」

薄れていく意識の中で見たものは、ガイア・エグゼリオンの姿であつた。

「エグ……ゼリオン………？」

胸部扉が開き、中に優奈の体は吸い込まれていった。

「優奈！」

シルピーが叫ぶ。

「まさかシルピーが……エグゼリオンを？」

シルピーは首を横に振る。

「大丈夫かい、優奈」

ヨネの声。

「ばあちゃん、なんで……生きて……」

「おう、優奈！」

さらに、聞き慣れた、そしてもう二度と聞くことはないと思つていた声が、

「おとうちゃん！」

それは源三郎の声であつた。

そして、他のみんなの声が聞こえてきた。

「伸也さん、由利香さん、おじいちゃんも……」

「優奈、わたしもどんなにあなたと話したかったか……」

「おかあさん！」

数年前に死んだ三智子の声だった。

みんなの記憶回路は、エグゼリオンの中にあつたのだ。機械の体を失いはしたものの、優奈との記憶がエグゼリオンの中に残っていたのである。

「泣いてんじゃねえよ、優奈、バカ」

「だって……だって、おとうちゃん……」

みんなとの再会が出来たことは嬉しかったが、優奈は反面寂しさも覚えた。生身の人間は自分だけ。しかも、彼らはみな機体を失い、記憶だけの存在となってしまうているのだ。

「……おとうちゃんに、また遊んでもらいたい。……いっぱい勉強の邪魔されたい」

「うーん、じゃあ、また、体でも作るか」

「そ、そうだよ！ おとうちゃんだけじゃない、もう、おじいちゃんも、お母さんも、何も演じる必要ないんだから、戻ればいいんだよ。また、もとの通りに戻ればいいんだよ！ だいたい、あたしはまだ未成年のか弱い女の子なんだからね。一人残すなんて、酷いよ。ちゃんと育ててくれないと、一生恨むんだからね」

みんなの笑い声が聞こえた。

「分かった分かった、優奈。落ち着いたら、家族みんなで考えようぜ」

源三郎の声だ。

家族……みんなで。

優奈は胸の奥になんと言つてよいのか分からない熱いものを感じた。

「優奈、いよいよ、この物語を終わらせる時だよ」

ヨネの声。

「分かつてる。……これで、全てを終わらせる」

優奈は目を閉じた。

エグゼリオンとの同調率が急上昇する。

エグゼリオンの機能に自分の五感を全てまかせた。

今、優奈はエグゼリオンそのものであった。

何かを発見したのか、優奈は天空のある一点を凝視していた。

目を開く。

拳を力強く握り締めた。

「みんなの愛を受けて無限大にパワーアップした優奈と！」

優奈の叫びと同時に、その全身が青い炎に包まれた。真っ赤な髪の毛が逆立つように激しくなびく。

「そしてみんなの作ったこのガイア・エグゼリオンで！」

エグゼリオンの体が青い光に包まれた。

「疾風怒濤の究極最強ファイナルモード！ 次元転送兆倍砲！！！」
爆音！

それは超新星を間近に見るかのような、大爆発であった。

エグゼリオンから放たれた強大なエネルギーの爆発であった。

その激しいパワーは光となり、濁流をかけのぼる龍のように天へのぼっていく。

そしてその光は、空にぽっかりあいた空間、次元の裂け目へと飲み込まれていった。

がつくりと膝を落とす優奈。肩で大きく呼吸をしている。持っている力の、全てを使い果たした。

光すら到達するのに何百万年もかかるような遙か遠くで起きている出来事を、優奈は確信していた。

「これで……インケン星に平和は戻るはず……まあ、あたしは行くつもりないけどね。あたしの星は、ここだもの」

そして優奈は少し寂しげな表情を見せる。

「でもあたしには、戻れる場所が……」

「そんなことはないよ。見てごらん」

ヨネの声にふと学校の方角を見ると、クラスの生徒達がみな手を振っていた。

しきりに何かを叫んでいた。

まだ遠い。集音力を上げてでも低く唸る風の音を拾っただけだろう。しかし、声など聞く必要はなかった。

彼らのその表情がすべてを物語っていたのだから。

優奈の頬を一条の涙が伝った。

あたしには……まだ、戻れるところがあるんだ……
こんなに嬉しいことはなかった。

「行くよ、エグゼリオン！ みんなのところへ！」
そして、エグゼリオンは風になった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2582f/>

疾風! ガイアエグゼリオン

2010年10月8日15時43分発行